＜様式＞

学校名	山形市立第一小学校 山形市本町一丁目５番２４号 TEL622-0651　FAX633-9301	校　長	斎藤　隆史
		研究主任	井上　桂子

研究主題

くらしと学びをつくる子どもの育成（5 年次）

研究主題設定の理由

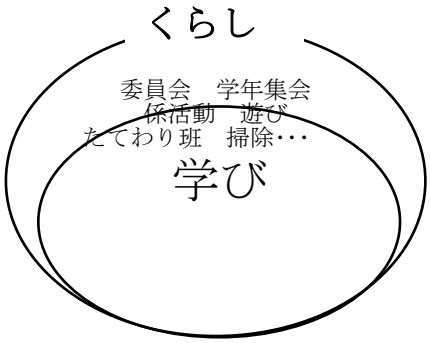
教育目標　体・徳・共・知・美の調和のとれた人間性と確かな学力を身につけた児童を育成する

教育目標達成に向かう学校の姿
違いを認め、切磋琢磨しながら誰もが成長できる学校
教育目標達成に向かう子どもの姿（＝研究主題化）
くらしと学びをつくる子ども

くらしと学びの中で一貫する態度
○自分で考える
○みんなにも自分にもやさしく
○一歩ふみ出す

学校における「くらし」の大部分は、行事を含めた日々の授業（「学び」）で占められており、密接に関わり合っている。

本校では、「子ども達が自分でよりよいくらしをつくること」を目指しているため、昨年度の研究の軸である個別最適な学びと協働的な学びの往還を通して、今年度も児童の主体性をさらに高めたいと考え、研究主題を設定した。



研究の重点

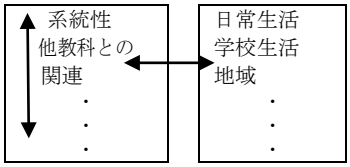
①児童の見取り方

・授業や活動における児童の言動をつぶさに観察したり、振り返りを確認したりすることで、児童の学びの様子を捉え、授業改善に生かす。→見取り方のポイントの活用

・「きくこと」を学年に応じたレベルで設定し、児童同士の関わりの広がりを捉える。

②つけたい力を明確にした授業

児童の資質能力を育成するために、学習指導要領に立ち戻りながら学びのつながりを意識した学習指導計画や教材開発を行う。



③ねらいを定めたカリキュラム・マネジメント

教科、行事、特別活動などのつながりが児童にとって効果的な活動の流れになるように、研究日などを利用して定期的なカリ・マネ表の見直しを行う。

研究の内容・方法

		研究授業	指導助言	事前研	参観者	事後研運営
通常学級	大研	7月：自由進度 9月：一斉授業 12月：自由進度	佐野亮子先生 森田智幸先生 奈須正裕先生 佐野亮子先生	学年部 推進部	全員	推進部
	小研	大研をしない人		学年部	学年部＋任意	学年部
特支		参観/記録動画		特支	交流学級担任＋任意	特支
ことば		記録動画		ことば	全員研修	ことば

研究の計画

日時	内容	備考
4月12日（木）	推進委員会①	今年度の方針確認 授業者の選定
4月15日（月）	研究全体会①	
5月中	カリキュラム・マネジメント表（学級経営案）の作成	
5月～6月中旬	大研①の事前研究会	
7月8日（月）	大研（兼 単年度委嘱公開）① 単元内自由進度学習 →小研①	学芸大：佐野亮子先生
7月～12月	特別支援学級研究授業 言語通級研究授業 通常学級の小研	
夏休み	NRTテスト、全国学テ分析	
7月～8月上旬	大研②の事前研究会 職員研修	
9月5日（木）	大研（兼 単年度委嘱公開）② 一斉授業 →全学級通覧	山形大：森田智幸先生
10月～11月中旬	大研③の事前研究会	
12月6日（金）	大研（兼 単年度委嘱公開）③ 単元内自由進度学習 →小研③	上智大：奈須正裕先生 学芸大：佐野亮子先生
冬休み中	研究集録準備	
1月8日（水）	今年度のまとめ、来年度の方針	
1月末	研究集録完成	

※研究日：カリ・マネの見直し、授業・研究準備を行う

＜様式＞

<table>
<tr><td rowspan="2">学校名</td><td rowspan="2">山形市立第二小学校
山形市香澄町三丁目９番38号
℡　023－622-0652　　fax023－633－9310</td><td>校　長</td><td>大沼　清司</td></tr>
<tr><td>研究主任</td><td>石川　南</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成（2年次）</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">本校では、学校教育目標を「輝く未来の星　ふじかげのこどもを育成する」、重点目標を「生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成」と掲げている。「生き生きと表現し合う」とは、自分の思いや考えをもち、相手や状況に応じて表現したり、友達の多様な考えに触れたりして学び合うことであり、主体的な学びを通して「社会や生活の様々な変化を前向きに受け止め、自他ともに価値ある存在として尊重し、協働しながら様々な課題を乗り越え、豊かな生活を主体的に作り出す子ども」の育成を目指している。こうした力はこれからの時代を生きていく子どもたちにとって必要な力であり、日々の授業の中で、育てていくことが大切な力である。
昨年度は１年次として、「心が動く課題の設定」「表現し合う楽しさを感じられる関わり合いの場や設定の工夫」「学ぶ意義や喜びを感じられるまとめ、ふり返りの充実」の３つの視点で手立てを考え、授業実践を行ってきた。子どもがやってみたいと思うような課題づくりや、自己判断／自己決定のできる場の設定などを通して、子どもたちが意欲的に学ぶ姿が見られる場面もあったが、単元のゴールや見通しが明確になっていなかったり、話し合う必要感のない交流になってしまったりして、子どもが考えを深めることができない場面もあった。これらの授業を通して、私たちは、子ども主体の学びの大切さを改めて実感し、年度末の研究全体会では「子ども主体の授業」とはどういう授業か、学年部ごとに具体的な授業像を話し合い共有した。さらに次年度に向けて、子どもたちに次の４つの資質・能力を高めることが大切であると確認した。
○「思いやりの心」：違いを認め合い、自他ともに尊重しながら寛容な心で接する力
○「自己指導力」：よりよい生き方を目指して、正しいと思う行為自分で判断して実行する力
○「創造力」：考えを伝え合い話し合いながら、よりよい方法を生み出していく力
○「挑戦力」：高みを目指して果敢に挑戦し、試行錯誤を繰り返しながら、粘り強くやり遂げる力
こうした力は、子ども主体の授業の中でこそ、子どもたちによりよく育成することができる。
今年度は、昨年度の３つの研究の視点を大切にして日々の授業実践を行い、子ども主体の学びに迫っていきたい。特に昨年度課題の多かった視点２の「表現し合う楽しさを感じられる学び合いの場や設定の工夫」に着目し、有効な手立てを検証していく。そして教育活動全体で子ども主体の学びを通して、４つの資質・能力を付けることで、生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもを育てていく。</td></tr>
<tr><td>目的</td><td colspan="3">(1) 目指す資質・能力を明らかにして、研究の視点を基に授業を構想し、子ども主体の学びが促される授業実践を積み重ねて、資質・能力を育成するために有効な手立てや適切な支援の在り方を追究する。
(2) 授業実践を通して、学習活動における関わり方や教師の出を吟味し、授業力を高める。</td></tr>
</table>

研究の内容・視点

「生き生きと表現し合い、くらしを豊かにする子どもの育成」のために、重点教科を中核にした授業研究や、以下の３つの視点を通して、子ども主体の授業づくり・授業改善を行っていく。

視点１　心が動く課題の設定

生き生きと表現するためには、子ども自身の心が動き、主体的に学ぶことができる課題を設定することが大切である。これまでの研究において明らかになった課題設定の手立ては以下の通りである。

- 子どもの疑問をもとにした課題の設定（前時との違いやつながり、子どもの困り感）
- 子どもの興味関心をひく課題の設定（教材の提示の仕方、本物にふれる、体験を通して学ぶ）
- 自己選択のできる課題の設定

今年度も上のような課題設定の手立てを行い、子どもたちの学習内容への興味関心を喚起したり、自分なりの考えや予想をもちやすくしたりする。また、教師が子どもたちに付けたい力を明確にし、子どもの思いを引き出しながら子どもの課題意識を高め、単元のゴールやその時間の学習の見通しを子どもたちがもてるようにし、課題に対する明確なまとめができるよう授業構想する。（授業構想カードの使用）

視点２　表現し合う楽しさを感じられる学び合いや場の設定の工夫　（今年度の重点）

①　支持的風土づくり

表現し合う楽しさを感じられる学び合いの場のためには、基盤として学級の支持的風土の醸成が大切である。授業だけで培っていくのではなく、給食や掃除、休み時間などさまざまな場面で１年を通して作っていく。

②　学び合いの手立て

支持的風土を基盤として、教師がどのような手立てをとると子どもたちは主体的に学び、学び合いの場が成立するのか検証していく。

また、子どもたちのやりとりの質の向上や、子どもたちで話をつなげる交流をめざし、朝のモジュールの時間に朝のスピーチ活動を行う。（毎週火曜日）話し手が長く話すのではなく、聞き手が質問することで話を広げていくスピーチで、質問の仕方や話し方を学ぶだけでなく、聴き合う風土づくりにもつながるだろう。また、話し手にとっては自己有用感をもち、安心して話せるようになると考える。

視点３　学ぶ意義や喜びを感じられるまとめ・ふり返りの充実

自分の思いや考えを生き生きと表現し合って学ぶことを通して、学びを生活の中でどのように生かせるのかを子ども自身が自覚していくことが大切である。学習の振り返りで、わかったことやできるようになったことを振り返るだけではなく、自分自身を振り返り自分の変化や成長を自覚したり、友達や教師からの価値づけたりするなどを場面に応じて設定し、自分の生活に目を向け生かそうとする態度を育てられるようまとめ・ふりかえりを充実させていく。

研究の進め方

大研	・各学年部で１つ（低学年部１、中学年部１、高学年部１、合計３＋提案授業１） ・学年部で授業の事前研究会と事後研究会を行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案はフルサイズ指導案。授業１週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、参観、事後研究会に参加する。
中研	・大研をしない学年で行う。 ・学年で授業の事前研究会を行う。事後研究会を学年部と自主参加者で行う。 ・授業研には、外部講師を招聘する。 ・指導案は、フルサイズ指導案。授業１週間前まで完成させる。 ・指導案は全員に配付し、学年部で参観。その他は可能な限り参観する。
小研	・大研中研の授業者以外は、授業公開のみ。指導案は本時のみ。事前研や事後研は任意。

研究の計画				
	４月	３日	研究推進委員会①	概要、方法の検討
	４月	１８日	研究全体会①	研究の概要、目指す子どもの明確化、方法の共有、質疑応答
	５月	２９日	校内授業研究会	提案授業
	６月～12月		校内授業研究会	１学期に大研１つ、２学期に２つ
	１月	27日	研究推進委員会②	研究全体会②について、実践記録のまとめについて
	２月	17日	研究全体会②	今年度の振り返り

＜様式＞

学校名	山形市立第三小学校 山形市宮町五丁目７番５８号 TEL 023-622-0653　FAX 023-633-9320	校　長	佐藤　昌彦
		研究主任	三宅　慶知

研究主題

子どもの粘り強さと自己調整力を育む（３年次）
～　見方・考え方を軸にした授業づくりを通して　～

研究主題設定の理由

これから先の時代は，「厳しい挑戦の時代」である。一人一人の多様性を原動力とし，新たな価値を見出していくことが必要となってくる。子どもたちには，こうした変化を乗り越え，高い志や意欲をもつ自立した人間として，他者と協働しながら価値の創造に挑み，未来を切り拓いていく力を身に付けることが求められる。新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育んでいくためには，「何を教えるか」だけでなく，「どのように学ぶか」という，学びの質や深まりを重視することが必要となってくる。さらに，課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習やそのための指導方法を充実させていく必要がある。「生きる力」や「確かな学力」は 21 世紀の社会を生きる上で必要な力とされ，その育成が求められている。

そのような社会的背景とともに本校では，令和４年度から，「子どもの粘り強さと自己調整力を育む～見方・考え方を軸にした授業づくりを通して～」を研究主題として掲げ学校研究に取り組んできた。見方・考え方を働かせるための手立てや，「粘り強さ」と「自己調整力」を高めるための手立てを明確にし，授業研究会を行い，事後研究会等においては，子どもの具体的な姿をもとに話し合い，実践を重ねてきた。そして，「粘り強さ」「自己調整力」について，令和５年度の成果と課題を明らかにした。以下は，研究の重点について、令和５年度の成果と課題である。

	粘り強さ	自己調整力
成果	◎課題を明確にすることで，見通しもって取り組む姿が見られた。【児童】 ◎教科への関心をもつ姿が見られた。【児童】 ◎他教科で得た自信が自己有用感へとつながっていった。【児童】 ◎「できる」「わかる」という気持ちから「やりたい」という思いにつながっていった。【児童】	◎学習計画を立てたことで，何を学んでいるかを意識しながら学習を進められた。【児童】 ◎毎時間の振り返りで自己の変容がわかるようになった。【児童】 ◎繰り返し取り組むことで，自分で見通しをもって取り組むことができるようになった。【児童】
課題	△個人差が大きい。【児童】 △わからないことを聞けない。【児童】 △まだまだ教師主導の授業が多い。【教師】 △内発的動機付けをさらに高める必要がある。【教師】	△計画通りはできるが，修正は難しい。【児童】 △次につながるふり返りができていない。【児童・教師】 △対話力が弱く，子ども間での関わりがなかなか生まれない。教師の働きかけが必要。【児童・教師】

成果と課題を受け，本校では，「粘り強さ」とは子どもが自分事として捉えた課題に取り組み解決していこうとする際，自分の持っている知識や技能を総動員させる力だということ。「自己調整力」とは，何としても課題を解決するために他者と意見を交流させる，自分なりに調べる，助けを求める，これまでの経験を生かすなどの力だということ，そして，「粘り強さ」と「自己調整力」は相乗効果で伸びてくるものだという認識を共有した。

そこでわたしたちは，一人一人の子どもが自己肯定感をもち，身に付けてきた資質・能力を発揮しながら，自らの願いを実現していくことができるように育てていきたいと考えている。子どもたちは，人や自然，地域とかかわりながら学び，仲間とともに学ぶ中で自分を見つめ直し，さらに高まっていこうとすることができる。互いに仲間を尊重し合う関係を育みながら，子ども一人一人が自信をもち，自分の願いの実現に向かって追究を続け，学んだことを生活に生かしていくことができるよう，研究を推進していきたい。

研究の目標

学校全体として，以下の４つを「子どもを育てる４つの柱」にし，校内研究を中核としてカリキュラム全体で育む。

≪協働性≫　ともに課題解決に向かうための仲間をつくる
- **共感的，協同的な人間関係の育成。**
- **互いの考えを共有するためのコミュニケーション力の育成。**

≪主体性≫　課題（目標）を一人一人が自分事とし，見通しをもって学び続ける
- **課題解決に向けて，既習事項や他教科の学びを活かし，解決に向けた見通しが持てるようにする。**
- **「ふりかえり」や「論理的に考えること」を通して，学習活動を柔軟に進めることができるようにする。**

≪創造性≫　目的に応じて既習や経験をつなぎ，新たな価値を創り出そうとする
- **各教科等における見方・考え方を生かす体験を通して学ぶ楽しさを味わうことができるようにする。**

≪持続性≫　日々の学びを通して自信をもち，社会のニーズに合った活動に取り組む
- **学級，学年という集団，学校という空間を越えて，更に広く自分たちの学びを発信する楽しさを味わうことができるようにする。**

Keyword:「チャレンジ」
- ○　向上をイメージし，今よりも前へという意識をもった学校生活にする。
- ○　共通の願いや目標に向かい，協力して取り組む必要感を感じられる。
- ○　結果や成果を適正に評価し，次へつなぐという連続的な取り組みにしていく。

研究の内容および重点

三小の子どもたちに身に付けたい「粘り強さ」と「自己調整力」（具体的な目指す子どもの姿）私たちが共通理解を図った具体的な目指す子どもの姿は以下の通りである。

粘り強さ	自己調整力
・持っている知識や技能を用いて，なんとかして解決しようとする，あきらめないで最後まで取り組む。 ・課題からはなれず，のめりこむ。 ・課題を自分ごととして捉え，挑戦してみようとする。	・自分の変容を理解する。 （できるようになった　→　その原因は何か） ・他者の考えを受け入れたり，良さを認めたりして，自分に取り入れる。 ・解決するための手段を選択する

「粘り強さ」とは子どもが自分事として捉えた課題に取り組み解決していこうとする際，闇雲に課題に取り組み続けることではなく，自分の持っている知識や技能を総動員させる力である。「自己調整力」とは，何としても課題を解決するために他者と意見を交流させる，自分なりに調べる，助けを求める，これまでの経験を生かすなど力である。「粘り強さ」と「自己調整力」はそれぞれが独立して伸びていったり，一方が身に付いてからもう一方が身に付いたりするものでもなく，相乗効果で育てていくもの，どちらかが伸びるのに比例してもう一方も伸びてくるものだと考える。

「粘り強さ」を育むために
- 子どもが課題解決の見通しを持てる学習計画の工夫。
- 子どもが手ごたえを感じられる学習活動にするための課題設定の工夫。

「自己調整力」を育むために
- 適切な自己評価をするための視点の設定。
- 自己の変容を実感できるふり返り。

・子どもの実態に合わせた単元の計画，修正

「粘り強さ」「自己調整力」どちらの視点においても，まずは「子どもの実態に合わせた単元の計画，修正」が土台になると考える。「なぜその単元を学ぶのか」「何をその単元から学ぶのか」「どのようにその内容を学ぶのか」を明確にした単元計画を立てた上で，子どもと教師がともに解決の見通しを「共有」し，「粘り強さ」と「自己調整力」を育んでいきたいと考える。

研究の方法	（１）研究の窓口：算数（こまくさ学級は子どもの実態等に応じ，算数に限定しない） （２）研究方法 　指導案作成 - 事前研 - 本時の参観 - 事後研のプロセスを通して，子どもの「粘り強さ」と「自己調整力」が高まったかどうかを振り返る。 （３）全校研について 　年間４回程度の授業研究会を計画する。通常学級，特別支援学級を問わない。（今年度は４回で５つの授業　こまくさ学級も含めて計画）授業研究の日程を近隣校等に周知し，参加者を募る。 （４）学年部研について 　学年部を基盤にして，研究主題や研究の重点に迫ることができるよう，すべての学級担任が授業実践を行う。 （５）研究のまとめ（授業実践の振り返り） 　事後研から研究の重点について，成果と課題を明らかにし，また，年間を通した授業実践の振り返りを行い，一人一人が研究のまとめを作成する。

研究の計画

研究全体会・研究推進委員会・全校研を教育課程に位置付けて計画。また，学年部研も計画する。

日　程		内容	備考
４月２日	火	研究推進委員会①	推進委員決定 概要，重点，研究年間計画 全体研・授業研の日程について 指導案，事前研，事後研，実践記録について確認
４月１１日	木	研究推進委員会② 研究全体会①に向けて	概要，重点，研究年間計画 全体研・授業研の日程について（授業者の検討） 指導案，事前研，事後研，実践記録について確認
４月１８日	木	研究全体会①	概要，重点，研究年間計画 全体研・授業研の日程について（授業者の検討） 指導案，事前研，事後研，実践記録について確認
４月３０日	火	研究推進委員会③ 全校研①に向けて	・全校研①に向けて ・指導案，事前研，事後研，実践記録
５月１日	水	希望者	齊藤一弥先生講演のビデオ視聴（16：00～）
５月９日	木	研究全体会② 全校研①に向けて	指導案，事前研，事後研，実践記録について確認
6月11日	**火**	**全校研①**	**全校研①　中学年部** **研究推進委員から　遠藤絵里加先生**
６月２８日	金	研究推進委員会④	全校研①を終えて　全校研②に向けて 授業研年間計画 全校研授業者決定
7月19日	金	**全校研②**	**全校研②　高年部　佐々木　健斗先生** 齊藤一弥先生　ご来校・ご指導　市委嘱を兼ねる
７月　日 未定	未	研究推進委員会⑤	・全校研②を終えて ・授業検討会について
８月２９日	木	研究推進委員会⑥	・（全校研②を終えて） ・今後の研究の方向性の確認
１０月２４日	木	研究推進委員会⑦	全校研②，授業検討会を終えて 今後の研究の方向性の確認
11月15日	**金**	**全校研③**	**全校研③（自主公開研究会　２授業公開）** **授業１　低年部　　稲葉　玲華先生** **授業２　こまくさ　　梅澤　華子先生** 齊藤一弥先生・川村修弘先生　ご来校・ご指導 近隣の市町村にも案内を出します。市委嘱を兼ねる
１２月１１日	水	研究推進委員会⑧	全校研③を終えて 全校研④に向けて
１２月２０日	金	研究全体会③	全校研③を終えて 全校研④に向けて　　子どもの姿
１月９日	木	研究推進委員会⑨	全校研④に向けて 紀要について
1月17日	**金**	**全校研④**	**全校研④　中年部　中澤ひかり先生**　市委嘱を兼ねる
２月５日	水	研究推進委員会⑩	全校研④を終えて 今年度の成果と課題　来年度に向けて
２月２０日	木	研究全体会④	全校研④を終えて 今年度の成果と課題　来年度に向けて
２月２７日	木	研究推進委員会⑪	全校研④を終えて 今年度の成果と課題　来年度に向けて

学校名	山形市立第四小学校 〒990−0055　山形市相生町4番37号 TEL 623−6019　FAX 633−9321	校　長	樋口潤一
		研究主任	逸見裕輔

研究主題

研　究　主　題

つながりの中で学ぶ、しなやかな子ども

－深い子ども理解を土台にした「教師の待ちと出」を探る－（4年次）

研究主題について

学校研究は、学校教育目標「よりよい社会や人生をともに切り拓いていく子どもを育てる」を具現化するための方策である。本研究主題は、学校教育目標と子どもの実際の姿と期待する姿を照らして設定した。また、それに迫るための教師のあり方を副題に据え、研究の柱とした。多様性を尊重し、他者と協働的に学びながら、それぞれの強みや個性を発揮できる子どもを育てていきたい。

研究の重点

「はじめに子どもありき」を出発点にして

1　深い子ども理解

（1）　深い子ども理解の土台＝愛情と信頼に基づく関係

深い子ども理解とは、子どもの育ちの可能性を探ることである。深い子ども理解は、愛情と信頼に基づく関係の上に成り立つものである。

子どもたちは、一人一人違っている。そして、本来力をもち自ら進んでいく力をもっている。どの子もその子らしく学び、その子らしく育ってほしい。そのために、教師は子どものありのままを受け入れ、心に寄り添い、一人一人を大切にする。子どもの願いや思いに耳を傾け、一人一人が何を求めているのかをとらえることが必要である。また、子どもの行動そのものにだけ目をやらず、行動の奥にあるもの・意味するものまで見とれる教師でありたい。そうして、その子の「人・もの・こと」に対する意味や価値を分かろうとし続けることに取り組んでいきたい。

（2）　カリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントは、学級担任の日常の営みである。何より、目の前の子どもを丁寧に見つめ、その意味を授業や学級経営の改善に返していくことである。本校の子どもたちは、どんな子どもたちなのか、子どもの姿を分析する必要がある。子どもの事実をとらえ、資質・能力で分析することができるようにしたい。そして、学校全体で育てたい子ども像を共有し計画を立て、「子どもがどう育ったか」という視点でふり返り、目の前にいる子どもの指導にいかしていくことを続けていく。子どもが身に付けた資質・能力は意図的にフィードバックして、子どもが自身の成長を実感し学び続けることができるようにしたい。昨年度、それぞれの学級が「学級カリキュラム」を作成し、実践を積み重ねてきた。昨年度の学級カリキュラムを生かしながら、目指す子どもの姿に迫るために、それぞれの特色が見える学級カリキュラムを構築していく。

2　教師の「待ちと出」

（1）　教師の「待ち」

子どもが強い思いをもち、主体的に活動に向かったとしても、必ずしもことが順調に進むわけではない。見通しの甘さから、やり直しを余儀なくされることもある。そんなとき、どんな思いでそれらを乗り越えようとしているのか、実際にどのようにして乗り越えているのか、そしてそれを支える思いは何かを捉えながら、子どもを信じて見守っていく。

ただし、子どもたちがやりたいことをただ手放しで見ているわけではない。子ども主体ということは、「子どもたちの自主性に任せる」のではない。子どもが行動を起こす元になる心を支援し、「子どもの自主性を育てる」ことである。子どもが、知識や技や見通しがないままに、ひたすらに迷い、悩んでいることはないか。教師は策もないまま子どもを傍観していることはないか。子どもの育ちにつながる「待つこと」になっているか。そもそも子どもを信じて「待つこと」ができているか。教師は常に自分をふり返りながら、検討していく。

（２） 教師の「出」

「待つこと」だけでは子どもの育ちは成立しない。子どもが学んでいく過程を妨げてはいけないが、学び方が分からないときに必要なことを教えないと、子どもの学びは広がらない。子どもたちの力が最大限に引き出され新しい自分に出会うためには、「教師の出」つまり適切な教師の支援が大事になる。そのために、わたしたちは物事の本質を捉え、子ども理解を土台にした教材研究、内容研究を大切していく。「教師の出」は、子どもが活動をうまくできるようにするためだけのものではない。子どもの追究を強くするために行うものである。子どもたちが身の回りの人・もの・ことに問題意識をもち、解決していくことができるようにするために、どんな場合に待ち、どこでどれぐらいどのように出るかを吟味していく。

研究の内容と方法

１ 子どもも教師もわくわくするチャレンジングな実践を

子どもだけでなく、教師の中にも「楽しい授業がしたい。」「もっとできるようになりたい。」という強い願いがある。それぞれの授業者が実践を通して「できるようになりたいこと」や、「目指す授業像と教師の姿」を明らかにし、実践に取り組んでいく。教師がわくわくする授業を構想したり実践したりすることで、子どもたちも学ぶ楽しさや喜びを味わうことができるようにしたい。

２ 一人一人が大事にされ、みんなで学び合うよさを実感できる授業

目の前の子どもたちは一人一人違う。だからこそ、一人一人の育ちを適切に捉え、目指す子どもの姿を設定する必要がある。そのため、個に応じた教材、学習内容を設定したり学習環境を整えたりすることを大切にしていく。また、タブレット端末を活用したICT教育の充実を図る。タブレットを活用することで一人一人が必要な情報を自ら選択したり多様な学び方を支えたりすることが可能となる。一人一人が築いた学びを集団の中で紡ぐことで、個の学びがさらに磨かれ、学ぶよさを実感できるようにしていく。そうすることで、自ら学びを計画したり実行したり調整したりすることができる子どもに育てていく。

３ すべてが「授業」ととらえ、「生徒指導の５つの場」を意識して指導にあたる

子どもたちにとって、学校生活の全てが学びの場である。各教科領域の授業はもちろん、朝の会や帰りの会、給食や掃除の時間も「授業」としてとらえていく。本校で「三大行事」として位置づけている学校行事「いちょう大運動会」「いちょう音楽会」「いちょう兄弟体験学習」も同様である。すべての「授業」について、「目の前の子どもにとって価値ある学びになっているか」という視点をもち、教師の待ちや出を探りながら子ども一人一人の課題や育ちをとらえていくようにする。

生徒指導の５つの場……「自己決定の場」「存在感が持てる場」「人間的にふれあいが大切にされる場」「相手との関わりで行動できる場」「発達の可能性を最大限に発揮しうるような場」

４ 「小さな学習会」

毎週金曜日の放課後に「小さな学習会」を位置づけて研修の時間とする。教材研究や情報交換、行事の詳細の打ち合わせ・検討、地域施設の見学などを行う。紙上での研修や共通の課題に取り組むなど、様々な方法を用いて日常的に研修を積み、実践にいかすことができるようにする。

	５　校内授業研究会 　校内授業研究会を通して、教師の授業力を高め、日常の授業の充実、改善を図り、目の前の子どもを育てていく。 　各教科の授業づくりにおいては、教科内容そのものを研究し、教科を通した目で目の前の子どもの育ちを考えることが必要である。子どもたちは、どんな見方・考え方を働かせるのか、身に付けるべき資質・能力は何か、どのような問題解決が成し遂げられるかを吟味していく。そして、子ども自身が自分の力を自覚し、新たな課題に挑む強さと自信を身に付けることができるようにしたい。 　そのために、事前・事後研究会は全員参加とし、互いの子どもの見方を聞き合うことでより子どもを多面的にとらえ、子どもの育ちを考えていくことができるようにする。とくに、今年度は「個の学びと集団の学び」について重点的に議論していく。また、教科内容の研究については、昨年度に引き続き外部講師の先生にご指導・ご助言いただきながら、教科内容の研究を進める。 **６　研究を発信する場を意図的・計画的に運営する** 　わたしたちの取り組みを多くの方々に見ていただいたり協議したりできる場を年２回設定する。私たちが大切にしてきたことを発信することで、手ごたえや新たな視点に出合うことができると考える。そのために、年２回予定されている研究会の場を意図的・計画的に運営し、子どもの育ちはもちろん、わたしたち教職員がさらにレベルアップできる場にしていく。また、学校外の方々を招き、教材研究や単元づくり、事後研において、様々な視点からの意見をいただくことで、本校での取り組みを広い視野でふり返る機会とする。 （予定：①6 月 27 日第３回校内研究会＆第一回山形市委嘱研究会 ②12 月 7 日公開研究会＆第二回山形市委嘱研究会 **７　研究のまとめ** 　１年間の実践をふり返るとともに子どもの育ちをまとめ、研究の足跡を残す。 （「銀杏の実）第 70 号）
研究の計画	４月～５月　・研究主題と研究の柱、具体的な取り組みの共有。 ・学級カリキュラム（年度当初版）作成 ・校内授業研究会（原則一学級一授業）を実施し、授業力の向上を図る。 ６月～　・三大行事（「いちょう大運動会」、「いちょう音楽会」、「いちょう兄弟体験学習」）について「教師の待ちと出」を視点とした検討・ふり返り ・第一回山形市委嘱研究会（６月） ・学級カリキュラム修正 １２月　・自主公開研究会（第二回山形市委嘱研究会） ２月　・研究のまとめ（１年間の授業や子どもの育ち） ・学級カリキュラムふり返り ３月　・研究集録発行 ※年間を通して毎週金曜日（場合によっては水曜日も含む）の放課後に「小さな学習会」を設定する。

＜様式＞

学校名	山形市立第五小学校 山形市東原町一丁目１番９号 TEL　６２２－０６５５　FAX　６３３－９３３１	校　長	太田　千春
		研究主任	佐々木　康友
研究主題	「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」 ～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～		

研究主題設定の理由

２　主題設定の理由

【社会的な背景から】

新型コロナウィルスのパンデミックや急速な AI の普及、DX による社会構造の変化など、現代の社会は複雑で予測困難となってきている。このような時代だからこそ、一人一人の子供が持続可能な社会の創り手となることができるようにするためには、自らの意思をしっかりともち、主体的に考え、多様な他者と協働しながら納得解を導き出すことができる資質・能力の育成が求められる。そして、学校教育は、生涯にわたって学び続ける基礎を培う役割を担っている。

【自立した学習者の育成】

「自立した学習者」とは、今、求められる資質・能力を身に付けるために、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける姿であると捉えている。また、自立した学習者には、自らが自己の目標を設定し、目標達成に向けて自らの学びを主体的に調整し、実行し、進捗状況を評価し目標を再設定するといった、自ら学びを調整する力が必要であると考える。さらに、一人一人の子供を自立した学習者に育成していくためには、教師主導の授業から脱却し、一人一人の子供を主語とした学習者主体の授業へと「観」を転換していく必要がある。子供自身が学習の中心に立ち、主体的に学びを進める授業への改善である。

【研究主題及びサブテーマ】

そこで、本校では、研究主題及びサブテーマを「一人一人の子供を主語にした授業づくりを目指して」～全ての子供の可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実～とした。本来、学習の主体は子供である。子供は、学びたいと思っており、適切な学習環境さえ与えれば、喜んで学習する存在である。子供を主語にした授業とは、こうした「子供観」に立つ「子供が学ぶ」学習者主体の授業である。将来の社会を見据え、必要となる資質・能力を育成するに当たり、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた子供が主語となる授業改善に挑戦したい。

【研究の経緯と今後の方向性】

本校は、これまで体育科を中心に学校研究を進めてきた。生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるため、子供一人一人が自己の課題に応じためあてを設定し、その達成を目指したり、場の設定等の工夫により、自分に合った学習環境を選択したりできるようにするといった指導の個別化を、単元の学びの中で図ってきている。また、必要に応じて他者の考えに触れるよさや、チームとして目標の達成に挑む楽しさなど、実感の伴った協働的な学びも学習過程に意

	図的に位置づけたりしてきている。こうした実践の積み重ねにより、主体的に学ぶ子供の姿につながっている。今年度は、これまでの土台に立ち、体育科で得た学びを他の教科・領域にも波及させ、全ての教育活動をとおして主題に迫っていくこととする。
研究の内容	3　研究の内容 一人一人の子供を主語にした授業により、主体的・対話的で深い学びを実現し、確かな学力を育成するとともに、自らの判断と意思で、生涯にわたって能動的に学び続ける自立した学習者を育成していくうえで、以下の内容に焦点化を図り、研究を進めていく。 (1)自己選択・自己決定の場を保障する単元の構想 内容や時間のまとまりを見通し、一人一人の児童が必要となる教材や資料などを選択したり、自分に合った学習方法を決定したりすることのできる単元を構想する。 (2)自ら学びを調整する自己評価と振り返りの充実 一人一人の子供が、自ら学習状況を把握し、学習の達成感や成就感を味わうとともに、その後の学習を自ら調整することができるようにする。 (3)子供の主体的な学びを引き出す学習環境の整備 GIGAスクール構想の環境の下、ICTの効果的な活用を図りながら、一人一人の子供が必要に応じて自ら働きかけ、学びに向かうことのできる学習環境を整える。
研究の方法	4　研究の方法 (1)ともに学びともに育つための研究組織づくり 一人一人の教員が追究したい学習方法や教科、領域等の希望を基にグルーピングを行い、部会を構成する。その際、経験年数等を考慮し、若手と経験が豊富な教師がともに学び、新たな学びを創造できるような組織編成とする。 研究推進委員会は、校長、教頭、教務主任、研究主任、各部会の代表で組織し、研究の内容や方法等について協議するとともに、研究全体会で成果や課題を共有する。 (2)先行実践及び理論研究 個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実に関する先行実践等について、研究会への参加や講師招聘、文献等をとおして学び、一人一人の教員が追究したい学習方法等の明確化を図るとともに、研究成果を全体に還元し、理論に対する理解を深める。 (3)実践研究 授業研究会については、各部会の設定した学習方法に基づく授業研究会を全体でそれぞれ1回ずつ行う。それ以外は部会ごとの授業研究会とし、互いの授業に学び合う機会を確保する。研究の1年次となる今年度は、具体的な子供の学びの姿のエピソードをできるだけ多く蓄積することを大きなねらいとする。
研究の計画	5　研究の計画 《1学期》・7月　3日(水)　山形大学　森田先生による授業通覧・指導 ・研究部会毎の先行実践及び理論研究によるテーマ設定 《2学期》・研究成果報告会　及び　授業研究会　(日程は未定) ・12月10日(火)　授業研究会　山形大学　森田先生参観予定 《3学期》・授業研究会　(日程は未定) ・研究のまとめ

学校名	山形市立第六小学校 山形市鉄砲町二丁目９－５５ TEL 622-0656　　FAX 633-9341	校　　長	齋藤　正弘
		研究主任	遠藤　明日香
研究主題	**仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成（３年次）** **～子ども理解をベースにした授業づくり～**		

研究主題設定の理由

本校では、**「笑顔あふれる子ども」**の育成を学校教育目標に掲げ、次のような子どもの姿をめざして教育活動を行っている。

（１）学習大好き　かしこい子ども「かしこく」（確かな学力）
（２）みんなを大事に　豊かな子ども「ゆたかに」（豊かな心）
（３）明るく健やか　元気な子ども「すこやかに」（健やかな体）

【社会的背景から】

今、子ども達を取り巻く社会環境は目まぐるしく変化している。近年、コロナウィルス感染症によって世界中が経済、医療、教育など様々な場面で問題を抱えることとなり、従来のやり方を見直し、新しい方法を模索することとなった。子ども達が成人して社会で活躍する頃には社会構造や雇用環境が大きく変化し、子ども達が就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになると指摘されている。こうした時代の変化の中で、特に「学びに向かう力」は、自分を見失うことなく未来を切り開いていくために、また、変化が激しく先行き不透明な21世紀の社会を生き抜く上で必要となるであろう。

新学習指導要領では、「主体的」「対話的」「深い学び」「探究的な学習」などを大切にして学習していくことが求められるようになった。特定の教科等にとどまらず学校教育全体を通じて、「どのように学ぶのか」という学びの質や深まりを重視していくことが必要になってきている。

これらのことから、物事を自分事としてとらえ、考え、社会や他者と関わりながら自己実現しようとする子どもの姿を目指し、研究主題を設定した。

【これまでの取り組み】

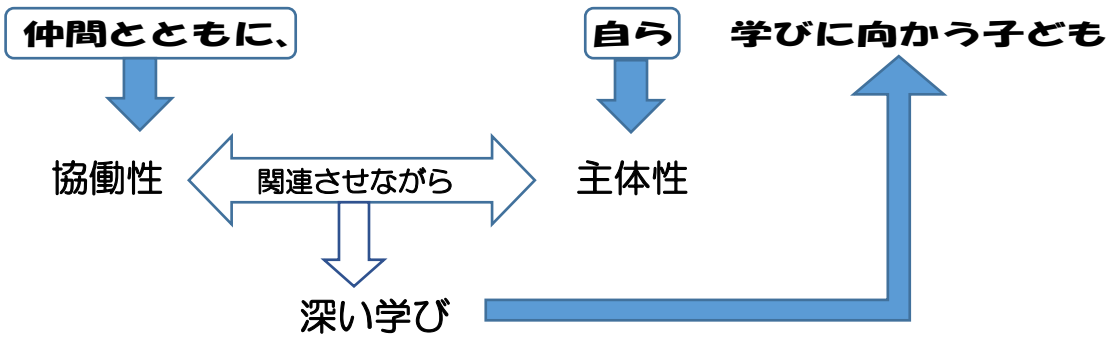
本校では、学校経営構想の中で育成を目指す資質・能力でもある「主体性と協働性」を特に培っていかなければならないと共通理解されている。そこで、「仲間とともに＝協働性」「自ら＝主体性」という二本柱で、学びに向かう子どもの育成に取り組んできた。「仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成」のためには、「子ども理解をベースにした授業づくり」が必要である。子どもたちのよい姿が見られたが、さらに仲間とともに、自ら学びに向かう子どもを育成するためにも、今年度もこのテーマで学校研究を進めていく。

また、「子ども理解をベースに」というテーマで研究に取り組むにあたり、授業での子どもの育ちについて話し合っていくことは重要だと考えている。そこで、子どものみとり方についてさらに焦点をあてて、子どもの思いや願いに耳を傾け、一人一人が何を求めているのかを考えたり、「どうしてその子がこう考えた（行動した）のかな。」と子どもの言動の奥にあるものについて考えたりするなどして、教師が子どもを理解し続けようとしながら授業に取り組んでいくことを研究の核として進めていきたい。

以上のことから、研究主題を「仲間とともに、自ら学びに向かう子どもの育成」、サブテーマを「子ども理解をベースにした授業づくり」と設定し、学校教育目標を具現化していきたいと考え

めざす子どもの姿

た。



研究の内容と方法

【研究の内容について】

（１）子ども理解をベースにした授業づくり

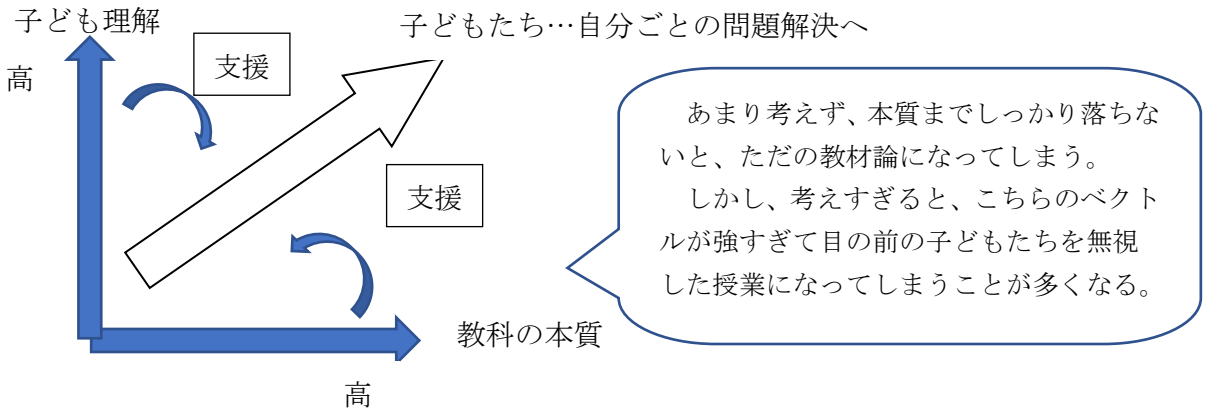
①子どもの姿（言動、行動）で語り合う。～教師のみとり方の向上　＝　授業力の向上～

子どもの具体的な姿を根拠として話し合うことで、何が見え、どのように解釈し、価値づけたのかを語り合っていく。一人一人が何を求めているのかを考えたり、「どうしてその子がこう考えた（行動した）のかな。」と子どもの言動の奥にあるものについて考えたり話し合ったりすることを通し、子どもの育ちを知ると共に，教師自身の子どもを見る目を鍛えることは，教師の授業力が向上することにつながる。

②子どもの見方や考え方の広がりや深まりにつながるように、教科の本質を考える。

教科の本質・教材の子どもにとっての価値について吟味する。指導案を書くときに、教科の本質を捉え、記述する。

《授業に対する教師の向き合い方》



③長期的な見通しを持って授業に望むためのカリキュラム・マネジメント表の作成。

子どもの実態とめざす子ども像に応じて教育計画を立てる。

（２）研究の日常化

①授業を通覧したり開いたりして、いつでも見て学べるようにする。

日常的な実践を見合ったり全校の子ども達の様子をみとったりできるようにするために、授業を通覧したり授業を開いたりして、誰もがいつでも見て学べるようにする。

②研究便りの作成

研究推進委員が研究便りを作成し、子どもを育てるために必要な情報を共有する。

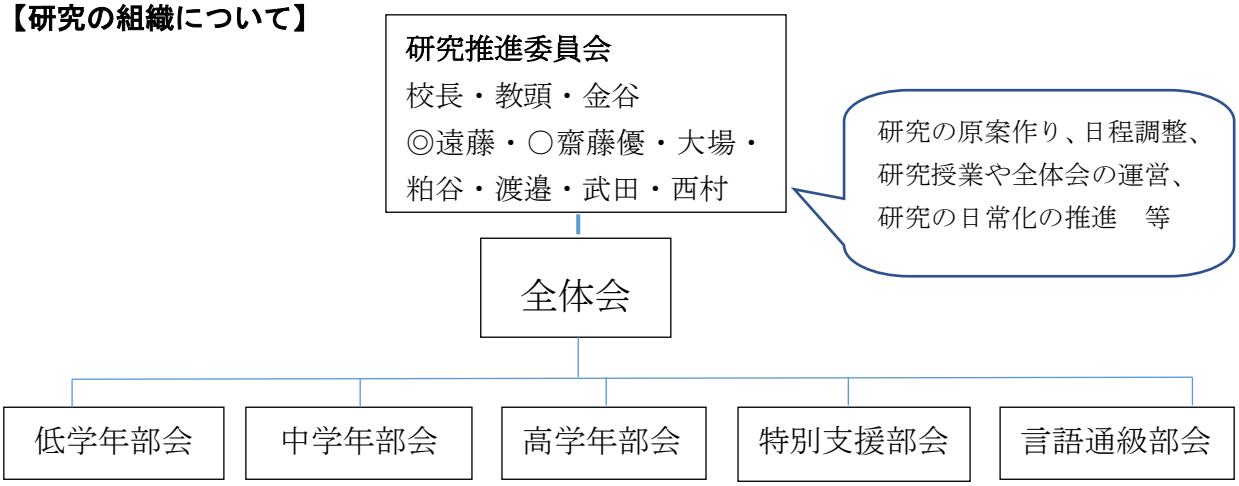
【研究の方法について】

・授業研究会の実施…全員が研究授業を行い、研究主題の実現に迫る。

・校内研修会の実施

研究の組織と研究会の進め方および計画

【研究の組織について】



【授業研究会の進め方について】

・大研は上学年・下学年・特支通級から１授業提案。指導者を招聘し全体で事後研を行う。

・小研は、部会単位で事前・事後研を行う。

・授業研究会の記録については事後研で話し合ったことをもとに授業者が作成し、研究だよりとして全員に配付する。

・研究概要、指導案、研究だより等は各自その都度ファイリングし、今年度の研究紀要としていく。

【今年度の計画】

４月	今年度の研究構想・全体計画・指導案提案検討
５月	授業研計画検討・校内研修会　　研究授業（小研）
６月	
７月	研究授業（大研）・校内研修会
８月	
９月	研究授業（大研）
１０月	
１１月	研究授業（大研）
１２月	校内研修会
１月	
２月	今年度のまとめと振り返り・次年度の研究構想
３月	

学校名	**山 形 市 立 第 七 小 学 校** 山形市城北町二丁目９番３７号 TEL　023-644-3434　FAX　023-645-8586	校　長	原田　健男
		研究主任	田中　敏子

研究主題

仲間とともに、自ら学び拓く子どもの育成

－思いや考えを伝え合い、互いを認め合う子どもをめざして－

研究主題設定の理由

◆主題設定の理由

　変化の激しい時代を生きぬく子ども達は、高い志や意欲を持った自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓く力（課題解決力）を身に付けることが求められている。また、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を育むためには、「何を学ぶか」という知識の質や量の吟味に加え、「どのように学ぶか」という学びの質を高める指導法を探ることも重要になっている。

　こうした状況を踏まえ、本校では、子どもの姿から付けたい力を重点化し、指導の目標を策定した。「主体的に取り組み生活をよりよくする」「思いや考えを伝え合い　互いを認め合う」の二つである。この二つの重点目標に向かい、全ての教育活動において全教職員が共有した取り組みを行うこと、日々の授業を目標達成のために改善することは欠かせない。そのうえで、特に今年度は、子どもたちの「思いや考えを伝え合い、互いを認め合う」ためのコミュニケーション能力の育成を重点に研究に取り組むこととした。

◆主題・副主題について

主題に掲げた「学び拓く」を、わたしたちは

①学習過程で難しいことや困ったことがあったときでもあきらめずに解決方法を考えようとすること

②学んできたことを活かしながら、自分達の生活をよりよくしようとすること

と捉える。「学び拓く子ども」をめざすとき、物理的にも精神的にも「一人ではない」ことが重要である。「仲間とともに」困ったときは支え合い、やりきったときには共に喜ぶことが、子どもたちの学びの意欲、学び拓く勇気につながっていく。子ども同士の関わりを重視し、このような学び拓く子どもの姿を求めて、探究型学習を基盤にした授業改善に取り組んでいく。

　今年度の子どもたちの実態を話し合った際、異学年同士の関わり、子ども同士のかかわりやコミュニケーションの取り方が課題として浮き彫りになった。そこで、現状と実態の把握、次年度へ向けての研究のポイントを絞っていくことを年間を通して研究していきたいと考えた。

研究の目標

◆重点目標

１．主体的に取り組み 生活をよりよくしようとする子ども

○問題を見つけて課題を設定し、進んで解決するために取り組む。

○ねばり強く、仲間とともにやりぬく。

２．思いや考えを伝え合い 互いのよさを認め合う子ども

○相手意識をもって聞く。

○理由や根拠をわかりやすく伝える。

○友だちのよさや苦手なことも認め合い、助け合う。

　二つの重点目標を具現化するため、子どもの実態をよく見取り、実態に即した意図的、計画的な指導や支援を、教育課程全体を通して行っていく。具体的には、各学年、学級で育みたい資質・能力を明らかにしたカリキュラムを作成したうえで、日々の子どもの変容をカリキュラムに反映させながら評価・改善し、より効果的な指導や支援を行うことをめざしていく。目標達成のために、日々の授業を探究型学習の学びのプロセスに沿って行うものとする。

研究の内容	**１．学校経営とカリキュラム・マネジメント** （１）学校目標と学校全体で重点化していく資質・能力 　新学習指導要領が求める資質・能力については、「新しい時代に必要とされる３つの柱」として「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」等、各教科等で身につけるものの他にも、学習の基盤となる資質・能力や現代的な諸課題に対応した資質・能力等が示されている。 これらのことから、学校全体で重点化していく目標はどの学習でも共通に必要な「汎用的な能力」が適していると考える。また、育てたい資質・能力は、実際の授業での「めざす子どもの姿」を見極め、具体的に設定していくことも重要である。 　学習指導要領（H29 改定）、GIGA スクール構想等から、これからの学校でめざすべき授業は「ＩＣＴを活用した、協働的、探究的な学び」であると考えられる。 これらのことから、本校でめざす資質・能力を 　①問題発見、解決能力 　②言語能力 　③情報活用能力 　④協調性 とし、学校重点目標「主体的に取り組み，生活をよりよくしようとする、思いや考えを伝え合い，互いのよさを認め合う」の中に育みたい資質・能力を明示した。 （２）学校目標の具現化をめざす「学校経営グランドデザイン」 　本校の教育活動を学校重点目標達成に向けた視点で整理して明記するものである。このグランドデザインをもとに、PDCA サイクルを行い、学校教育目標の見直し、教育課程の編成、学校評価との関連付けを図る。 **２．学年・学級カリキュラム・マネジメント表の作成** 　昨年度までの研究から、カリキュラム・マネジメント表を作成することでめざす子どもの資質・能力や年間教育活動が可視化されること、教科横断的な学習が展開しやすいこと等、その有効性を実感できた。第七小学校としてのカリキュラム・マネジメントの型や活用の仕方も教職員間で周知し、確立したものとなってきた。しかし、年度や職員が変わった今年度も継続して改善を図りながら大切な要件、学級経営案及びカリキュラムとしての性格を持ち合わせつつ、「持続可能」なものにしていくという点では、課題を残している。 　カリキュラム・マネジメント表については、下記のことを原則に進めていく。 　①学級カリキュラム・マネジメント表を一つにし、定期（前期・後期）に加え、授業研究会後の事後研で見直し、改訂を行う。（学年カリマネ表、短期カリマネ表の作成は行わない。） 　②資質・能力を育む「ＰＤＣＡ」が見える「学級カリキュラム・マネジメント表」を作成する。これを教育活動計画書（学級経営案）とする。 **３．資質・能力を育む単元構成と授業** （１）単元構成と授業づくりの基本的な考え方 　①　カリキュラム・マネジメント表は教科横断的なカリキュラムをデザインすることだけが目標ではない。育成する「資質・能力」にかかわる「PDCA」であるＰｌａｎ(計画)、Ｄｏ(実践)、Ｓｅｅ（評価）、Ａｃｔｉｏｎ(改善)がよく見えるようにし、意図的・計画的・継続的な実践で目標を達成していくことを大切にする。 　②　子ども達につけたい資質・能力は日々の授業の積み重ねで育まれる。良い授業とは、毎日容易に作れる、おいしく食べられる、栄養もある「おばあちゃんが作る朝ご飯」のようなものである。時折ある、ディナーのような食事も時には必要だが、日々の授業全てが子どもを育てると考えている。 　③　単元構成を大切にする。単元全体を通して探究型の構成にする。１時間の授業も探究型をめざしていく。 （２）重点教科に据えた教科等の授業づくりのポイント 「学級カリキュラム・マネジメント表(学級経営案)」に位置づけられた教科、道徳、総合的な学習の時間を中心に、本校で目指す資質・能力を育成する。 　授業づくりのポイントとして、コミュニケーション能力の育成を念頭に置きながら、それぞれの教科でどのような手立てを講じていくことができるかを考えるようにする。なお、ここでのコミュニケーション能力は、「相手意識を持って話をする」「相手を尊重した話し方や聞き方」等の「話す・聞く力」に、互いに個を認め合うことができる雰囲気づくり等も含めたものとする。

研究の方法	1　校内研修会の実施 （1）山形大学の中井義時名誉教授より、以下の内容についてご指導いただく。(昨年度より継続) ①各学年、学級ごとのカリキュラム・マネジメント表を作成する。 ②子どもの実態や授業の様子について話し合い、指導や支援、カリキュラムの修正、改善について学ぶ。 （2）本校で求めるコミュニケーションについて研修の機会を作り、単元構成等の工夫について学びを深める。 2　授業研究会の実施 （1）大　研・・・全員が参観、指導の先生を招聘し事後研究会を実施する。 （2）中　研・・・学年部が参観、指導の先生を招聘し事後研究会を実施する。 （3）事前研究会：大研は学年部と教科部教員で行い、中研は学年と教科部教員で行う。 （4）事後研究会：資質・能力を育む探究的な学習にするための授業づくりの視点について話し合い、全体でまとめ、指導をうける。自身のカリマネの改訂を行う。 3　学び方の共有 （1）各学年のカリキュラム・マネジメント表、授業研究会（大研・中研）のまとめをデータとして蓄積し、次年度の研究につなげる。 （2）普段の授業を積極的に開き、互いに学び合う。
研究の計画	４月１９日　校内研修会 ４月２４日　研究全体会 ５月１７日　研究全体会 ６月２８日　授業研究会① ７月２９日　研究全体会 １０月　　日　授業研究会② １１月　６日　授業研究会③ １２月　　日　授業研究会④ １２月１８日　研究全体会 ２月　３日　研究全体会 ※授業研究会は５月２４日時点の予定とする。

＜様式＞

学校名	山形市立第八小学校 山形市小白川町二丁目８番36号 TEL631-2140　FAX631-9009	校　長	豊田　博之
		研究主任	山 本　　萌

研究主題	**『主体的に生活を創る子どもの育成』** **～ かかわりを大切にした授業づくり ～** **（２年次）**
研究主題設定の理由	戦後において最も大きな教育改革と言われる学習指導要領の改訂から5年目を迎えた。それに伴い、山形県教育振興計画や山形市教育大綱等も見直しが図られ、「資質・能力ベース」の教育の具現化に向けた取り組みに本腰を入れる時期に差し掛かっている。子どもたちの実態を明らかにしながら、新たな教育的ニーズを見据え、教育活動を根本から見直していく必要がある。 そこで、本校では、研究主題とサブテーマを上段のように設定し、子どもの育ちに向けて校内研究を進めている。研究主題にある「主体的に生活を創る子ども」とは、よりよい生活にするために、人とかかわりながら努力したり、試行錯誤したりしている姿と捉えている。子どもの学びは、教科の授業や単元だけで完結するわけではなく、その先の生活にまでかかわってくるものである。主体的に学習できる子どもは、生活も主体的に創ることができるようになると考える。その姿はまさに、学校教育目標『主体的に学び、心身共にたくましい子どもの育成』に結実していく。 子どもの育ちには、子どもたちが本気で学びたくなるような課題設定や必要感を抱いて友だちとかかわりたくなるような活動展開、それに向けた教師の支援等が重要となる。研究主題にある「主体性」とサブテーマにある「かかわり」は、子どもの育ち実現には欠かせない要素であり、授業づくりの主軸になるものと捉えている。主体的で協働的な価値ある学びを経験した子どもは、自らのあり方・学び方・考え方等の変容に気づき、自信を高めていくに違いない。 そのような学びを構築するには、子ども主体の学びに向けた「教師の意識」と「教師の適切な支援」が欠かせない。教師は、子どもを深く理解し、期待する子どもの姿や育つ活動展開を思い描き、子どもの考えや思いに寄り添いながら、その場面に応じて支援しなければならない。今、求められている「活用力・実践力」や「思考力・判断力・表現力」等の資質・能力は、教師の指導力にかかっており、教師同士の活発なOJTによって高まっていく。 本校では、以上のような教育的ニーズや子どもたちの実態を鑑み、『子ども主体の学び』に焦点をあてて、授業研究会のみならず、行事や児童会活動等の特別活動・教科・総合的な学習等における子ども主体の授業や教師の支援について追究していくこととした。その日常的な教育の営み、いわゆる教職員文化を確立することが、本研究の最終ゴールであると捉えている。
研究目標	子どもの実態や学習指導要領の趣旨を踏まえ、子どもの育ちに向けた「子ども主体の学び」や「子ども主体のくらし」のあり方について、日常的に追究する。

研究の内容	**(1)子ども主体の学びと教師の意識** 単元づくり・授業づくりの始めの一歩は、「何を教えるか」ではなく、「子どもの実態から、どんな教師の願いを描くか」さらには「子どもの興味・関心から、どんな活動を展開していくか」である。「子どもたちの実態は、こうだから…」「子どもの興味・関心はこうだから…」子どもを主語に置いた授業づくりを心がけていくことは、資質・能力ベースの教育には欠かせないことと捉えている。 また、教師には「させたい活動」がある。しかし、子どもたちの思いが乗らない状況で、その活動に取り組ませれば、教師主導に陥ってしまう。単元や授業をどのように展開すれば、子どもたちは、教師の「させたい活動」の必要性に気付くのかに教材研究の醍醐味がある。 **(2)子ども主体の学びを創る2つの要素** 子ども主体の学びを創造するための要素は、 ①主体性…自分ごとになる価値ある学び ②かかわり…必要感ある仲間との交流 の2つと捉えている。この2つの要素は、授業研究に留まることなく、全ての教育活動を創造する際に活用していく。
研究の方法	**(1)日常的な教育活動における子ども主体の追究** **①「くらし」の創造** 学校行事や児童会行事、委員会活動等では、子どもたちが強い課題意識をもって、自分たちの手で活動を切り拓き、互いに関わりながら取り組んでいけるように、具体的な教師の支援や児童理解のあり方等について教職員OJTにより学び合っていく。 **②「カリキュラム・マネジメント」(以下、「カリマネ」と表記)の推進** カリマネは、日常的に「子どもの育ちをマネジメントすること」である。子どもにとって、やり甲斐のある活動を通年にわたって繋げていけるように、「教育課程」並びに「学級経営案(学級カリキュラム)」について、十分に吟味して作成しなければならない。また、学級経営案(学級カリキュラム)は、年度当初の「紙キュラム」から、教育活動が進むにつれてPDCAサイクルによる加除修正を加え、年度末に完成を迎えるようなイメージで取り組む。子どもの育ちは「日常の教育活動」にあると捉えている。 **③「生活科」「総合的な学習の時間」の実践研究** カリマネの中核となる教科・領域は生活科・総合であり、子どもの育ちの実現には欠かすことのできない教育活動である。子どもにとって遣り甲斐のある活動にするには、「単元の立ち上げ」や「子ども主体の学びを支える教師の支援」が重要となる。今後、『カリマネ研修会』や『生活科・総合における活動研修会』等の実施について、検討していく必要がある。 **(2)授業における子ども主体の追究** 研究授業は一人一授業とする。研究の窓口は限定せず、学級経営の中核となる教科・領域を決めて実践を積み上げる。事前研究会では、「主体性」と「かかわり」の2つの要素をもとに、「子どもが本気になれる学びなのか」「子どもにとって必要感のあるかかわりになるのか」等について話し合う。事後研究会では、子どもの姿から事前研究会と同様の視点で話し合う。 ※今年度より事後研の記録や年度末の研究集録は作成しない。(実践を見て話し合う事を重視)
研究計画	**【1学期】** ※ 研究推進委員会は必要に応じて実施する。 **・ 研究全体会①・・・・・・・ 4月11日(木)** ※ 授業研究会の日程調整や指導案形式を検討する。 **・ 授業研究会①(大研)・・・ 7月18日(金)** **・ 研究全体会②・・・・・・・ 7月25日(木)** **【2学期】** ※ 授業研究会(小研)は随時実施する。 **・ 授業研究会②(大研)・・・11月 1日(金)(大研)** **・ 授業研究会③(大研)・・・12月 2日(月)(大研)** **・ 研究全体会③・・・・・・・12月23日(月)年間反省** **【3学期】・ 研究全体会④・・・・・・・ 2月17日(月)来年度の方向性等**

学校名	山形市立第九小学校 山形市馬見ヶ崎二丁目５番１号 ＴＥＬ　０２３－６８１－３６００ ＦＡＸ　０２３－６８１－３５１８	校　長	佐藤　浩子
		研究主任	佐藤　かおる

研究主題	**豊かなくらしを自ら創り出す子どもの育成（３年次） ～伝え合う力の追究～**
研究主題設定の理由	**【研究主題設定の理由】** **（１）児童の実態と課題から** 本校では、学校教育目標を「未来を拓く人間力のある子どもの育成」、重点目標を「豊かなくらしを自ら創り出す子どもの育成」と掲げている。そのような子ども達を育てるためには、４つの資質・能力「向上心」「自己指導力」「伝え合う力」「思いやり」が必要であると考える。昨年度は、４つの資質・能力のうち、「伝え合う力」に重点を置いて授業実践を行ってきた。「聴き方」「話し方」「話し合いの質」それぞれの系統性が明らかになったことは成果の１つである。しかし、子ども達に「聴き方」「話し方」のスキルは身に付いてきているが、「話し合いの質」があまり高まっていないという課題も残った。そこで、今年度も「伝え合う力」に重点を置き、「聴き方」「話し方」のスキルをベースに話し合いの質を高め、子ども達が学び合う授業を目指していく。そして、資質・能力をいかして、豊かなくらしを自ら創り出す子ども達を育てていきたい。 **（２）学習指導要領の内容を受けて** 学習指導要領では、知識及び技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学びに向かう力・人間性等の涵養の実現をめざし、学校教育全体を通して、育てたい資質・能力を明確にしながら教育活動の充実を図るものとしている。また、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、子どもの主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が求められている。さらに、教科等横断的な視点に立って教育課程を編成し、現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を身に付けていく必要がある。これらのことから、本校でも、子ども達に身に付けさせたい資質・能力を明確化し、カリキュラム・マネジメントを効果的に実践しながら主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業づくりについて追究していく。 以上のことから、上記のように研究主題を設定した。
主題・副主題について	**【主題・副主題について】** **○ 豊かなくらしを自ら創り出す子どもとは** 社会や生活の様々な変化を前向きに受け止め、自他共に価値ある存在として尊重し、協働しながら様々な課題を乗り越え、豊かな生活を主体的に創り出していく子どもと捉えている。 **○ ４つの資質・能力の追究とは** **向上心：進んで挑戦し、やり遂げる力** 失敗を恐れず、高みを目指して果敢に挑戦し、試行錯誤や再挑戦を繰り返しながら、あきらめずに粘り強くやり遂げる力 **自己指導力：自分で自分を正しく導く力** よりよい生き方を目指して、正しいと思う行為を自分で判断し実行していく力 **伝え合う力：聴き合い話し合う力** 互いの考えをしっかりと聴き合い、よりよい方法を生み出す話し合いをする力 **思いやり：自分も相手も大切にする心** 相手を共感的に受け止め、違いを認め合い、自他共に尊重しながら寛容な心で接する力 本校で掲げる「豊かなくらしを自ら創り出す子ども」を育てるためには、上記の４つの資質・能

	力を付けることが必要であると仮定する。このことから、学校教育活動すべてにおいて４つの資質・能力を付けることを意識していく。その中でも特に、子どもを育てる核となる日常の授業において、単元の中でどの力をどんな手立てで伸ばしていくかを日常的に考えていく。
研究の重点	**【研究の重点】** ４つの資質・能力を育成する授業実践から研究主題に迫る授業づくりについて学ぶ。授業者がその授業で育てたい資質・能力の身に付いた子どもの姿を明確にし、効果的な手立てを模索していく。学年部を中心に事前研や教材研究を十分に行い、質の高い授業づくりを研究していく。こうして蓄積された成果と課題を日常の授業づくりに生かし、子どもの人間力の向上を図る。 今年度も、４つの資質・能力の中でも授業に大きくかかわる資質・能力として「伝え合う力」に重点を置き、研究を進めていく。子ども同士が聴き合い・学び合う授業を目指していく。
研究の方法	**【研究の方法】** **（１）研究組織** ・研究全体会、推進委員会、各学年部会、各学年会で組織する。 **（２）授業研究** ・大研を７回行う。（講師を招聘する。） ・教科領域は国語・算数・生活科／総合の３つ。 ・事前研究は単元構想段階から学年部で行う。 ・事後研究会は、より深まる話し合いの形式で行う。 ・「校内研だより（お知らせ）」は、各学年および特別支援学級の担当者が発行する。 ・「事後研だより」は担当者が２週間以内に配付し、全職員の日常の授業の向上に役立てる。 ・指導案は１週間前には配付する。 **（３）『研究の日』研修会** ・毎週金曜日を「研究の日」とし、授業づくりについて日常的に学び合う場を設定する。
研究の計画	**【研究の計画】** ４月　研究全体会（今年度の研究の重点、進め方の共有） ６月　授業研究会① ７月　授業研究会② 研究全体会（１学期のふり返り） ９月　授業研究会③ 10 月　授業研究会④ 11 月　授業研究会⑤ 授業研究会⑥ 12 月　授業研究会⑦ 研究全体会（２学期のふり返り） ２月　研究全体会（今年度のふり返り、次年度に向けて） ３月　研究集録データ回収

学校名	山形市立第十小学校 〒990-0835 山形市やよい二丁目６番１号 TEL６４３－４１０２　FAX６４５－８５９０	校　長	学　校　長 樋　渡　美　千　代
		研究主任	横　山　陽　子

研究主題	**「夢や願いに向かって 自分たちの学びを力強く創造する子ども」** （９年次）
研究主題設定の理由	本校の学校教育目標は、「しなやかな心とたくましい実践力をもち、徳、知、体の調和のとれた児童の育成」である。学校のめざす子ども像は、「ゆたかに・かしこく・たくましく」として、十小の子どもたちが、仲間と心を通わせながら、自分たちで考え、学びを、くらしを、学校を創っていくことをめざしている。また、学校教育を通じてよりよい社会を創るという昨今の教育的背景を踏まえ、子ども自らが学びを創っていくことができるように取り組んでいかなければならない。 そこで、研究主題を上記の「夢や願いに向かって 自分たちの学びを 力強く創造する子ども」とし、今まで大事にしてきたように、授業の中で見られる子どもの姿だけを追究するとともに、子どもたちの未来に役立つ実践力や活用力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えている。 この研究主題に込めた思い（意味）は、次のとおりである。 **「夢や願い」・・・・・・・・強い課題意識、めあて意識、未来への夢、強い思い・願い等** **「自分たちの」・・・・・・みんなで力を合わせて、かかわりを深めながら等** **「学び」・・・・・・・・・・・・教科の学び（学習の基礎基本も含む）、総合的な学習の時間の学び、行事における学び等、学校教育活動全体における学び** **「力強く創造する」・・学びや活動を切り拓く、生き方やあり方を見つめ直す、活用力や実践力を身に付ける、考え方や学び方を深める・高める等** この研究主題を実現するために、以下の『２つの柱』をもとに全ての教育活動を実践していく。 ◎課題のデザイン・・・シンプルで、やりがいがある課題をつくる ◎支え合いの場の工夫・・・・・子ども同士がさりげない支え合いができる場をつくる これらを大切にし、実践を積み重ねていくことで、教職員全員で教育の方向性を確かめたり、授業づくりや学級づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ったりすることができると考える。さらに、十小で育てたい資質・能力を明らかにしながら、未来を豊かに生きる力を育んでいきたい。
研究の目標	子どもの実態から、「つけたい資質・能力」、「めざす姿」を明確にし、その具現化に向けて、『研究の２つの柱』をもとに教育活動を創造したり、教師の支援のあり方を追究したりして、「子どもの育ちを実現できる学校」をめざす。

研究の内容・重点・全体構想図

1　育てたい資質・能力の見直し・更新、６年間の育ちの系統性を意識した教育活動の展開

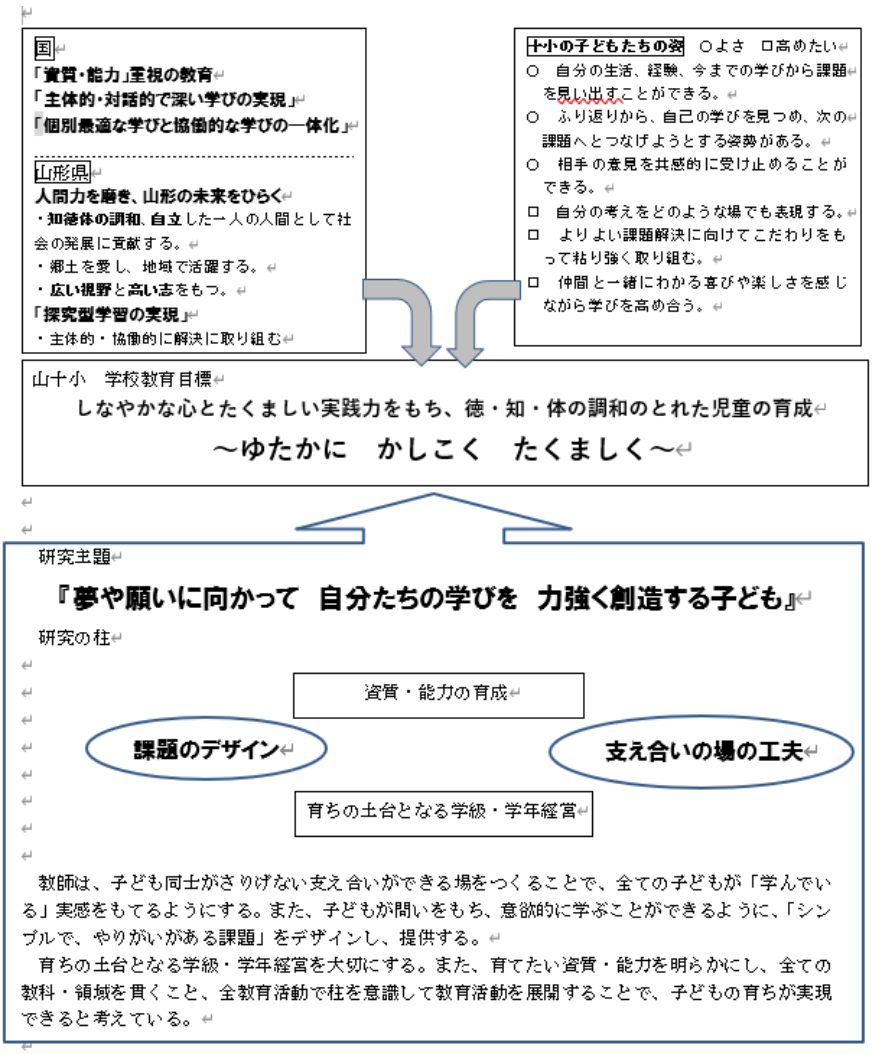
・十小で育てていきたい資質・能力を整理・更新し、子どもたちが安心して、主体的に学べるような支援を行う。
・学校行事や学年全体での取り組み等について「めざす子どもの姿」の共通理解を図り、具体的な活動場面において育てたい力、指導者の立ち位置、よりよい支援を話し合って共有していく。
・学年・学級カリキュラムシートをもとに、（更新しながら）１年間、そして小学校生活６年間を見通して、育てたい資質・能力を考え、子どもの育ちを実現していく。

2　単元末・単元後・未来の子どもの姿をイメージし、育てたい資質・能力を明らかにした日々の授業づくり・授業実践・授業改善

・「何を学び」「何ができるようになるのか」といっためざす子どもの姿を明らかにしながら実践にあたる。子どもたち自身が「実践・活用」できる力を身に付けるために、子どもたちにとってやりがいのある課題づくり、実践・活用に結び付く学習過程の工夫、学習後の価値付け・支援を繰り返しながら取り組んでいく。
・子どもたちが「どのような意識で学び、かかわっているのか」を考え、よりよい支援を探り、子ども主体の学びを目指していく。

3　子どもを見る視点の共有化、授業づくり＝学級づくりを意識し、学年・学校全体で子どもを育てる。

・支えがつながらず取り残されている子どもがいないか、子ども同士でさりげなく支え合いができているかを見る。
・子どもの姿を記録し、語り合い、子どもの変容をとらえて支え合いができているかを考える。（授業研究会後の事後研究会、語りタイム、教科担任制での連携）
・子どもたちが、支え合うことのよさを実感でき、安心して過ごせる学級経営、学年で子どもを育てる学年経営に取り組む。授業と学級・学年経営は切り離すものではなく、授業を通して学級経営や学年経営を行っていく。学年間で、積極的に教科担任制を取り入れていく。



研究の方法

（1） 子どもの育ちに結びつく授業・単元づくりのあり方や教師の支援の仕方を学ぶ。

① 提案授業

学年部で授業づくりを行い、授業を提案する。授業研究会の持ち方を工夫し、お互いの授業を参観して学び合える形で行う。

事前研究会は、以下の内容で２回行う。

事前研究会①：課題が「シンプルで、やりがいがある課題」になっているか、授業が子どもの「支え合いの場」になっているかについて話し合い、授業・単元構想をもつ。

事前研究会②：予想される子どもの思考と指導事項について考え、指導案を検討する。

事後研究会は全体で行う。提案授業を実践・参観し、各自が学んだことを共有する。

② マイ授業

提案授業者以外が行う学年部での授業研究会。

事前・事後研究会は、学年部単位で行うが、他の学年も自由に参加してよい。

事後研究会で話題になったことを全体に共有化していく。

③ 日常授業実践

課題が「シンプルで、やりがいがある課題」になっているか、授業が子どもの「支え合いの場」になっているかを意識し、日々の授業の実践にあたる。

教材研究や教材の開発等、個人内にとどまらず、学年間や学年部間、教科担任間で連携しながら授業づくりを行う。

提案授業やマイ授業で発行された「校内研だより」を読み、自分の授業実践に活用していく。

（2）研究の日常化（育ちの追究の日常化）を図るために、学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間、普段の学級・学年経営等における、よりよい教師の支援を探る。

① 学校行事、学年での活動、総合的な学習の時間（生活科）などにおける育ちの追究

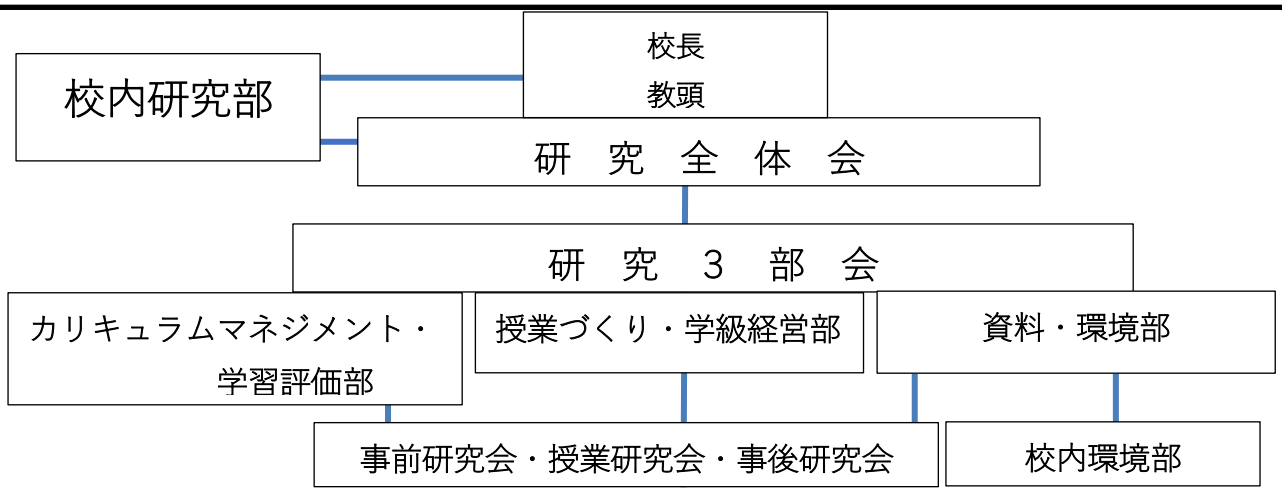
学年担任団で子どもの学びの姿を把握し、**育てたい資質・能力を考え「めざす子どもの姿」をイメージ**していく。研究主題・２つの柱をもとに、「活動内容」、「教師の支援（特に意識付けを重視）」を検討しながら実践にあたる。

② 子どもの育ちや教師の支援のあり方についての共有化

授業研究会だけでなく、**日常的に子どもの学びの姿を記録**していき、子どもの変容をとらえられるようにする。また、学年会や語りタイムを活用し、子どもの姿を共有化したり、よりよい支援を考えたりする。**教育支援とも連携**を図り、子ども理解に努める。

学校・学年の活動において育てたい資質・能力、「めざす子どもの姿」、教師の支援（意識）のあり方について、２つの柱にもとづいて研究全体会で共有する。各活動の実践後は、子どもの学びの姿をふり返り、子どもの育ちを言語化して蓄積する。次のよりよい支援を考えていくようにする。

研究組織



研究の計画（主なもの）

	年度当初	◆研究の方向性の確認と見直し・研究計画・研究の組織づくり
組織・計画（年間の見通し）	４月	◆研究全体会（研究の概要、組織、計画等の提案）・研究３部会 研究３部会は定期的に行っていく。
	５月	～各学年部の提案授業の日程調整及び講師招聘～
	６月	～授業づくり　教育活動の展開～ ～提案授業、マイ授業へむけた　単元・授業づくり　スタート～
	７月	◇提案授業Ａ・Ｂ ☆校内研修会 ◆研究全体会 （一学期のふり返り　資質・能力の見直しカリキュラムシートの更新　今後の見通し）
実践研究	８月	☆校内研修会 子ども理解研修を計画予定
	９月	～マイ授業へ向けた　単元授業づくり　２学期～
	１０月	
	１１月	◇提案授業Ｃ・Ｄ ～子どもの姿を整理・分析～
	１２月	◆研究全体会 （２学期のふり返り、資質能力の見直し　カリキュラムシートの更新 今年度の実践のまとめ提案）
まとめ	１月	～学年・学校全体によるふり返り　今年度の研究実践のまとめ～ ◆研究全体会（資質・能力について見直し・再検討） ☆校内研修会：子どもの姿をとらえ、実践活用を見据えた授業づくり
	２月	◆研究全体会（研究の成果と課題、次年度の方向性）
	３月	～次年度の研究の方向性　組織づくり～

＊研究３部会は、定期的に設定し、協議する。
＊提案授業研究会は研究全体会に位置づけ、分散型の全員参加とする。
＊上記以外の会議や研修会等については、研究部、研究３部会で必要と認められた場合に実施する。

＜様式＞

学校名	令和６年度 山形市立南小学校 山形市青田二丁目１番１号 TEL６３２－３６６０　FAX６３１－９０１９	校　長	横山　聡
		研究主任	小野　拓

研究主題

令和6年度研究主題＝学校教育目標

「夢を持ち、わたしの未来・わたしたちの未来を豊かに創造しようとする子どもの育成」（第1次）

副題　―3つの資質・能力の育成を目指したカリキュラムマネジメント―

研究の内容

★研究の内容＝学校教育目標具現化
大きく3つの資質・能力育成と3つの教育活動の方針

★研究の重点＝3つの方針から各学年で重点を１つ決めて　学年協働研究
授業研の教科も自由（総合的な学習の時間　道徳　特別活動も入る）
さらに学年で視点を加えて研究も可

◎育成を目指す資質・能力

1．生きる支えとなる資質
（1）　感性・感動・欲求の主体化
（2）　共生への志向
（人間関係形成能力・社会形成力）
（3）　基本的自尊感情

2．学習の基盤となる資質・能力
（1）　言語能力
（2）　メタ認知
（3）　問題発見・目標設定能力
※知的好奇心
（4）　問題解決能力
（仮説設定→実践→評価→仮説の再設定）
（5）情報活用能力（情報モラルを含む）

3．各教科で育成すべき資質・能力
◎　各教科等の学習指導要領解説参照

◎教育活動の方針

※丁寧な見取りと対話による子ども理解を土台とした教育活動の展開
①美しさ・面白さ・心地よさに浸ったり、没頭したりする教育活動（五感・身体を使った活動）
②遊び・生活の中の「不思議」「なぜ」等の問いを活かした教育活動
③生徒指導の４視点をふまえた教育活動

※全ての教育活動で、意図的・計画的に育成する。
①　丁寧に聞く・話す（言葉にこだわる）
・相手の意図を考えながら聞く
わからないときは問い返す
・伝わる言葉を選んで話す
②思考・感情・感覚の言語化
③「問い」を立てることを大切にする
④「自分づくり」「学校づくり」の推進

※教科の本質
①有意味学習
②オーセンティックな学習
③明示的な指導
※自己決定的学習
①順序選択学習
②課題選択学習
③課題設定学習

教育活動の3つの方針から1つ重点を選び、資質・能力の育成を目指していく

研究の方法	
	1（学級担任全員研究授業を基盤に） 学級担任全員授業　学校全体での授業研究会は６回（各学年１） ⇒２月の段階ではわかたけ学級除くとなっていましたが、これから通常学級との交流を進めていく、来年度誰がわかたけ学級を持つかわからないとのことから、わかたけ学級の学習の様子を見て、特別支援教育について学びたいとのご意見もあり、わかたけ学級は、自主公開という形で進めていく。 **2（学年協働的なグループ研究を昨年度から継続する。）** 学年で協働的なグループ研究。 ・教育活動の３つの方針から重点を決定。また、教育活動の重点等をふまえて内容の視点を加えて設定。５月の全体会の中でカリキュラムマネジメントを作成する。 （5月１０日、２０日の全体会で各学年で作成する予定） ・授業研に向けた事前研究会～授業づくりも学年で協働的に進める。 **3（こどもの学びの姿・事実をもとにした事後研究会）** 子どもの学びを丁寧に見取り、固有名詞や学びの具体的な姿から教科の本質（教科目標や教科で育成したい資質・能力）に迫ることができるような授業研究会を継続していくことは、大切にしていきたい。 **4（授業研究会のあり方）** A 学年協働研究　学年で同じ教科・同じ単元での授業研 指導案の形式はこれから検討し、後日提案しますが、昨年度までよりずっとシンプルにしたいと考えていく。 B 今年度、事後研究会の協議の視点なども変わってくることが考えられます。教育活動の方針が３つ。学年側から柱立てなども考えられる。 C 学年部で事後研だよりを作成（研究推進委員）。 D 12 月、１月ごろの全体会でカリキュラムマネジメント振り返りを行う。

学年　カリキュラム検討

1　ねらい

年間指導計画を見通し、重点的に指導する教科等（単元等）、そこで育成したい資質・能力を明確にして、児童の学力向上につなげる。

おおまかに年間を見通せるように。見通しをもって１学期の指導に当たれるように。

2　進め方

（１）総合的な学習の時間（３～６年）の年間指導計画を、検討する。

□現時点での計画で、途中で変更になる可能性はあり。

□今後の学習を進める上で、記述しておいた方がよいことは自由に記述する。

（２）児童の実態、学校経営方針と、年間指導計画を照らし合わせる。

生きる支えとなる資質を育むために

※丁寧な見取りと対話による子ども理解を土台とした教育活動の展開

①美しさ・面白さ・心地よさに浸ったり、没頭したりする教育活動（五感・身体を使った活動）

②遊び・生活の中の「不思議」「なぜ」等の問いを活かした教育活動

③生徒指導の４視点をふまえた教育活動

学習の基盤となる資質・能力を育むために

※　全ての教育活動で、意図的・計画的に育成する

①　丁寧に聞く・話す（言葉にこだわる）

・相手の意図を考えながら聞く
　わからないときは問い返す

・伝わる言葉を選んで話す

②思考・感情・感覚の言語化

③　「問い」を立てることを大切にする

④　「自分づくり」「学校づくり」の推進

⑤「失敗してもOK」⇒「失敗」を問題発見・目標設定能力で活かす

各教科の資質・能力を育むために

※教科の本質

①有意味学習

②オーセンティックな学習

③明示的な指導

③課題設定学習

そこで育成したい「資質・能力」と「活動の方針」を年間指導計画に手書きする。
□１．生きる支えとなる資質・能力　に関わるところを　赤
　２．学習の基盤となる資質・能力　に関わるところを　青
　３．各教科で育成すべき資質・能力に関わるところを　黄　のペンで囲む
　　一番多い色のところが、その学年で一番重点とする方針として捉える。
□できれば「活動の方針」を教科に落とし込んで具体化していく。

□学校として育成を目指す資質・能力は、全ての教育活動において普段から意識して指導していくべきものですが、特に重点とする教科等（単元等）は、ある程度絞ってもよい。

（３）他教科との関連を図る（教科で獲得した資質・能力を活用、発揮させて解決させる）場を設定し、年間指導計画で関連を図る単元をつなげる。
□「あの時学んだことが、ここの学習でも使えそう」と子どもに自覚させるには、私たちがまず自覚する必要がある。私たちが無自覚だと、ただ通り過ぎてしまう。
□１学期について、ひとつだけでいいのでまずは関連させてみる。

研究の計画

＜研究全体会＞
第１回　５月１日
第２回　５月１０日
第３回　５月２０日
今後、日程を相談し、学期ごとに学年カリキュラムの振り返り、調整を行う。２回程度
第６回　校内研修会　日程未定
第７回　２月

＜授業研究会　計画＞　第２回～第６回の日程は候補の段階
第１回　７月５日
　　４学年　授業者：小野　拓　　教科：理科

第２回　①９月１３日　②９月９日
　　２学年　授業者：小松　浩晃　教科：算数

第３回　①１１月６日　②１１月１１日
　　３学年　授業者：冨田　拓也　教科：算数

第４回　①１１月２７日　②１１月２５日
　　５学年　授業者：冨塚　南実　教科：

第５回　①１２月１１日　②１２月１３日　③１２月１６日
　　６学年　授業者：石山　尚弥　教科：体育

第６回　①１月２９日　②１月２７日　③１月３１日
　　１学年　授業者：芦田　遥　　教科：国語

校内研修会について
　昨年度は『言語能力の育成』ということで、山形大学の三上英司先生に講話をいただいた。

	今年度、先生方がどのようなことを学びたいか意見を集約したところ、 「生活科・総合について（特に課題設定）」「個人総合」「カリキュラムマネジメント」 「ICT 教育の推進」「言語能力の育成（昨年度とは少し違う内容で）」「特別支援教育（交流も含めて）」 「自由進度学習」などがでてきた。 そこで、この内容を受けて講師の先生を検討し依頼する。 ７月２９日（月）に校内研修を行う。

＜様式＞

学校名	山形市立西小学校 山形市西田三丁目２―１ TEL６４５－０３９０ FAX６４５－８５９４	校　長	小林　聡
		研究主任	伊藤　林大郎
研究主題	自ら考え，ともに学び合う子どもの育成（６年次） ～つながりを大切にした教育活動を通して～		

研究主題設定の理由

本主題は，「未来への夢を持って，豊かに学び，しなやかでたくましい子どもの育成」の学校教育目標を受け，主体的に学び，互いに相手を尊重しながら関わり合う中で，自分の考えを広げたり深めたりし，学び続けていこうとする児童を育成することを目指している。

１）　昨年度の研究内容について

つながりを大切にした教育活動

①授業づくり	②学級づくり	③学校づくり
《授業改善の工夫》 ・学年部１授業研 ・カリキュラムマネジメント表の作成・活用 ・研究の日常化	《学級を一からつくる取り組み》 ・学級目標づくり ・担任と子どもの信頼ベースの関係づくり ・子どもと子どもの共感的な関係づくり	《教育活動全体で取り組む》 「めざす子どもの姿」と学校行事等を関連させる。 各指導部と連携して,教育活動全体で「めざす子どもの姿」に迫れるようにする。
つながりを大切にした単元づくりの工夫	つながりを大切にした学級づくりの工夫	つながりを大切にした教育活動の工夫

①「授業づくり」

生活科，総合的な学習の時間を中核に据えたカリキュラム・マネジメント表を活用し，各教科の内容と育成を目指す資質・能力とのつながりを明確にした授業づくりを行った。特に，生活科や総合的な学習の時間では，児童の思いや願いを大切にすることで主体的に学習に向かうことができるようにした。また，各教科と生活科，総合的な学習の時間の学習との「つながり」を大切にした単元構想，授業づくりを行った。児童自身が教科の学習に「意味」を見出せるようにした。

②「学級づくり」

学級づくり重点「学級を一からつくる取り組み」では，学級毎に創意ある取り組みを行った。学級目標を，学習，生活，学校行事等のあらゆる場面で，自ら（自分たち）の取り組みを振り返る拠り所にすることで，自己や集団の変容や成長を自覚し，自信を高めていけるようにした。おしゃべりタイムなどにより，子どもと温かい信頼関係を築いたり，朝のスピーチや認め合いの時間などを設けたりすることで，子ども同士の共感的な関係づくりを支援するよう努めた。

③「学校づくり」

運動会や学習発表会などの学校行事では，分掌部長を中心に，行事を通してどんな力を身に付

けたり高めたりしていきたいのかを話し合い，「ねらい」を明確にした。また，行事ごとの「ねらい」を受けて，学年でもめあてを決め，取り組みの途中や最後に振り返りを行うことで，自分や集団の成長やよさを自覚したり，新たな目標を立てる態度を高めたりできるようにした。

④「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを大切にした教育活動

「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」は，互いに独立しているものではなく，「子どもの育ち」を真ん中にして互いにつながり合っているものと捉えて，校内研究を進めてきた。授業改善の工夫だけではなく，日常生活や行事，委員会活動など，教育活動全体を通して子どもの資質・能力を高めようと努めてきた。そのためにも，高めたい資質・能力を明らかにし，どの場面でどのような手立てをとって教育活動を行っていくかの見通しをもてるようにした。さらに，カリキュラム・マネジメント表を作成することで，これらの「つながり」をより見える化しようと試みた。

2）　昨年度の校内研究の成果と課題について

昨年度の研究を通して，「考えを伝える力が高まった」「ほかの考えを受け止める心が豊かになった」「目標に立ち返りながら，学び進められる児童が増えた」など，子どもの育ちの面で多くの成果が見られた。

一方で，「自分の思いをもつことのよさは，さらに実感させたい」「フォロアーシップの力の高まりには伸びしろがある」などの課題も挙げられた。また，「カリキュラム・マネジメント表の日常的な授業での活用に至らなかった」「総合的な学習の時間の計画や準備の時間が足りなかった」など，特に「授業づくり」に関わる研究内容の課題も明らかになった。

3）　今年度の研究の方向性について

令和６年度は「研究主題および副題」は昨年度と同様に設定する。また「研究内容」は昨年度と大きくは変更せず，明らかになった課題が解決できるようなマイナーチェンジを行いながら，校内研究を進めていく。校内研究の質をさらに高め，昨年度の課題を解決していこうとする試みによって，子どもの育ちにさらなる成果が期待できるのと同時に，教職員の「授業力」「学級・学校経営力」の向上が図れると考えるからである。

昨年度の校内研究の取り組みにより，「子どもの育ち」に関して多くの成果が挙げられた一方で，「研究の日常化」とくに「授業づくり」に関しては課題も明らかになっている。子どもたちの学校生活の大半は「授業時間」である。子どもの資質・能力を高めるために，われわれの研究を日常化していく鍵は，「授業づくりの充実」にあると考える。そこで，今年度は「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」の中でも，特に「授業づくり」に力を入れていきたい。

昨年度までの校内研究の取り組みを通して，「学級づくり」「学校づくり」のそれぞれの面で，子どもの育ちを支える「西小らしさ（成果）」があることも明らかになっている。これらの「西小らしさ」「西小の財産」は，今後も受け継いでいけるようにする。

研究の目標

【めざす子どもの学びの姿】

①「自分の考えをもち，学び続ける子ども」（主体的な学びの姿）

⇒自分事として課題を捉え，思いや願い，考え，こだわりをもって前向きに学ぶ姿。学習に対して見通しをもち，粘り強く取り組んだり，学びを自己調整したりする姿。学習活動を振り返って自分の変容に気付き，学びを次につなげたり，広げたりしようとする姿。

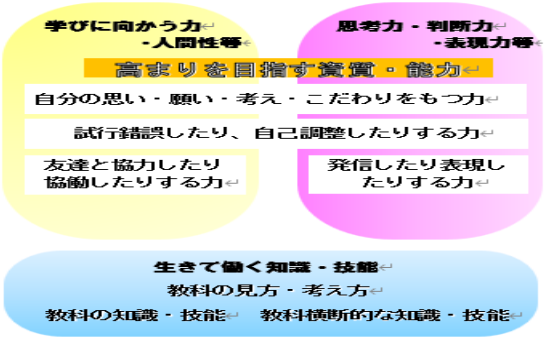
②「かかわりながら，ともに学び合う子ども」（協働的な学びの姿）

⇒友達と協力したり協働したりすることで，学びを豊かにしようとする姿。友達，教職員や地域の人との対話を通して，自分の考えを広げたり，深めたりする姿。学びを豊かに表現したり，発信し合ったりすることで，学びを広げたり，深めたりする姿。

【教育活動全体を通して高まりを目指す資質・能力】

（主体的な学びの姿に関わって）
１）自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力
２）試行錯誤したり，自己調整したりする力

（協働的な学びの姿に関わって）
３）友達と協力したり協働したりする力
４）発信したり表現したりする力



「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを大切にした教育活動全体を通して，１）自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力，２）試行錯誤したり，自己調整したりする力，３）友達と協力したり協働したりする力，４）発信したり表現したりする力の高まりを目指していく。

研究の内容

１）「子どもの育ち（高まりを目指す資質・能力）」を真ん中に，「授業」「学級生活」「学校生活」のつながりを大切にしていく。

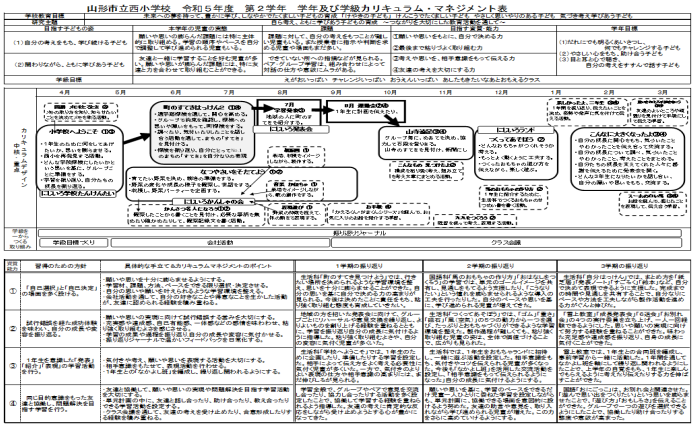
児童の実態や，担任団の願いを基に，学年ごとに４つの「高まりを目指す資質・能力」を設定し，「生活科，総合的な学習の時間を中核とした授業づくり」を中心とした全ての教育活動を通してそれらの力の高まりを目指していく。

「高まりを目指す資質・能力」は，主体的な学びの姿と関わるものとして２つ，協働的な学びの姿と関わって２つ設定する。**１）自分の思い・願い・考え・こだわりをもつ力　２）試行錯誤したり，自己調整したりする力，４）発信したり表現したりする力**の４つの**「高まりを目指す資質・能力」**を大きな視点して，子どもたちの実態や担任団の願いを基に，具体的な文言に表して設定していく。４つの「高まりを目指す資質・能力」は，「子どもの育ち」の一つの側面に過ぎない。「子どもの育ち」といっても多種多様である。子どもたち一人ひとりが見せる「がんばり」や「成長」も人それぞれであり，ここに価値があって，ここには価値がないと決めつけるものではない。しかし，我々が子どもの育ちについて語り合い，施した教育を評価し，改善していく中で指導力を向上させ，さらなる子どもの育ちに期していくための「子どもを見る共通の視点」として，４つの「高まりを目指す資質・能力」を捉えていく。

児童の実態や集団の特性が異なることから，「高まりを目指す資質・能力」の具体的な文言については，「４つの力」を大枠に，各学年で設定し，全ての教育活動を通して，育み，高めていけるようにしていく。

また，「子どもの育ち（高まりを目指す資質・能力）」を真ん中に，「授業づくり」「学級づくり」「学校づくり」のつながりを意識した教育活動を校内研究の大きな柱に据えながらも，特に「授業づくり」を充実させていくことを重点とする。

今年度も，「生活科，総合的な学習の時間を中核にした授業づくり」や「学級づくり」「学校づくり」の相互のつながりがより見える化され，日常で活用されるためのツールとして「カリキュラム・マネジメント表」を作成する。



≪カリキュラム・マネジメント表≫

①高めたい資質・能力を，学年毎に具体的な文言で設定する。②生活科・総合的な学習の時間をカリキュラム・デザインの中核に据え，各教科の重要単元との「資質・能力」でのつながりを可視化していく。③また，「学校行事」をカリキュラム・デザインに位置づけることで，年間を通した子どもの資質・能力の高まりをイメージできるようにする。

２）生活科・総合的な学習の時間を中核にし，子どもの思いや願いから出発する単元・授業づくりを行う。（授業づくり） **（今年度の重点）**

ポイント１　児童の思いや願いから出発する学習活動

子どもたちの「これがやりたい」「こうなりたい」「できるようになりたい」という思いや願いを大切にする。そのためにも，「憧れ」や「願い」をもったり，「問い」や「疑問」がうかんだりするような学習材や課題との出会わせ方を工夫していく。

ポイント２　生活科・総合的な学習の時間の充実

生活科・総合的な学習の時間は，自分の生活や生き方に特に関わった学習であり，子どもたちにとって自分なりの「願い」「思い」「こだわり」が生まれ，課題も自分事になりやすい。これらの学習を魅力あるものにし，充実させていくのと同時に，各教科の学習とのつながりを意識した単元づくりを行うことで，学習への意欲をたかめていく。

ポイント３　次の学びにつなげるふりかえり

自らの学習をふりかえり，学習の成果を確かめ，次の学習へと広げていけるよう促す。また，自分の成長を実感することが，子どもたちの次の学習への粘り強い取り組みを支え，よりよい学び手に成長できるように支援する。

３）学級生活の創り手は子どもたち！子どもたちが創る「あたたかい学級」　（学級づくり）

ポイント１　みんなで目指す学級目標づくり

子どもたちが一人ひとりの強みやよさを活かしあい，お互いの心を温めあいながら，ともにめざすクラスづくりの重点を，子どもたちも担任も「目指したい！」と思える目的づくり，すなわち「学級目標づくり」と捉える。子どもたちが協力したり，助け合ったりする場面を意図的に設け，その成果や課題を「学級目標」に立ち返って振り返ることで個や集団の成長を目指していく。

ポイント２　児童が創る学級の暮らし・学級文化

学級の暮らしや文化を創る主体を「子どもたち」と捉え，子どもたちの積極的な参画による自律的・自治的な活動を大切にする。「どういう学級であってほしいか。」「そのためにはどのような活動やきまりごとを大切にするか？」「どういう行動や言動を増やしていきたいか？」といったことを話し合い，すり合わせる自治活動を学級文化を創造する活動の基盤とする。

ポイント３　担任ー子どもの信頼ベースの関係づくり

「管理＝服従」の関係ではなく，「指導・援助＝信頼」の関係を目指す。子どもの「できているところ」「がんばっているところ」に目を向け，言葉をかけていくことで子どもたちの「心の体力（岩瀬直樹　クラスづくりの極意より）」を温め，自分らしく学習したり生活したりできるようにする。

ポイント４　子どもー子どもの共感的な関係づくり

担任と子どもの信頼ベースの関係を土台として，子どもたち同士も互いのよさや頑張りを認め合い，励まし合えるような関係づくりを目指していく。

４）カリキュラムに積極的に子どもたちが参画する　（学校づくり）

ポイント１　児童が主体となって創り上げる学校行事

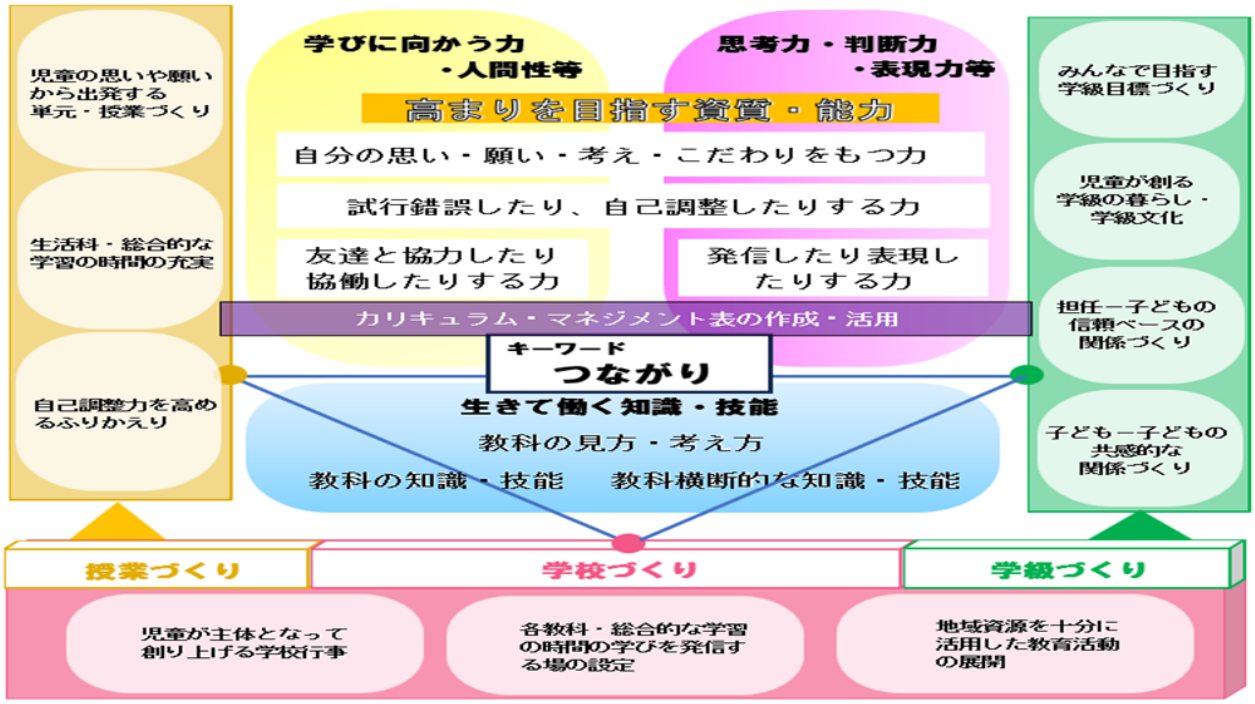
各分掌部長を中心に，学校行事で目指す子どもの姿をイメージし，ねらいを設定する。学校行事の計画や運営に子どもたちが積極的に参画し，主体的に活動できるように支援・指導していく。

ポイント２　各教科・総合的な学習の時間の学びを発信する場の設定

学びを学級，学校全体に向けて表現・発信する場を設定する。さらに，生活科や総合的な学習の時間の学びの成果は，積極的に地域にも発信し，子どもたちの地域の参画意識を醸成する。

ポイント３　地域資源を十分に活用した教育活動の展開

保護者や地域の人，専門家などの人的な資源や，公民館，博物館などの社会教育施設や団体，その他，各種の団体などの組織的な資源を工夫して活用していく。



≪令和６年度の研究内容を図示したもの≫

研究の方法

◆授業研究を通して研究主題の実現に迫る

・授業研究会は各学年部で１回の実施する。本時のみの研究・授業づくりとならないように，カリキュラムマネジメントや目指す資質・能力とのつながりを明確にした単元・授業づくりに学年で取り組む。授業者以外の職員も指導案づくりに関わるほか，先行授業を行ったり，同単元の別の授業を行ったりするなどして，単元・授業づくりに積極的に関わり，学年ごとに研究を深められるようにする。

・事後研究会はワークショップ型で行い，児童の姿を基に話し合いを行う。

・「事後研だより」を発行し，全職員に配布する。事後研究会の協議内容を共有化し，各自の授業実践に生かしていく。

・外部講師による校内研修会を計画し，研究の充実を図る。

◆「学級を一からつくる取り組み」で学級経営に力を入れる

研究主題に迫るためには教師と児童・児童同士の関係づくり，児童にとって安心できる居場所づくりが必須である。そこで「学級を一からつくる取り組み」を実施し，「教室」という安心して学習に臨むことができるコミュニティを確立することによって，校内研究を進めていく上での土壌を築いていく。

そのために，今年度も，学級経営に係る実践交流会や校内研修会，おしゃべりタイム（教師と児童一対一で話す機会）等を計画し，丁寧な児童理解を心がけ，児童の個性や長所を伸長させたり，成長に導いたりしながら，温かい学級・学年づくりに努めていく。

◆各指導部と連携しながら，教育活動全体でめざす子どもの姿に迫る

・全ての教育活動を資質・能力を育む場と考え，校内研究を意識しながら取り組んでいく。全職員は見通しをもって支援にあたり，最後まで見届ける。

・学校行事では，めざす子どもの姿に迫れるような「ねらい」や「内容」となっているか，研究推進委員と各指導部で連携して，検討していく。

・カリキュラム・マネジメントの研修会を開き，全ての教育活動と資質・能力とのつながりが「見える化」されたカリキュラム・マネジメント表づくりに努め，成果を指導に生かしていく。

研究の計画	項　目	実施時期	担当・参加者	備　考
	全体授業研究会 （大研）	６月下旬・１０月～１２月 （高学年部・中学年部・低学年部） ※指導主事派遣申請後日程が決定	学年部 １授業 特支除く	事前研　　：学年 授業参観・事後研：全職員 ※助言者として校外の方１名。
	全体授業研究会 （中研）	７月～１月 ※１回目大研以降	学年部 １授業	事前研　　：学年 授業参観・事後研：全職員 ※助言者はお招きしない。
	研究推進委員会	定例推進委員会 ４月　　主題・計画の提案 ５月　　指導案形式の検討 １月　　研究のまとめ ２月　　研究紀要の作成 そのほか，必要なときに開催する	研究推進委員	各学年の研究推進 ※情報発信，とりまとめ等 指導主事派遣申請（主任） 授業研究会の運営・記録　事前（後）研の運営・準備 校内研修会の運営・準備 研究紀要の提案（主任） 研究紀要の取りまとめ
	研究全体会	４月　　今年度の研究方針 　　授業研の日程調整 ５月　　指導案形式の検討 ７月　　前期の反省 １２月　　年間反省・実践の整理 ２月　　成果と課題の集約 　　研究紀要の作成 　　来年度の検討	全職員	推進委員会で提案・運営 《研究紀要》 ※各自ファイルに作成 ① 指導案 ② カリキュラム・マネジメント表 ③ まとめ
	校内研修会	１回目：　６月 ２回目：１１月 ３回目：　１月 ※年３回を予定しています。	全職員	講師：検討中 内容：検討中

＜様式＞

学校名	山形市立東小学校	校　長	古原 靖子
		研究主任	佐藤 史恵

研究主題	**学びに向かい　自分を見つめる子ども**
研究主題設定の理由	本校の学校教育目標は、「あかるく　かしこく　たくましい子どもの育成」である。学校のめざす子ども像は、「あかるい子・かしこい子・たくましい子」として、東小の子どもたちが、仲間を受け入れたり自分を表現したりしながら、自ら考え、判断し、よりよい課題解決に向けて粘り強く取り組むことをめざしている。さらに、学校教育活動全体を通して、自分のよさや成長を実感し、これからの社会を生き抜く粘り強さを身に付けていくことをめざしている。また、よりよい社会を創るという昨今の教育的背景を踏まえ、仲間と協働し、学び合う中で、基礎・基本の力を身に付け、学習者である子ども自らが、目標に向かって自己調整できるように学校教育を通じて取り組んでいかなければならない。 そこで、研究主題を上記の**「学びに向かい、自分を見つめる子ども」**とし、**国語科・算数科の授業改善**を軸にめざす子ども像にせまっていく。また、学ぶ心地よさを実感できる学習習慣づくり、子ども一人一人の個性を受け止めて適切な支援を探る子ども理解についても、学びの土台として継続的に取り組んでいく。 授業実践の中で見られる子どもの姿だけを追究するのではなく、日々の子どもの変化をとらえ、子どもの思考と照らし合わせながら行動の意味を考えていく教師の姿勢を今年度も大切にする。**授業を通して安心して過ごせる学級経営**を実践し、子どもたちの未来に役立つ主体性や協働性、自己調整力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えている。 この研究主題に込めた思い（意味）は、次のとおりである。 **「学び」・・・・・・・・・・・・教科の学び（学習の基礎基本も含む）、総合的な学習の時間の学び、行事における学び等、学校教育全体における学び** **「自分を見つめる」・・・自分の弱みと強みを認識する、自分の行動・言葉をふり返る、自分のよさに気付く、目標に向かうためにできることを考える等**
研究の視点	この研究主題を実現するために、**国語科・算数科の授業改善**を軸にして、全ての教育活動において、子どもの育ちをとらえていく。以下の視点をもとに実践していく。 ＜視点1＞ 国語科・算数科で育てたい資質・能力を明らかにした授業・単元づくりにおいて、基礎・基本が身に付く学習活動、手立ての追究 ＜視点2＞ 子どもの学びの姿のとらえ方、育てたい資質・能力に照らし合わせた評価、適切な支援の追究

研究の視点	<視点3> 子どもの変容・成長を価値づけ、学習者自身が自分の成長に目を向けることのできるふり返り これらの視点の追究は、子どもたちが安全で安心できる学級経営が土台となる。 ◇学びの土台◇ 安心して学ぶことのできる学級経営 基本的な学習習慣を身に付け、「学び方」を学ぶ。 規範意識の育成と教師の毅然とした態度 一人一人の子どもを理解して支援し、子ども自身の自己肯定感を高める。 学び部と連携し、「東小の学び方」を身に付けられるようにしていく。 実践者がこれらの3つの視点・学びの土台を意識して実践を積み重ねていくことで、教職員全員で教育の方向性を確かめたり、授業づくりや学級づくり、支援のあり方や教師の意識について共通理解を図ったりすることができると考える。さらに、国語科・算数科の授業改善を軸として全教育活動において日常的、継続的な実践にすることによって、東小の子どもたちの強みに磨きをかけ、弱さに向き合い、子どもたち自身が未来を豊かに生き抜く力を育んでいく。
研究の内容・方法	**<視点1>** **国語科・算数科で育てたい資質・能力を明らかにした授業・単元づくりにおいて、基礎・基本が身に付く学習活動、手立ての追究** ・1単元、1時間のゴールの姿を具体的にイメージする。育てたい資質・能力を明らかにし、その力を身に付けるための学習活動、手立てを工夫する。 ・国語科：書く領域　算数科：数と計算領域 において、基礎・基本の力の定着に向けた取り組みを実施し、6年間の系統性を考えながら、1年間の学びを積み上げていく。 ・国語科、算数科の教科部会を設定し、新教科書の教材研究、育てたい資質・能力を身に付けるための具体的な手立てや学習活動、子どもの思いを出発点とした単元づくりの方法等を探る。 **<視点2>** **子どもの学びの姿のとらえ方、育てたい資質・能力に照らし合わせた評価、適切な支援の追究** ・授業や学習活動における、めざす子どもの姿を具体的に設定し、育てたい資質・能力が身に付いている（身に付けようとしている）姿、新たな支援や手立てが必要な姿等を記録していく。 ・教職員間でとらえた姿を共有し、子どもを多角的に受け止め、次の支援を探る。 ・どのような姿になっていると育てたい資質・能力が身に付いたと言えるかを明確にして授業実践にあたり、規準にもとづいて評価し、一人一人の子どもにとってよりよい支援を考えていく。 **<視点3>** **子どもの変容・成長を価値づけ、学習者自身が自分の成長に目を向けることのできるふり返り** ・ふり返りの視点を工夫し、他と比べるとらえ方から、自分の学びの過程に目を向けられるようにしていく。 ・重点的な取り組み、蓄積の実施などを通して、自分の成功を実感でき、自己調整の仕方を知り、これからの学びにつなげられるようにしていく。 **<提案授業　実践>** ・**日常の授業実践を通して学級経営**を行っていき、 子どもたちが「できた」「分かった」と学ぶ喜びを感じられること。 仲間と共に学ぶことに心地よさを感じて安心して自己表現できること。 を実践していく。 ・研究中心教科は、**国語科・算数科**とする。 ・提案授業は、全教員が行う。各学年、国語科・算数科の提案授業を実践する。 さわやか学級は、国語科・算数科・自立活動・生活単元の中から提案授業を行う。

	・提案授業は教職員同士の学び合いの場であり、子どものとらえ方のトレーニングの場でもある。録画記録も行い、直接参観できなかった実践についても学べるようにしていく。 ・各学年の提案授業、さわやか学級2クラス　合計14の提案授業に外部講師を招聘することを計画し、ご指導をいただいて学ぶ。提案授業のつながりを意識し、事後研究会で話し合われた成果や課題を次の提案授業に生かしていく。 **＜研究の日常化（子どもの育ちの追究の日常化）のため＞** ・学校行事、縦割り活動、学年の取り組み、総合的な学習の時間などの学びにおいても、めざす子どもの姿の具体像を設定し、育ちの追究をしていく。 ・学校行事や縦割り活動など、全学年で取り組む教育活動については、実践後のふり返りや子ども見方やとらえ方を共有し、次の支援や学びにつなげていけるようにする。 ・一日の時数を5と1/3時間としている教育課程の利を生かし、放課後の授業づくりや教師間の情報交換を行う。
研究の組織	研究全体会 研究推進委員会 国語科・算数科の教科部会　を設定していく。 ＜教科部会について＞ ・校内研修日（木）や、教材研究日（金）などを必要に応じて設定し、国語部会・算数部会を開く。 ～教科部会で大事にしていくこと～ ① 学校全体で力を入れていくことが確認できる会にする。向かうべき指導の方向性を確認し、子どもに力を付ける。 ② 授業の作り方を学ぶ会にしていく。 ③ 子どもの見方、とらえ方を共有し、広げる会にしていく。 ・学習指導要領、教科書を持参する。 指導と評価の一体化（国語科・算数科）を研究部でも購入増を検討していく。 ・国語科、算数科主任、研究推進委員会のメンバーが中心となって教科部会を進めていく。

令和6年度　校内研究　年間予定　　5月24日時点

年間通して　木：校内研修日　金：教材研究日　★は、年間計画になくて挿入したもの　網掛けは全体研修や研究推進委員会

		国語部	算数部
4月9日	火	**研究全体会** **研究の方向性　視点・内容について　年間予定案**	
11日	木	顔合わせ　年間計画について　新教科書をもとに指導の重点の話し合い 例：とびら「つづけてみよう」等書く力を高めることについて	顔合わせ　年間計画について　新教科書をもとに指導の重点の話し合い 例：基礎基本の６年間の見通し（落としてはいけない事項）
24日	水	**研究推進委員会** **指導案の形式　年間計画について**	
25日	木	年間提案授業について　教科部の後→学年部で相談→５月２日まで	年間提案授業について　教科部の後→学年部で相談→５月２日まで
5月1日	水	**全体研修　「新しい学習指導要領において期待される学び」ふり返りを重点に。** **動画視聴後→低・中・高（さわやかは分かれて）でのふり返り視点原案作り**	
２日	木	提案授業１の事前検討会	
９日	木	**全体研修「通常学級における特別な配慮を要する子ども対応研修」**	
10日	金		提案授業１の事前検討会
20日	月	**定例ケース会議→ＬＤ対応研修会　川村先生を招聘して**	**定例ケース会議→ＬＤ対応研修会　川村先生を招聘して**
23日	木	~~全国学力調査の体験→指導ポイントの確認~~→６月１４日へ	~~全国学力調査の体験→指導ポイントの確認~~→６月１４日へ
29日	水	**提案授業1　実践学級(　4の1　国語　佐史　　)**	全員参観にするか要検討
31日	木	全員参観にするか要検討	~~**提案授業1　実践学級(　　)**~~
★6月5日	水	提案授業１の成果と課題の確認（提案授業２に向けて） 提案授業２の検討（宿泊引率者以外で）	提案授業１の成果と課題の確認（提案授業２に向けて） 提案授業２の検討（宿泊引率者以外で）
13日	木	提案授業２の検討	提案授業２の検討
14日	金	~~評価について　　全国学力調査の体験→指導ポイントの確認~~ 電子黒板の活用研修	~~評価について　　全国学力調査の体験→指導ポイントの確認~~ 電子黒板の活用研修
26日	水	**提案授業2　実践学級(　2の1　渡辺T　午前中予定　　)** 学習センター：元木徹指導主事	**提案授業1　実践学級(　6の1　渡部T　　5時間目予定)** 学習センター：田井地指導主事
7月4日	木	提案授業２の成果と課題確認（提案授業３に向けて） 提案授業３の検討	提案授業２の成果と課題確認（提案授業３に向けて） 提案授業３の検討
11日	木	提案授業３の検討　※場合によっては別日になる可能性あり	提案授業３の検討
16日	火	**提案授業3　実践学級(　6の2　渡邊T　　)** 市教委：有澤指導主事	全員参観にするか要検討
22日	月	全員参観にするか要検討	**提案授業2　実践学級(　1の2　音山T　　)** 学習センター：田井地指導主事
25日	木	提案授業３の成果と課題（提案授業４に向けて）	提案授業３の成果と課題（提案授業４に向けて）
（29日）	月	カリマネ検討会 重点教科についても　意識的にふり返り 反省職員会議の中で**研究全体会**をもつ方向を検討中（**１学期の子どもの育ち**について）	
夏季休業		NRT分析をどこか共通で日にち設定必要。教務部と相談	NRT分析をどこか共通で日にち設定必要。教務部と相談

8月23日	金	提案授業４の事前検討会	提案授業４の事前検討会
8月29日	木	教育課程研究協議会参加の報告から学ぶ 夏季研修等の報告から学ぶ。	
9月6日	金	年間予定にはあるが、評価、評価簿作成に専念する。	年間予定にはあるが、評価、評価簿作成に専念する。
25日	水	提案授業４の事前検討会	提案授業４の事前検討会
26日	木	運動会で育てたい子どもの姿についての共有 全体での共有をしていく。	
		９月・１０月運動会終了までは、評価・個人面談・運動会準備・運動会のため、提案授業の設定はできないのではないか？ ※授業構想等はもっておく。	
10月21日	月	運動会のふり返り 各学年で話し合う時間でどうか。（校外学習日や準備等ありのため）各学年のふり返りの共有は別の形で。	
29日	火	**提案授業4　実践学級(　　5の1　秋山T　　)**	**提案授業3　実践学級(　　2の2　渡邉T　　)**
11月7日	木	提案授業４の成果と課題　（提案授業５に向けて） 提案授業５の事前検討会	提案授業４の成果と課題　（提案授業５に向けて） 提案授業５の事前検討会
19日	火	提案授業５の事前検討会 提案授業６の事前検討会	提案授業５の事前検討会 提案授業６・（７）の事前検討会
27日	水	**提案授業5　実践学級(　　3の1　長沼T　　)**	**提案授業4　実践学級(　　3の2　　星T　　)**
12月2日	月	提案授業５の成果と課題（６に向けて） 提案授業６の事前検討会	提案授業５の成果と課題（６に向けて） 提案授業６・（７）の事前検討会
12月4日	水	**研究推進委員会 今年度の実践まとめについて**	
12月12日	木	**提案授業6　実践学級　（　　1の1　丹T　　)**	**提案授業5　実践学級　（　　5の2　工藤T　　)**
16日	月	研究全体会 今年度の実践まとめについて※まだ提案授業が残っているが、見通してとして「実践まとめ」を提案予定	
18日	水		**提案授業6　実践学級　（　　4の2　柴田T　　)**
19日	金	提案授業６の成果と課題	提案授業６の成果と課題

1月8日	水	**研究推進委員会 今年度の研究の成果と課題　まとめについて　全体会の持ち方**	
		１月・２月前半まで　スキー教室・雪上教室準備・実施等あるため、教科部会設定できない。しない。	
2月6日	木	翌日の学習参観へ向けて授業づくり　各学年・学級・個人で。	翌日の学習参観へ向けて授業づくり　各学年・学級・個人で。
2月17日	月	**研究全体会 今年度の研究の成果と課題（子どもたちの伸びと課題）を子どもの姿を出し合う。**	
2月19日	水	**研究推進委員会 子どもの姿をもとに、来年度の方向性を検討**	
2月27日	木	CRTの考察　補充・復習の進め方について	CRTの考察　補充・復習の進め方について
3月12日	水	**研究全体会 来年度の方向性について**	

□一人1授業を基本としていく。（担外の先生方は受け持っている教科の中で実践する。）
□すべての記録を動画記録しておき、全職員が見られるようにする。
□さわやか学級の授業研究会は、国語・算数の他に、自立・生単も実践教科の選択肢とし、さわやか内での参観（交流学級担任の部分参観）とする。
（動画記録をしておき、全職員が見られるようにする。）
□全提案授業に外部講師招聘を検討しているが、日程が前後する場合はあり。可能な範囲で実施していく。
　さわやか学級については、川村先生を調整していく。
　通常学級は、市教委、県センター、附属、校長先生・教頭先生の人脈　等。

学校名	令和６年度 山形市立鈴川小学校 山形市鈴川町三丁目７番１０号 TEL６２２－２１５８　FAX６３３－９５７１	校　長	鈴木　伸治
		研究主任	荒井　敦子

研究主題

「気づき、考え、働きかけ、受けとめる」子どもの育成
（第二次）

―子ども主体の学びの追究から「ともに、くらしをつくる」―

研究主題設定の理由

学校教育の目指す資質能力とは、
正解の見えない未解決な課題に対して自らの「個性を生かし多様な人々と協働して新たな価値を生み出す力」（みんなが納得し合意のもと最適解を導き出す）
ではないだろうか。

子どもたちが人生を歩む上で様々な問題場面に出会う。それらの問題を解決するために、問題を正確に把握し（**気づき**）自分事としてめあて（課題）をもって問題解決に挑む主体的な態度（**考え**）が必要であると考える。さらに、自分一人では到底解決できない問題は、専門家や仲間と解決しようとする協働的な態度（**働きかけ**）も必要だろう。そして、自分なりに振り返り、その問題解決の方法や最適解を修正・更新（**受け止め**）し、自分らしく、くらしをつくる人になってほしいと願っている。

そのためには、鈴川小学校の子どもたちの「ともにくらしを創る」ために必要と考える資質・能力を捉えて、子ども主体の授業を充実させていくことが求められる。これまで以上に、子どもの実態や学校教育目標の具現化に必要な教育内容を教科横断的な視点のもとに構成した授業作りを推進していきたい。

さらに、学年での生活科や総合的な学習の時間、各教科の学習の推進や指導部での特別活動の推進を図り、授業づくりを関連させていく。

今年度は、これまでの「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の推進と共に、令和の日本型学校教育の充実を推進し、**「気づき・考え・働きかけ・受け止める」子どもの育成**を目指して校内研究を進めていく。そして、全ての子どもを**「自らくらしをつくる子ども」「ともに、くらしをつくる子ども」**に育てていきたい。

研究の目標

第１回研究全体会では、研究主題「気づき・考え・働きかけ・受けとめる」子どもの姿や言葉について話し合われた。その中で**「気づき・考える」**子どもたちの姿や言葉、それらを引き出す手立てなどは活発に意見が出た。しかし、本校の研究の独自性のある**「働きかける・受けとめる」**という子どもの姿・言葉やそれらを引き出す教師の手立てなどでほとんど意見が出されなかった。つまり、その部分でぼんやりとしたイメージで「どんな姿？」まで言語化できるまでは至っていなかった。そこで、今年度の取り組みを通して、特に学習の過程の**「働きかける姿や言葉」とは？それらを引き出す手立てについて**、理解を深めていきたい。また、先生方から**子ども主体の学びの追究**で大切にしたいキーワードとして**①「あたり前のその先へ」②「自分事」③「変容の自覚化」**が出された。私たち教師は、当たり前だと思っていた日常やそれまでの自分の知識や概念とのずれや違和感に気づき「あれ？」「もっと」と、自分事の課題から１人１人の子どもの学びが進められているのか？学びを通して変容を自分で自覚して学習の手ごたえを感じ取っていたか？を大切にしながら毎時間の授業を作っていきたい。また、子ども主体の学びの追究から『自らくらしをつくる子ども』『ともにくらしをつくる子ども』につながる資質能力とはどんなこ

となのか、その能力と力をつけるための手立てを探っていきたい。最後に、子どもと毎日関わる私たち教師は、子どもの「気づき」に「気づき」、受けとめ、学びにつなげられるようにしていきたいと共通確認した。

研究の内容及び方法

研究の内容

1　子ども主体の学びの研究をする

・子どもは有能な学習者ととらえ→自ら学ぶ→学習者中心に授業を作る
・具体的な姿を通して実践研究を積み上げていく。
・子どもの姿をもとにした事後研究会とする。

2　職員の協働研究を大切にする

①　学年での事前研究・研究授業・事後研究を推進する。
②　授業者とその学級の児童の姿から学ぶ意識をもつ
・参観者は、学習活動案・研究授業・事後研究会で、授業者と児童の姿から成果を見出し、日頃の実践に活かすようにする。授業者は、授業後と事後研究会後で、省察した自分の成果や課題を子どもの姿から見出し、日頃の実践で活かしたり解決したりする。
③　運動会や児童会などの特別活動では、全職員で校内研究を意識しながら全校児童の支援にあたる。

3　令和の日本型学校教育への移行

①　能動的な学習の文脈（主体的・対話的で深い学び）を意識した単元づくり。
②　一人一人に応じた学習の文脈（個別最適な学びと協働的な学び）を大切にして個別最適な学び・指導の個別化・学習の個性化を探究していく。

学習の流れ

①　情報の受信（インプット）　→　情報を主体的に受信したくなる課題設定
②　情報の発信（アウトプット）→　表出することで**自覚化**、異なる多様な他者の情報の分析
③　情報の再構築　→　再思考・更新・修正・一般化・概念化

まとめとふり返りを大切にしていく

・各教科等の「見方・考え方」を働かせた深い学びについて、まとめることができる
・児童が学習のまとめやふり返りを自らの言葉や文字で表現できるようにする。
自らくらしをつくる、ともにくらしをつくる資質・能力にどのようにつなげていけるか記録し、検証していく。

（振り返り→**気づき**→課題設定→情報収集）統合化メタ認知　**学習の構造化・連続性・日々のくらしへ**

令和の学び
①　情報の受信（インプット）
②　情報の発信（アウトプット）
③　情報の再構築

目指す子どもたちの学びの姿

好奇心・自立的欲求
向社会的欲求

→

学習活動
言葉による自覚　手応えの実感

→

充実感・達成感・自己有能感・一体感

個別に学ぶ前
目的や課題、**見通し（ゴール・プロセス）を明らかに**し活動の方法や内容や方向性を**自覚する**

→

個別に学ぶ場面
①　習熟度、興味関心、学習方略、認知特性など、子どもの多様性に応じて設計する
②　どんな情報を、どこで、どのようにして獲得するのかを設計する

→

個別に学んだ後
交流や振り返りで知識が繋がり精緻化し、手応えを実感する

研究の計画

４　研究の計画・組織

（１）校内研究会の全体計画

	日程	内容（研究授業学級・授業者）	担当	アドバイザー
第　１回	5月2日（木）	主題・計画の提案	推進委員	
第　2回	5月２０日（月）	授業研究会【大研①】 １年２組	２年	野口先生
第　3回	7月　5日（金）	授業研究会	学年	
第　4回	７月２３日（火）	授業研究会【大研②】 ６年３組	５年	野口先生
第　5回	１０月２５日(金)	授業研究会	個別７	
第　6回	１１月　6日（水）	授業研究会	個別６	
第　7回	１１月１１日（月）	授業研究会【大研③】	個別３	
第　8回	１１月１９日（火）	授業研究会・中研 ４年３組	３年	
第　9回	１２月4日（水）	授業研究会【大研④】 ３年１組	４年	野口先生
第１０回	１２月　１１日(水)	授業研究会 個別２	個別	
第１１回	１２月１３日（金	授業研究会 個別５	個別	
第１２回	１２月１８日（水）	研究紀要・成果と課題について	各学年	
第１３回	１２月２０日（金）	各学年のカリキュラム・デザイン （学年経営案）振り返り	推進委員	
第１４回	1月　22日（水）	研究紀要の綴じ込み	推進委員	
第１５回	２月7日（金）	全体の成果と課題と来年の方向性	推進委員	

※　同学年の学級は、同じ教科・同じ単元の授業を行い、授業創りに協働的に研究を行う。
　授業研究会を学年部（低・中・高・個別）で行う。【大研】は学年部で１授業提案。【大研】ではない学年は中研。【大研】【中研】以外の先生は小研として授業を行う。

（２）研究推進委員について

校長	教頭	１年	２年	３年	４年	５年	６年	個別	教務
鈴木	有川	荒井	髙橋	村上	横山	青野	佐藤保	石沢	多田
顧問	顧問	主任	副主任	記録	会場	記録	用具	会場	日程

・研究主任　　荒井敦子　　・副研究主任　髙橋眞子（事後研運営）…次第、協議の視点
・会場準備　・用具準備（マジック・画用紙・マグネット・付箋）
・記録写真

学校名	山形市立千歳小学校	校　長	富樫　朗
		研究主任	門間　祐

研究主題

自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成（１年次）

－「つながり」「かかわり」を重視した授業づくりを通して－

研究主題設定の理由

日本財団による「第62回意識調査『国や社会に対する意識（６カ国調査)』調査報告書」から、日本は他国と比較して、以下の特徴があると考察した。

・自国や自分自身に対して夢や希望を持っていない若者が多い。
・自己肯定感の低い若者が多い。
・当事者意識が低い若者が多い。

これらのことについて、横浜創英中学・高等学校長の工藤勇一氏の考えを参照した。工藤氏は自らの著書等で以下のように述べている。

・みんながサービスを受けることに慣れすぎてしまった。
・過剰なサービスを受けることで、自己決定の機会を奪われ、自信と主体性をなくしていった。
・サービスを受けることに慣れると、それを理想とし、現実と比べて不満が募っていく。

これらを経て、結果として、うまくいかないのは「〇〇のせいだ」という考えに至ると推察される。
「〇〇のせいだ」というように、人のせいにする子供の姿は、昨年度の本校の課題の一つであった。例えば、廊下を走っていたことについて指導すると、「〇〇君も走っていた」というように、自分の行動を省みるのではなく、他者に責任があるかのような反応である。そこで、本校の今年度の教育目標を次のものとなった。

自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成

大小関係なく、子供の自己決定の場を増やすことで、自信をつけたり主体性を伸ばしたりする。自分に解決する力や現状を変える力があることを何度も自覚することで、自分は社会や世界を変えていくことのできる存在だと思ったり、社会を変えるのは自分だと考えたりすることにつながる。その結果、未来や自分に夢や希望をもつ。このような考えから設定した教育目標である。
この教育目標を受けて、研究主題を次のようにした。

自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供の育成（１年次）
－「つながり」「かかわり」を重視した授業づくりを通して－

教育目標の達成に向けて、様々な「つながり」や「かかわり」という視点での授業づくりを研究の対象とした。学校において、最も長い時間をかけているのは授業であり、授業とは日常的な営みと捉えられる。日常的な営みである授業の中でこそ、上述したような自己決定の機会をたくさん保障できる。そして、決定し行動するためには、その前に、考えて判断する段階がある。このとき、現在の自分の考えや思いだけを拠り所とせず、例えば他者の考え、環境など様々なものとかかわりながら、例えば過去の自分、友達の思いなど様々なものとつながりながら、考えたり判断したりする子供を育てたい。

研究の内容と方法	「かかわり」「つながり」を重視した授業づくりを実現し、自ら考え、自ら判断し、自ら決定し、自ら行動する子供へと育てたい。今年度の研究の内容と方法は次に示すように考えている。 （１）「かかわり」「つながり」を重視した授業づくりを実現するための教師の課題（以下、「授業づくりの課題」とする）を全教職員で探る。 ①各個人で、授業づくりの課題を３つの短冊に書く。 ②これについて全教職員で共有し、分類・整理する。 ③整理されたものそれぞれに名前をつける。これは、本校の授業づくりの視点ともする。 なお、ここで出された課題や、分類整理の仕方などは、研究を進める過程で更新する場合もある。 （２）授業づくりの課題に基づいて研究グループを決定する。 授業づくりの課題別の教職員グループを編成する。各教職員は、自身の課題意識に基づいて、問いを立て、実践を積み重ねるのである。子供に求められている主体的・探究的な学びを教師が実践し、協働的に研究を進めることを意図している。 （３）グループ単位で課題の解決・改善に取り組む 授業づくりの課題について、どのように研究を進めていくかを具体的に計画するのは、各グループを構成する教職員である。例えば、次のような計画が考えられる。 ・子供の考えをコーディネートすることに長けた先生の授業をグループで参観し、分析する。 ・単元づくりを学ぶために、関連する文献をグループで読んで語り合う。 ・グループの課題と似たような研究テーマの学校の公開研究会に参加し学ぶ。 これらは一例であるが、各グループの課題意識に基づいて計画され、日常的な実践の積み重ねが前提であることは言うまでもない。後述する研究の計画は、校内全体として研究の時間を設けたものであり、各グループが必要に応じて実践の場を設けたり、校内研究という枠でとどまらず日常の実践が研究そのものになったりすることを想定する。 （４）各グループの実践を他グループの教職員に報告する いくつかの授業づくりの課題とは、それぞれが別々のものではなく、複雑に絡み合ったものである。また、複数の授業づくりの課題は、よりよい授業づくりに向けて必要である。そこで、各グループの成果や今後の展望を踏まえた実践報告を定期的に行う。すると、各グループの実践が別の視点からも価値づけられたり、今後の研究の展開に示唆を与えたり、あるいは授業づくりの課題の更新の必要性に気づいたりなど、さまざまな効果を期待できる。特に、各教職員の毎日の授業づくりの手がかりとなる情報は、すぐに全職員に共有できるようにしたい。
研究の計画	前述したとおり、ここに示す計画は、校内全体で時間を設けているものである。 ４月１１日　　第１回　研究全体会（研究の方向性） ５月　１日　　第２回　研究全体会（ICT 研修会・課題検討） ６月　３日　　第３回　研究全体会（グループ研修　計画） ７月２２日　　校内研究日（グループ研修） ７月２９日　　校内研究日（グループ研修） ９月　２日　　校内研究日（グループ研修） ９月　９日　　校内研究日（グループ研修） １０月２８日　　校内研究日（グループ研修） １１月１８日　　校内研究日（グループ研修） １２月　９日　　校内研究日（グループ研修） １月２７日　　第４回　研究全体会（グループ研修まとめ）

＜様式＞

学校名	令和６年度 山形市立金井小学校 山形市立陣場三丁目７番６０号 TEL　681-8471　Fax　684-6768	校　長	高橋　浩
		研究主任	加藤　勝也
研究主題	自ら課題を解決する子どもの育成（1年次） ～ICT の効果的な活用を目指して～		
研究主題設定の理由	本校の学校教育目標は、「かしこく・なかよく・いきいきと」である。そして、学校教育目標を具現化すべく、めざす子どもの姿を「変化の激しい社会の中で、自己実現を図ると共に持続可能な社会を創る資質・能力を身につけ、自ら考えて行動する子ども」としている。 めざす子ども像の具現化には、すべての教育活動の中で、自己実現を図ろうとする意欲とともに、様々な資質・能力の育成、そして自ら考えて行動する力をバランスよく育むことが重要である。 これまで8年間にわたり「他者とのかかわりを通した学びの充実」に主眼を置き、そのためにどんな資質能力の育成が必要なのか、その資質能力を育むにはどんな手立てや方法が有効なのかを学んできた本校であるが、各学年の反省や子どもの姿等を整理したところ、次のような実態や課題が見えてきた。 **・課題に取り組むことはできるが、分かったことをもとに自分で課題を設定したり、失敗したときにどのようにすれば上手くいくかを自分で考えて学びを調整することが課題。　（学びの自己調整能力）** **・自分で見通しをたて、計画したり段取ったりしながら学びのゴールに向かって取り組む力が乏しい。（自己調整力・メタ認知）** **・学習内容に関する「問い」や「疑問」を持つ力や学んだことに対して「なぜそうなるのだろう？」という疑問を抱いたり、追究したりしようとする探究心に欠ける。　（知的好奇心や探究心）** **・（対人関係などで）困った状況が起きた際に、自分の力で解決する力が弱い。（問題解決力）** **・課題を解決する際に必要な資質能力や基礎学力に差がある。　（資質能力の偏り）** これらの実態を受けて部内で議論を重ね、今年度は次のようにしたいと考えた。 ①学校教育目標やグランドデザインでは、これからの社会で活躍できる人材の育成とそこにつながる資質・能力の育成をうたっている。 ②これからの時代は非常に予測が難しい状況になっており、解決しなければいけない課題も山積している。そのような世の中を生き抜いていくためには、「自分で課題を解決する力」が必要不可欠である。 ③しかしながら、子ども達の「自分で課題を解決する力」を育てるためには、確かな学力をベースとして多くの資質能力を身につけてさせていかなければいけない。当然、私たち教師も日々研鑽を積むことが非常に重要である。 ④特に、教師自身がICTへの見識やスキルを高め、同時に効果的な活用は図っていくことは、人材育成を図る上で欠かすことはできない。 ⑤そこで今年度は、「自分で課題を解決する子どもの育成」を目指しながら、同時に子ども達の確かな学力や資質能力を伸ばすためのICTの効果的な活用方法を研究テーマとしたい。		

研究の目標	①課題を解決するために必要な資質・能力を育てたり、ICT を活用したりすることを通して「自ら課題を解決する子どもの育成」が図れたのかを実践を通して明らかにする。（研究の視点） ②「自ら課題を解決する子どもの育成」に向けた、ICT の効果的な活用方法や ICT 活用における理論を学ぶ。（研修の視点） 【参考】自ら課題を解決するために必要な要素 （意欲+スキル+成功体験） ①課題解決に向かう力・モチベーション ②基礎学力（読み書き・計算） ③資質・能力（プレゼン能力・コミュニケーション能力・創造力・論理的な思考力、多面的・多角的な視点 等）
研究の方法	学び創造部として「自ら課題を解決する力を備えた子」は授業の以下のような姿に現れると考える。 もちろん、発達段階によって姿は異なるが、自身が担当する学年やクラスをもとにイメージする。 ●解決すべき課題を捉え、意欲的に活動に取り組む姿。また、達成・解決を図ろうとする姿。 ●個人の思考や困り感等を基に他者と協働し、課題を解決しようとする姿。 ●課題の解決に向けて、自身の持っている資質能力を発揮・活用している姿。 ●課題に対して見通しをもって粘り強く取り組み、学びを振り返って次の学習へつなげていく姿。 ●学習内容や日常の様々な事柄に対して「問い」や「疑問」をもち、追究・解決していく姿。 ●自分理解を深め、自分にあった適切な課題や解決方法を選択して学ぶ姿。 校内研究では、上記の具体的な姿の育成を目指しながら、次のような共通の手立てを講じたい。 （手立て1）カリキュラム・マネジメントを中心とした授業の検討・改善 小学校では、1年生から6年生まで発達段階が幅広い。当然、課題を解決する力を育てるためには、児童の実態（発達段階、興味関心の程度、レディネス 等）を考慮し、実態にあった教科・場面・教授法・手立て等を意図的に計画する必要がある。そのため、学年研究日やカリキュラム検討会を中心として授業改善に取り組みたい。 （手立て2）授業づくりでの取り組み ①児童が見通しのもてる授業づくり（板書の構造化、教育のUD化などこれまで校内で取り組んできたもの） ②ICTの活用（学習支援アプリや電子黒板の活用、実物投影機、デジタル教科書の活用 など） (手立て3)チームでの取り組み 昨年度は、学年で研究教科をしぼり研究授業に向けて1つの授業を作ることで子ども達につけたい力の明確化や教師自身のスキルアップを図った。しかし研究反省で以下のような課題も浮かび上がった。 ・（特に高学年では）教科担任制を取り入れており、研究教科の進度をそろえるのが非常に困難だった。 ・一部の先生に負担が集中し、学年での取り組みにはならなかった。 ・若い先生が増えているため、スキルアップということを考えるのであれば、一人ひとりの教員が実際に授業を作り、授業を公開していく必要性があるのではないか。 ・学年ごとの取り組みに留まってしまい、学校全体で研究を進めたという実感が得られなかった。 これらの反省を踏まえ、次のように取り組むこととする。 ①目指す子どもの姿、手立てを共通させることで、授業を作る視点や振り返る視点を明確にする。 ②実践教科のしばりをなくし、各人で実践する教科を決められるようにする。もちろん、学年内で同一の教科を選定しても良いし、学年内で教科チームのように分けてもOK。個々の負担が増えないように注意する。 ③1教員、1公開授業を原則とする。 ④学年研究日の新設。

研究の体制

（1）学年研究を基本とし学年研究日の設定や研究全体会の開催、行事毎の職員間による付けたい力の共有を行う。

（2）1職員1回の授業公開を原則として、日常的な授業研究に励む。また、子どもの様子や育ちに関して共有する機会を設ける。

（3）研究授業は小研・大研を設定する。大研は上学年・下学年から1名ずつ選出。小研は学年内で実施。

	大研について	小研について
対象	全体で2クラス（上・下学年で1）	1人1回（ただし、大研授業者は兼ねてOK）
事前研	上学年と下学年	学年ごと
参観	全教職員＋指導主事	学年＋参観希望者
事後研	大研授業後に実施 学び創造部で運営	学年研究日の中で実施 学年の学び創造部員が運営

（4）学び創造部内の体制

授業づくり班

・カリキュラム・マネジメント表の形式提案（佐藤ゆ）　【4月22日　提案】
・学習活動案の形式提案（渋江）　【4月22日　提案】
・授業記録の保存（各部員）
・学びの足跡　書式提案・集計・作成（今野）　【1学期中　提案】
・年間を通した授業実践と日々の子どもの学びの記録のよびかけ（各部員）
・実践原稿の取りまとめ（各部員）

授業研究班

・大研・小研の立案・事後研の運営と進行　（井上）　【4月22日　提案】
・小研時の声がけ、コーディネート（各部員）
・学年研究日の内容提案（庄司）　【4月22日　提案】
・講師を招いての研修会の計画・人選・アポ取り（寺村）　【4月22日　提案】
・研修全体会①②③④⑤の企画・運営・進行（伊藤）　【①②に関して4月22日　提案】
・校内研修会、指導部会の記録（各部員持ち回り）

部会運営

・指導主事、外部講師との連絡・調整（加藤）
・市への届の提出、市内研究主任会への出席（加藤）
・部会の運営・運営委員会への参加（加藤）

※複数人の配置だと分担があいまいになるので、今年度は1人1担当制とする。
※職員会議や終礼でも、各担当が提案・連絡をする。

年間計画	研究の年間計画（参考）		
	学年研究日を月に1回設定		
	指導部会0	4月2日（火）	顔合わせ・研究概要検討・スケジュール確認・役割分担
	指導部会①	4月22日（月）	学年研究日・カリマネ表・指導案形式・研究全体会①②の確認
	研究全体会①	~~4月15日（月）~~	全体構想共有・カリキュラム作り（1学期分）・大研授業者決定
		→5／2（木）に移動	
	研究全体会②	5月20日（月）	学級カリキュラム作り② 学年ごとに実施
	指導部会②	6月17日（月）	研究全体会③夏の研究会に向けて
	学年研究日①	6月20日（木）	学年での小研授業の振り返り・ICT 研究
	指導部会③	7月 8日（月）	1学期の分掌反省＆研究全体会③の準備
	学年研究日②	7月11日（木）	学年での小研授業の振り返り ICT 研究
	研究全体会③	7月29日（月）	職員研究会＆1学期の反省＆2学期カリマネ表の作成
	学年研究日③	8月夏休み中	研究を受けて各学年で設定
	指導部会④	8月27日（火）	1学期反省を踏まえた2学期の研究の進め方について
	学年研究日④	10月 3日（木）	学年での小研授業の振り返り・ICT 研究＆上学年事前研
	指導部会⑤	10月21日（月）	内容未定
	学年研究日⑤	11月 7日（木）	学年での小研授業の振り返り・ICT 研究＆下学年事前研
	授業研①	11月14日（木）	大研授業①・上学年
	指導部会⑥	11月18日（月）	研究全体会④に向けて
	指導部会⑦	12月 2日（月）	2学期の分掌反省、研究全体会④に向けて
	授業研②	12月 5日（木）	大研授業②・下学年
	研究全体会④	12月25日（水）	2学期の反省＆3学期カリキュラムマネジメント表の作成
	指導部会⑧	1月14日（火）	次年度の研究テーマや方法について
	学年研究日⑦	1月23日（木）	学年での小研授業の振り返り・ICT 研究
	指導部会⑨	2月10日（月）	意見集約、部内で方向性を決定、研究全体会⑤の計画
	学年研究日⑧	2月20日（木）	学年での小研授業の振り返り
	研究全体会⑤	3月 3日（水）	研究全体会・次年度の研究に向けて

＜様式＞

学校名	山形市立大郷小学校 山形市大字中野 506 番地 TEL 681-8472　　FAX 684-6292	校　長	鎌田　史顯
		研究主任	東海林　陽子
研究主題	『自ら愉しいくらしを創る子ども』(2 年次) ～「子ども主体の学び」を足場に据えて～		
研究主題設定の理由	戦後において最も大きな教育改革と言われている学習指導要領の改訂から５年目を迎えた。それに伴って、第６次山形県教育振興計画や山形市教育大綱等も見直しが図られ、「資質・能力ベース」の教育の具現化に向けて、子どもたちの実態や教育課題を明らかにしながら、教育活動を見直していく必要がある。 本校の子どもたちは、とても素直で、前向きに学校生活を過ごしている。また、高学年の子どもたちを中心に、自分たちでくらしや学びを切り拓いていこうとする気運も高まってきている。しかし、自分の考えで行動に移すことに自信がもてない傾向が強いため、学びや活動に対する子どもの遣り甲斐を高め、活動プロセスにおける自分の変容に気付き、自信を高められるように支援していかなければならない。 そのためには、「子ども主体の学び」が必要不可欠であり、年間を通して「子どもの育ち」をマネジメントしていかなければならない。その土台となるのが、日常的な子ども主体の「くらしづくり」であると捉えている。 以上のような教育的ニーズと子どもたちの実態を鑑み、研究主題を設定し、研究の３つの柱「主体性」「協働性」「自立性」をもとに、『子ども主体の学び』に焦点をあてて、行事や児童会活動・教科・総合的な学習等の子ども主体の授業や教師の支援について追究することにした。その教育の営みを確立することで、研究主題に繋がっていくものと考える。 【令和６年度の研究について】 各行事の目指す姿や、取り組み方については、研究の３つの柱「主体性」「協働性」「自立性」をもとに、子どもも教師も見通しをもって臨めるようになってきた。特に、行事はめあてが明確なため、子どもたちの意欲も持続しやすかった。また、学級で行事への取り組み方を話し合ってから活動をスタートすることで、さらに子どもの育ちにつながることもわかってきた。 全職員で行事では、子どもの力を伸ばす取り組みができて成果がある。授業でも研究実践したが、三本柱のどれにスポットを当てるかで、さらに共通のテーマに取り組みやすくなるのではと考えている。昨年度、授業研究会の中では、学習に向かう意欲を育む手立てや、計画を立て活動を進める力を育てていくこと、相手の思いに寄り添って聴く力を高めていくことが、子どもたちが主体的に学びをつくっていく上で大切ではないかとわかってきた。 そこで令和６年度は、まず研究の３つの柱の中の「主体性」に重点を置き、子どもたちの学びがより主体的に紡がれていくよう実践を重ねていくことにした。		
研究の目標	子どもの実態や学習指導要領の趣旨を踏まえ、子どもの育ちに向けた「子ども主体の学び」や「子ども主体のくらし創り」について、日常的に追究していく。		

研究の内容

（1）「子ども主体の学び」

単元づくり・授業づくりの始めの一歩は、「何を教えるか」ではなく、「子どもの実態から、どんな教師の願いを描くか」であり、「子どもの興味・関心から、どんな活動を展開していくか」である。教師には「させたい活動」がある。しかし、子どもたちの思いが乗らない状況で、その活動に取り組ませれば、教師主導に陥ってしまう。単元や授業をどのように展開すれば、子どもたちは、教師が「させたい活動」の必要性に気付くのか。教師の願いに近づけるために、子どもの実態を意識しつつ、『子ども主体の学び』を創造していくことが重要と捉えている。

（2）「子ども主体の授業」におけるイメージの共有

子どもの育ちを実現するには、全教職員で「子ども主体の授業」のイメージを共有することが、極めて大切である。本校では、授業づくりの３つの柱を『①**主体性**…自分ごとになる価値ある学び ②**協働性**…必要感ある仲間との交流　③**自立性**…自らのあり方への気付き』とし、授業づくりの大切な要素として捉え、全ての教育活動を創造する際に活用している。

(3)「主体性」を高める手立て

①学ぶ意欲を高める

・「わかった」「できた」「できるようになった」を積み上げる。

・「もっと知りたい」「もっと調べたい」「確かめたい」など、思いを十分に耕し学習のゴールのイメージを子どもたちと共有する。

・ゴールの姿は、活動の中で変わってもいい。（ただし、カリマネの付けたい力を狙った活動になりそうか要確認。）

②学習への見通しをもたせる

・ゴールの姿を子どもと一緒に考え、具体的に共有する。

・課題の理解
・既習との結びつき
・子どもと一緒の課題づくり

③相手の思いに寄り添って聴く力、話し合う力を高める

・分かってもらった嬉しさや分かってあげられた嬉しさなどを価値付け
・話し合ったからわかった、新たな考えが広がったなど、話し合うよい経験を積み上げていく
・高め合う集団（クラス）を自分たちの手でつくっていくことを意識付け

研究の方法

（１）日常的な教育活動における子ども主体の追究

①「くらし」の創造

学校行事や児童会行事、委員会活動では、子どもたちが強い課題意識をもって、自分たちの手で活動を切り拓き、互いに関わりながら取り組んでいけるようにしたい。それには、大まかな活動計画を子どもと一緒に考え、子どもたち自身が活動に見通しをもって臨めるよう支援するなど、具体的な教師の支援や児童理解のあり方について教職員ＯＪＴにより学び合っていく。

②「カリキュラム・マネジメント」（以下、「カリマネ」と表記）の推進

カリマネは、日常的に「子どもの育ちをマネジメントすること」である。子どもにとって、やり甲斐のある活動を通年にわたって繋げていけるように、「教育課程」並びに「学級経営案（学級カリキュラム）」について、十分に吟味して作成しなければならない。また、学級経営案（学級カリキュラム）は、年度当初の「紙キュラム」から、教育活動が進むにつれてＰＤＣＡサイクルによる加除修正を加え、年度末に完成を迎えるようなイメージで取り組む。子どもの育ちは「日常の教育活動」にあると捉えている。

③「生活科」「総合的な学習の時間」の実践研究

カリマネの中核となる教科・領域は生活科・総合であり、子どもの育ちの実現には欠かすことのできない教育活動である。子どもにとって遣り甲斐のある活動にするには、「単元の立ち上げ」で、学習に向かう意欲や思いを十分に耕し、大まかな学習の流れを子どもたちと共に計画するなど、「子ども主体の学びにするための教師の支援」が重要となる。『カリマネ研修会』等の実施についても、検討していかなければならない。

（２）授業における子ども主体の追究

①「校内授業研究会」

研究授業は一人一授業とし、できる限り全員が参加する。研究の窓口は限定せず、各自、学級経営の中核となる教科・領域を決めて実践を積み上げる。事前研究会は、授業者が自ら設定し、ＯＪＴによって「研究の３つの柱」を主軸に据えた授業づくりに重点をおく。事後研究会の運営については研究推進委員が中心となって行う。

②「七中校区　４校合同授業研修会」

単なる形式的な小中連携ではなく、中学校区を丸抱えにして、「子どもの育ち」を推進していく。子どもが本気なるような価値ある学びの創造や教師の支援について、４校で学ぶ。

研究の計画

月	活　動　内　容	主な研究内容
4	◆研究推進委員会	・研究の構想について ・「運動会」コンセプトの検討
5	◆研究全体会	・研究計画、提案授業、指導案　等
6	◆４校合同授業研修会	
7	★授業研究会　◆研究推進委員会	・「全校宿泊体験」コンセプトの検討
8		
9	★カリマネ研修会（適宜）	
10		
11		

12	◆研究推進委員会	・今年度の総括と研究紀要作成について ・「６年生を送る会」コンセプトの検討
1	◆研究全体会 ◆研究推進委員会	・学年部ごとの研究の成果と課題共通理解 ・次年度に向けての方向性
2	◆研究全体会	・次年度に向けての共通理解

※研究推進委員は、行事担当者とともに子ども主体の活動について検討する。

＜様式＞

<table>
<tr><td rowspan="2">学校名</td><td rowspan="2">山形市立明治小学校

山形市大字灰塚454
TEL 681－81473 FAX 684－6879</td><td>校 長</td><td>森谷 弘昭</td></tr>
<tr><td>研究主任</td><td>佐藤 綾</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">試行錯誤しながら追究し、ともに学び合う子供の育成
（3年次）</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">本校の学校教育目標は、『郷土を愛し、仲間と共に、夢をもって生きる子供を育成する』である。明治小の子供達が、6年間同じ仲間で学んでいくことの強みを生かし、仲間と心を通わせながら、学びを積み重ね、学んだことを生かし、自分たちで考え、学びを、生活を、学校を創っていくことをめざしている。
児童の実態から、研究主題を「試行錯誤しながら追究し、ともに学び合う子供の育成」とし、自分たちの生活や経験の中から課題を見出し、共に解決しようとしながら、更にこれからの自分たちの生活や学習への活用力を高めるような教育活動を展開していきたいと考えた。
研究主題に掲げた「試行錯誤しながら追究し」とは、「やってみたい」「分かりたい」「解決したい」など、子供自身に湧き上がった思いを原動力として能動的・協働的に問題解決に向かう過程で見せる子供の姿ととらえている。現在の本校の児童の実態からも、学習者中心の視点を大切にし、自分の思いをもとに探究を続ける力を育て、資質・能力を発揮しながら学びを深めている姿をめざす。また、「ともに学び合う子供」とは、失敗や間違いをお互いの学びのチャンスと捉えられる温かく安心した雰囲気、力を合わせる共生的な関係の中で、学びを広げたり深めたりする姿をめざしていきたいと考え、本研究の主題を設定した。</td></tr>
<tr><td>研究の目標</td><td colspan="3">①全ての教育活動において、「試行錯誤を生み出すための工夫」・「学びをつなぐための工夫」の2つの視点に沿って日々の教育活動における実践を重ねていく。

②子供の育ちに結びつく教師の意識の持ち方や支援の方向性を追究する。</td></tr>
<tr><td>研究の仮説</td><td colspan="3">・教師が、子供自身で学習課題を設定したり、選択したりする単元を構成することで子供が試行錯誤しながら追究する力が育まれるのではないか。

・教師が、子供自身が試行錯誤できる場を工夫して設定することで、子供同士が関わり合い、共に学びあうことの楽しさを子供に実感させることができるのではないか。</td></tr>
</table>

研究の内容

研究構想図

学校教育目標

郷土を愛し、仲間と共に、夢をもって生きる子供を育成する

「試行錯誤しながら追究し、ともに学び合う子供の育成」(3年次)

◎めざす子供像　・試行錯誤しながら探究する子供　・ともに学び合う子供

試行錯誤を生み出すための工夫

能動的・協働的に解決に向かう過程で見せる姿を、資質・能力を発揮しながら学びを深める姿と捉え、活動を構想する。学び合い、考えを深める授業になるよう、湧き上がった思いや自分の考えを言語化できるようにしていきたい。

学びをつなぐための工夫

すぐには、答えが見つからない問題もある。学びは連続している。そこで、友達と学び合って解決したり、既習事項を紐解いたり、他教科と合わせたりなど、学びをつないでいくことで、学びを深めていけるようにしたい。

□試行錯誤しながら粘り強く解決しようとするために

○自分の考えをもち、追究する時間や追究方法の選択を保障する。(個別最適な学び)
○思考を言語化していくよさを実感できるような工夫をする。
(思考や感性に関わる言葉がつまったノートづくり、思考ツールの活用など)
○教師の出と待ちを意識する。(どんな情報を、どこで、どのように獲得できるようにするか。)
○発問、言葉がけ、個別支援の工夫
○視覚的な手立ての工夫

□「自分ごと」となる学習課題にしていくために

○これまでの学びや、自分の生活、経験から学習課題を設定する。
○「解決したい」「こうすればできそうだ」といった子供の強い思いを引き出し、解決の見通し(ゴール・プロセス)がもてるようにする。

□ともに学び合う良さを実感できる授業づくりのために　(協働的な学び)

○かかわることのよさを実感し、安心して過ごせる学級経営を行う。
○子供の思考をつなげる教師の問い返しを意識する。
「それってどういうこと？」「わからない」「ちょっと待って」と自然と言える学級を目指す。
「みんなでやったらわかった」「友達とやったら解決できてよかった」 と実感できる経験を積み重ね、価値づけていく。

□学びの手応えを実感するために

○ふり返りで自分の学びや知識のつながりを実感する。
○ふり返りから次の課題を見つけ、自分たちの次の学習につながっていく経験を積み重ねていく。

学級カリキュラムマにおけるネジメント表の作成
・年間を通して育てたい資質・能力のイメージをもつ。
・育てたい資質・能力を視点として、教科と教科、教科と特別活動や学校行事をつなぐ。

研究の方法	**① 試行錯誤を促す場面と協働的に学ぶ場面を組み入れたカリキュラムマネジメント表の作成** ・4月・5月にカリキュラムマネジメント表を全学年で話し合いながら作成する時間を確保する。 ・子供が育つ学習や活動にするために、「試行錯誤を生み出すための工夫」「学びをつなぐための工夫」の2つの視点に沿って活動内容や支援の在り方などについて意識したカリキュラムマネジメント表を作成する。カリキュラムマネジメント表の作成の際に、年間で重点とする単元を決め、明記する。 **②教職員間での授業についての研修**　～子供たちが「試行錯誤」できる授業づくりをめざして～ ・学校全体での授業研究会（七中校区合同研究会） 【事前研究会①】学級カリキュラムマネジメント表と学習指導要領を持ち寄り、めざす子供の姿、つけたい資質・能力、学びや遊びとのつながりについて話し合い、授業・単元の構想をもつ。 【事前研究会②】予想される子供の思考と指導事項、手立てについて考え、指導案を中心に検討する。 【事後研究会】　子供の姿で語り合い、成果と課題を共有する。 記録をとり、課題やテーマに沿って全員で検証し、授業づくりに生かす。 ※指導案は、「試行錯誤を生み出す学習課題」「試行錯誤できる場の設定・工夫」の2つの視点、もしくはどちらか1つに沿って書く。 **③子供の姿を共有する場を設定する。** ・複式学級で学ぶ子供たちの姿や、複式を生かして子供たちが協働的に学ぶ姿を職員で共有する。重点単元の実践の際に、教師が互いに授業を見合う機会を設定し、視点に沿った手立てを中心に検証する。 ・月に1回程度、担任同士の語り合いの場を設定し、日常的な実践、授業改善についての悩みや、手立てなどについての共有を図る。
研究の計画	**・研究全体会**…　4/30（カリキュラムマネジメント表作成）・7/29・12/20・2 月（未定） **・子供の姿を語る会**…（5月・6月・8月・10月・11月・12月） **・七中学区4校合同授業研究会**…6/26 **・実践記録集の発行**…　3 月

学校名	山形市立出羽小学校 山形市大字漆山 3169 番地 TEL６８４－７３２１ FAX６８４－６４５１	校　長	須藤　征治
		研究主任	大沼　沙貴

研究主題	考え続ける子どもを育てる（２年次） ～きき合う関係でつながる学びづくりを通して～
前年度までの研究の概要と趣旨	本校の教育活動について 　出羽小学校では、学校教育目標「自分・仲間・夢　かがやく出羽の子どもを育てる 」を具現化するために、「はみ出せ心」「ひらめけ頭」「とび出せ体」を成長の合い言葉として、全ての教育活動において、子どもと教師で目標を共有し取り組んでいる。そして、子ども一人ひとりが具体的に目標を設定し、取り組みを考え、ふり返りながら、なりたい自分を意識して生活することで、一人ひとりが、自分の居場所をつくり、自分らしく輝ける学校をつくっている。 　昨年度は、「自分の言葉で話す子どもを育てる」ことから、授業作りの中心に掲げてきた「わかるわからないを越えて、一人一人が課題を自分事としてとらえ、解決に向かって粘り強く考える授業」がより明確になるように、「考え続ける子どもを育てる」ことに更新してきた。これにより、誰一人取り残すことなく考え続けることができるようにするための「ジャンプの課題(考え続けることができる課題)」や「きき合う関係づくり」、「教師の支援」など、目指す子どもを育てるために、私たちが考えなければいけないことが明確になってきた。 　また、「授業づくり」から「学びづくり」に更新したことで、授業にとどまらず、全ての教育活動で、「子どもが試行錯誤している過程を学んでいるととらえる見方」や、「学級集団に留まらず、どんな集団活動であってもきき合う関係でつながることができるように支援を考える」という理念が共有され、教師の出と待ちを含めた支援がどうあるとよいか、考える契機になった。
研究主題	ひとりぼっちをつくらない、子どもが安心して居られる学級をづくりを土台に、「自分で考え続ける」こと「仲間のどんな話もきく」こと「自分の言葉で話す」ことの３つを大切に、くらしと授業をつないでいく。教室に「きき合う関係」を育み、子どもがくらしの中で身に付けてきたインフォーマルな知識や技能を活用して課題解決し、整理されたフォーマルな知識や技能を獲得していくことができるような授業をデザインすれば、子どもたちは安心して学び、授業で身に付けた力を日常生活でも発揮できるようになると考えた。

設定の理由と研究の目標

〇考え続ける子どもとは・・・

最適解を求めて、友だちやテキストと向き合い、自分の考えをつくる子ども

※もちろん、考え＝言葉なので、自分の言葉（＝考え）で話す力も育つことになる。

〇きき合う関係とは・・・

子ども同士がつながり、いつでも話せる、ちょっと見ることができるという安心感を持てる関係

「きき合う(協同)」には、次の意味がある。

聴く　相手の話にじっくりと耳を傾ける(ケアの共同体)

訊く　わからないことを腑に落ちるまで、相手に尋ねる(探究の共同体)

利く　気が利く、鼻が利く等の機能としての利く(実践の共同体)

〇きき合う関係でつながる学びとは・・・

困難な課題と出会っても、「きいてみよう」、「一緒に考えよう」と、学び方を自己決定し考え続ける過程を楽しむことができるような学び

研究の重点と取り組み

（１）協同的な学びの手法で授業改善し、きき合う関係を育む。

きき合う関係でつながる学び

子どもがきき合って考え続ける授業　　子どものくらしの文脈に沿った授業

①子ども一人一人が本気で考え続けることができる課題の設定

②子どもが、言葉＝考えをつくる時間を保障する。全力を出し切る前に切らない。

③子どもが考え続けることができる環境デザインや形態　コの字・ペア・グループ

④子ども理解に基づく、過不足のない支援

（２）子どもの思考とくらしの文脈に沿った単元構成を考える。

子どもがくらしの中で身に付けている既有知識や経験とつなげて課題解決に取り組むことができるようにコーディネートする。そして、知識や経験の概念化をはかる。

まずは私たちの意識をチェンジ

子どもは、教師の教授で学ぶ存在 ⟹ 子どもは自分から学ぶ存在

「させる」意識ではなく、「子どもが自分からできるようにする。」そのために、何ができるかと考え授業づくりをする。日常から、子どもの思考をていねいに見て取り、子どもの言葉や行為の意味を捉える技量を高める。

（３）「きき合う関係でつながる学び」を日常化する。

①空間デザイン

・全クラスで、４月のスタートから机の配置を子ども同士が「机をくっつける」配置（コの字や劇場型、ペア、グループなど）など、きき合う関係づくりにつながる環境デザインを考えていく。

・その授業に効果的な形態に、フレキシブルに変える。

②子どもが自分で考え(=言葉)をつくることができるようにするために、「誰のどんな話でもわかるまで聞く。質問に答えながら詳しく話す」ことを実践する。

（４）　授業改善

「子どもはそもそも自分から学ぶ存在である」ので、教師の仕事は「子どもが自ら学ぶことができるように、(出羽小の研究でいえば、自ら考え続けることができるように、)子どもと共に学ぶスタンスで授業をつくること」、「広い視野で子どものくらしと授業をつなぐこと」ととらえていく。

教師が「正解」を持っていて、その「正解」に沿った子どもの発言をつないで、「正解」への道を作る授業等に見られる「授ける」意識を捨てていきたい。

①子どもの思考とくらしの文脈に沿った単元構成とジャンプの課題の追求

★単元構成について

子どもが暮らしの中で身に付けている知識や経験とつなげて、課題解決に取り組むことができるようにコーディネートし知識や経験の概念化を図る。

★授業を共有の課題とジャンプの課題で構成し、すべての子どもが学びのステージから取り残されないようにする。

②教師の支援

★「つなぎ、戻し、問い返し」で支援し、子どもが考え続けることができるようにする。

③子どもをよく見て、思考を読む。

★子どもの表情、動き、話など、全包囲からよく見て、どんな意味があるのかを語り合い、子どもの思考をとらえる力を付ける。

（５）「学力」を理解し、子ども観、授業観のパラダイムシフトを図る。

カリキュラムマネジメント時に、学年で学習指導要領総則編や関連研究図書の資料を使って話し合い教師一人ひとりが子どもの見方や授業の考え方を更新していく。また、日々の授業の進め方などは推進委員、学年主任がリーダーシップを取り、ＯＪＴ機能を有効に使って学び合う。

研究の方法

（１）授業研究会

担任は教科を選び、研究授業を行って教室を開く。

授業を参観する際は、授業者の意図を汲み、教えない、話しかけない。

授業後は、事後研便りを発行し、成果と課題を共有する。

※年度末に各自で資料をまとめ、研究集録とする。

①「みんなで授業を語る会」(大研)

・山形大学の森田智幸先生や講師を招聘して全職員で研修する。

・低学年部、中学年部、高学年部、特別支援部で１授業ずつ提案する。(計４授業)

・事前研は研究推進委員と該当学年部のメンバーで行う。

・森田智幸先生の来校日は、原則２時間目を研究授業、３．４時間目を通覧とし、午後に事後研究会を設定する。

・事後研は、ワークショップ形式や話し合い形式など適宜工夫する。

②「授業を語る会」(小研)・・・原則一人１回

・学年部で事前研と事後研を行う。

全教員に知らせ、研究推進委員だけでなく、誰でも参加できるようにする。

・推進委員と学年主任は、若い先生方が授業、事後研に参加できるように配慮する。

③事後研究会

授業研でしか学び合えないことで、汎用性のある子どもの見方について、重点的に話し合う。

複数人の参観者で見るグループを特定し、同じ子どもについて見て取ったことを検討する。

本校の研究の根底には、「ひとりぼっちをつくらない」ことがあります。担任は、多様化する子どもの言動からその子のものの見方や考え方をこれまで以上に理解する力を高め、その子どもに合った支援を考え、全ての子どもの資質・能力を伸ばさなくてはなりません。それが「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実であると考えます。また、同時に担任力がアップするようにしなければならないとも思います。このような意図から事前研、事後研を学びを共有する重要な機会と位置づけます。

（２）研究全体会

年度初め、１学期末、年度末に研究全体会をもち、研究への理解を深めたり、成果と課題を共有し合ったりする。

（３）ＯＪＴで研究の日常化を図る。

カリキュラムマネジメントの時間を利用して、授業についても語り合い担任力を高める。

日常の授業が子どもの力を育むものになっているか、「次の単元の構成は？」、「明日の発問は？」など具体的に話して、普段から教室を開き授業を見合う。

研究の計画

回	日程	内容	回	日程	内容
1	4月11日(木)	推進委員会	17	10月15日(火)	小研⑩
2	4月17日(水)	全体会	18	10月30日(水)	小研⑪
3	4月30日(火)	大研　森田先生	19	11月5日(火)	小研⑫
4	5月22日(水)	小研①	20	11月11日(月)	小研⑬
5	6月3日(月)	小研②	21	11月18日(月)	小研⑭
6	6月27日(水)	七中校区連携 合同授業研究会	22	11月25日(月)	小研⑮
7	7月1日(月)	小研③	23	11月27日(水)	大研（外部講師）
8	7月3日(水)	小研④	24	12月2日(月)	小研⑯
9	7月18日(木)	小研⑤	25	12月16日(月)	小研⑰
10	7月22日(月)	推進委員会	26	1月14日(火)	小研⑱
11	7月25日（木）	全体会	27	1月22日(水)	小研⑲
12	9月2日(月)	小研⑥	28	2月5日（水）	大研　森田先生
13	9月4日(水)	小研⑦	29	2月　　日(　)	学年会(カリマネチェック時)
14	9月19日(水)	大研　森田先生	30	2月　　日(　)	推進委員会
15	9月30(月)	小研⑧	31	2月７日(水)	全体会
16	10月2日(水)	小研⑨			

＜様式＞

学校名	山形市立楯山小学校 山形市大字青柳字一本木６４番地 TEL６８６－２００６ FAX６８６－４１８３	校　長	佐藤　勝子
		研究主任	阿曽　律子

研究主題

気づき・考え・学び合う子どもの育成（３年次）
～言葉でつながり、考えを深める授業づくり～

研究主題設定の理由

本校では、**「いのち　夢　なかまをつなぐ　子どもの育成」**を学校教育目標に掲げ次のような子どもの姿を目指し、教育活動を行っている。

いのち	たくましく元気な子ども	（体）
夢	学びに向かう子ども	（知）
なかま	やさしく思いやりのある子ども	（徳）

物事を多角的多面的にとらえ、気づき、考え，社会や他者と関わりながら自己実現しようとする子どもの姿を目指し、学校教育目標を具現化していきたいと考え、一昨年度から「気づき、考え、学び合う子どもの育成」を主題に研究を積み上げてきた。

１年次は「気づき・気づく力」に焦点を当て、主体的な学びに繋がる「気づき」を生み出すための手立てや、児童の実態から教材や単元を仕組むことで自分事として課題をとらえることができることや、気づきの言語化の大切さについて確認した。２年次の昨年度は「学び」に焦点を当て、児童がじっくり考えたり、主体的に思考したりする手立てについて学び合い、児童の「気づき」と「思考」、「言語」の関連性を意識した授業づくりを行い、見方・考え方を広げることができた。一方で、本校児童の「自分の考えや気持ちを伝え合う力が弱い」「適切な言語を用いて説明することが苦手」「自分の意見を言うことに自信がもてない」などの課題も明らかになった。

そこで今年度は、「学び合い」に焦点を当て、「言葉でつながり、考えを深める」を授業づくりの視点にして、「学び合い、考えを深める姿」をイメージするとともに、その姿に迫るための教師の支援のあり方を追求し、授業研究を進めることにした。

研究の内容

＜目指す子どもの姿＞

○進んで課題を見つけ、粘り強く取り組む子ども
◎互いの思いや考えを伝え合い、考えを深め合える子ども
○自らの学びを実感し、楽しみながら学ぶ子ども
○学びを生活に活かす子ども

これらの姿の実現を目指して、以下の内容で研究を進める。

（１）研究で目指す子どもの姿や「学び合い､考えを深める姿」にイメージを共有し、年間を通

して発達段階に応じた、系統的な姿をまとめていく。

（２）学び合いのある授業に迫るため、授業づくりの視点を整理し、教師の指導や実践の手立てを実践につなげる。

授業づくりの視点

＜視点１＞学習課題の工夫

①主体的に学習に取り組むための課題設定

・子ども達の意欲を高める課題を設定する。

・既習を想起し、見通しをもつことができる課題設定をする。

・子ども達の気付きや多様な問いを生かした課題づくりをする。

②めざす姿を明確にした単元計画と授業づくり

・課題とまとめの整合を図る。

・ゴールを明確にして、単元を貫く課題と単位時間ごとの課題を設定する。

＜視点２＞学習場面の工夫

①課題解決のための学び合い

・必要感のある交流場面を設定する。

・交流のさせ方、視点の与え方、意見のつなぎ方等の手立てを工夫する。

②体験活動・操作活動等、多様な学習活動の設定

③教師のコーディネート

・子どもの考えをつなぎ、理解を深めるような支援を意識する。

・発問をし吟味する。

・教師の「待ち」と「出」を意識して学習を進める。

④言語活動の充実

・それぞれの教科での言語活動のあり方を探る。

・絵や図と関連付けて言葉にする表現力の向上を図る。

⑤学び合いの場での効果的な ICT の活用

＜視点３＞まとめと振り返りの工夫

①自分の力による、課題に即したまとめの活動

・構造的な板書を意識する。

・板書から大事な言葉を見つけたり、キーワードをつないで書いたりできるようにする。

・評価に直結するまとめができる。

②自分の成長や変容を自覚し、次の学びにつながる振り返り

・まとめと振り返りを明確に区別する。

・「この学習で、以前よりもこんなことができるようになった。」
「今度はこんなことも調べてみたい。」等、視点を与え、自己変容に気づかせる。

（３）授業実践や事後研究会において、言語活動を通して学び合い考えを深める姿と、そのための手立てが効果的であったかどうかについて協議し、授業の中で子どもを見取る力をつけていく。

（４）日常の授業や委員会など教育活動全体を通したカリキュラムマネジメントを推進し、話し合う力を高めるための教師の指導と支援のあり方を追求し、成果や課題について共有化して、改善を図る。

研究の方法	（１）授業研究 ①全員が研究授業を行う。教師の得意分野を生かし、児童の実態を考慮した上で、「気づき、考え、学び合う子ども」を育てていける教科を選ぶ。 ②事前研究会は授業日の２週間前を目安に学年部ごと行う。 ③事後研究会は全体で行う。 ・司会・記録・授業の写真は、学年部で分担する。 ・事後研を行う場所は授業を行った教室とし、可能な限り板書も残しておく。 ・原則としてワークショップ形式で行う。 （２）研究全体会 ・目指す子どもの姿に迫るための指導の手立てについて、提案、検証、協議などを行い、学校研究への共通理解を図る。 （３）授業研だよりの発行 ・授業研究会後、２週間をめどに授業者が作成する。 ・事後研究会の話し合いを受け、教師の手立てと子どもの学びの姿についてまとめる。成果と課題を明確にし、次回の授業研に生かせるようにする。 ・他者の視点からの振り返りも「授業研から学んだこと」として入れる。
研究の計画	

４月　３日	水	研究推進委員会		
４月　４日	木	校内研究日①	今年度の研究の方向性について	
４月３０日	火	校内研究日②	ワークショップ カリキュラムについて	
５月２９日	水	校内研究日③	指導案について	
６月１１日	火	校内研究日④	４年　国語	
７月１８日	木	校内研究日⑤	２年　算数	３年　算数
１０月２３日	水	校内研究日⑥	いずみ　自立	５年　国語
１１月　７日	木	校内研究日⑦	６年　総合	
１２月　４日	水	校内研究日⑧	１年　算数	
１月２９日	水	校内研究日⑨	研究の振り返り 研究のまとめと来年度の方向性について	
２月１０日	月	校内研究日⑩	研究紀要作成	

＜様式＞

学校名	山形市立高瀬小学校 山形市大字下東山１２６４番地 TEL６８６－２２６４　FAX６８６－４１８４	校　長	金子孝宏
		研究主任	寒河江仁
研究主題	健やかでたくましい　高瀬っ子の育成 ～自他の高まりを表現することを通して、 学びの質を向上させる子供を目指して～ （1年次）		

研究主題設定の理由

学校教育目標

本校では、「やさしく かしこく たくましく ～チャレンジ～」を教育目標に掲げ、

・「自他を認め合う子供」＜やさしく＞
・「学びを活かせる子供」＜かしこく＞
・「自分をより良くする子供」＜たくましく＞　を目指し、児童の育成にあたっている

課題と研究について

本校は、明るく活動的な子供が多く、学年を越えた交流も大変盛んである。そのため、休み時間にはグラウンドや体育館に出て体を動かして遊んだり、異学年の児童でチームを組んでサッカーやドッジボール等の運動に親しんだりしている姿がたびたび見られる。体育学習への取り組みも総じて意欲的である。その一方で、少人数単学級での同じ人間関係内の生活が続き、他者に伝える力や気持ちの切り替え、最後まで粘り強くやり遂げる力などに課題がある。

これらの児童の実態を踏まえて、体育学習を主題に迫る手段の主軸に据え、できた喜びや粘り強く取り組んでやり遂げた喜びを味わわせること、適切な自己表現を通してより良く仲間と関わる楽しさや喜びを味わわせることを願い、主題に迫る手段として体育学習を主軸に研究を進めてきた。

今年度は体育学習の中で培われてきた力を他教科へどのようにつなげていくかなどを検討しつつ、引き続き体育学習を中心に据え、加えて他教科（算数）の学習の質の向上を図っていく。

（１）授業づくりについて

「主体性」と「関わり・表現」を中心に子供の姿を見取り、子供の姿を通して授業づくりを進める。授業づくりの際は、領域の特性に触れ、体育の楽しさを味わわせることはもちろんのこと、目指す子供の姿を念頭に置き、子供の実態をとらえ、主体的に学ぶための様々な支援や、必要感のある子供同士の関わらせ方について研究を深めていく。さらに、対話的で深い学びになるような単元構成や場の設定、ルール等の工夫も研究を進めていく。体育科での関わりとは、他教科とは異なり、言語表現の他に身体表現を用いての関わりも考えられる。技能の向上や運動遊びの広がり・深まりが達成される関わりになるよう、タイミング・教師の手立て等を、校内研究を通して探っていく。また、子供の主体的な学びにつながるような評価・振り返りの活用についても探っていく。さらに、子供の姿の見取りを大切にし、「学びの履歴」の中で子供の姿からより効果的な手立てを探り、分析していく。

（２）健康学習（学級活動）について

今までの実践を生かし、今年度も継続して、全校で取り組んでいく。「生活リズムカード」の結果や日常生活のすごし方について、学年や自分のめあてをもとに、自分の生活を振り返り、自分ごととして考えさせる手立てをとりながら、よりよい生活を築くことができる授業を行っていく。

（３）「生活リズムの改善」と「運動の日常化」について

今年度も、「生活リズムの改善」と「運動の日常化」を、授業を支える土台として、これまでの実践を基に取り組んでいく。「生活リズムの改善」については、今年度も「生活リズムカード」を使った生活リズム調査を実施する。また、「チャレンジアウトメディア」の取り組みで、メディアとの向き合い方を家庭とともに考えていく。

「運動の日常化」については、楽しく関わり合う活動や様々な運動を体験させる取り組みを継続して行っていく。業間のスポーツタイム、全校マラソンタイム、なわとび週間などの体育的活動を、子供が主体的に取り組めるように支援しながら実践を積み重ねていく。

	これまでの成果と課題を踏まえ、目指す子供の姿を次のように設定する。 ○自分のめあてをもち、主体的に学び続ける子供 ○自他の高まりを表現しながら、共に学び合う子供 目指す子供の姿にせまるために、体育学習「ゲーム・ボール運動」「器械運動・器械器具をつかった運動遊び」の授業実践を中心に取り組み、算数においても領域を絞り、系統性についても検討できる授業づくりを目指す。
研究の内容	（1）授業実践 ＜授業づくりの柱＞ 目指す子供の姿を念頭におきながら、子供の実態をとらえ、仲間と関わり、主体的な学びのある授業づくりを行う。その上で教科の本質をとらえ、内容を吟味して授業づくりを行う。 ○子供の意識に沿った課題づくり・単元構成の工夫 ○夢中になって運動できる場の設定やルールの工夫 ○キーワード（技能・運動遊びのポイント）を使った伝え合いの場面の設定 → 自分の良さや成長の意識化　仲間の良さや成長を伝える・アドバイスする この体育で培われてきたものをいかに他教科（算数）へつなげていくかを考え、授業づくりをしていく。 （2）目指す子供の姿の具体化 目指す子供の姿について、発達段階に応じて「学習の中で期待する子供の具体的な姿」を設定している。校内研究会で、その妥当性も含めて検討し、そこから全教職員で目指す子供の姿についての共通理解を図る。ゴールの姿をイメージして、それが達成されるような課題をつくり、手立てをとって授業づくりを進める。また、「学習の中で期待する子供の具体的な姿」については、授業研究会で確認し、加除修正しながら完成させていく。 （3）学びの履歴の活用 授業の中で、子供の意識に沿った学習課題・単元構成、場の設定、効果的な関わりの持たせ方・表現になっていたかを振り返り、考察したことを学びの履歴に記録し、事後研究会で話し合いでも活用し、研究を深めていく。
研究の方法	第１回授業研‥‥　６月１２日　　５年（体育） 以降は 2 学期実施 ○ 全学年で授業研究を行い、子供の姿を通し研修を積み重ねていく。 ○ 単元を通して目指す「主体的・対話的で深い学び」のある姿について具現化し、授業づくりの視点としていく。 ○ 事前研究会の充実を図る。その際、授業の視点を明らかにして検討し合う。また、事前研のメンバー以外も授業研前後の授業も見合い、子供の変容を見取る等、全員で授業をつくっていく。 ○ 授業では、子供のつぶやきや表情、行動や変容、関わりの中から出た言葉など、子供の姿から学ぶようにする。 ○ 事後研究会では、授業の視点に沿って話し合っていく。また、成果と課題を明らかにして、授業者も参加者も次の授業づくりに生かせるものになるよう検討していく。

<table>
<tr><td rowspan="2">学校名</td><td rowspan="2">山形市立山寺小中学校
山形市大字山寺１６５０
０２３－６９５－２０４４</td><td>校　長</td><td>高橋　郁子</td></tr>
<tr><td>研究主任</td><td>神保　幸恵（小）
後藤　　岬　（中）</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">社会で通用する自立した個の力を備えた児童生徒の育成
～自己調整力を育むカリキュラムマネジメント～（２年次）</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">山寺小学校は全学年が完全複式学級、特別支援学級１学級の４学級で学習している。小学校入学から中学校卒業までの９年間は少人数での学習を行うことになる。複式学級や少人数での授業には、異学年の交流が生まれたり教師がひとりひとりに丁寧に関われたりするというよさがある一方で、多様な考えによる思考の広がりや深まりはなかなか見られないのが現状である。また、児童生徒においては人間関係の固定化による弊害も否めない。
研究主題は、本校の現状を踏まえ、児童生徒が９年後に山寺からもっと広い社会に巣立っていくとき、生き生きと自信を持って自分の考えを表現し、多様な人と関わりながら生きていくことができる子どもたちであってほしいと考え設定した。「社会に通用する自立した個の力」とは、誰とでも協力できる力、いじめをしないたくましさ、少し難しいことにも挑戦できる力であると考えている。本研究を通して自らの将来の生き方を考えさせながら、主体的に社会の形成に参画する意欲と態度を備えた児童生徒、そして、自分自身を振り返って新たな課題を見つけ、その解決に向けて見通しを立てて行動できる児童生徒を育てたい。
昨年度は、観光地山寺の豊富な学習材を生かすことができるもの、そして、実際の社会生活につながり、日々の授業とその学びを生かしながら小中が共通して取り組むことができるものは総合的な学習であると考え、全学年が総合的な学習を軸にカリキュラムマネジメント表を作成した。総合的な学習を通して学校内外の様々な人と実際に関わることで、人間関係の固定化から脱却し、広い視野と深い思考力を持った児童生徒を育もうと研究を進めた。研究の結果、めざす児童生徒の姿や中学校３年間における総合的な学習の展開が明確になった。
今年度は、昨年度作成したカリキュラムマネジメント表を実際に活用しながら、小学校における総合的な学習を中心に９年間の系統性をさらに明確にしたい。</td></tr>
<tr><td>研究の目標</td><td colspan="3">学校教育目標『郷土「山寺」を愛し、社会に役立つ人間の育成』
重点目標　「考える子ども」「助け合う子ども」「たくましい子ども」

日々の授業とその学びを活用した総合的な学習（校内研究）を通して目標の達成に迫る。</td></tr>
</table>

研究の内容	①　子どもの実態を語り、めざす子ども像を共通理解していく。 ②　「自己調整力」「個別最適な学び」をどのように実現していくことができるかを学習の個性化という視点で日々の授業で検証し、共有していく。 ③　総合的な学習を中心とした社会とのつながりを通して、９年間でどのように自己調整力（失敗から学ぶ力・自治力・振り返る力）を育てていくのかを系統立てて考え、実践しながら、さらなる学習意欲を持てるような活動の在り方を探る。
研究の方法	①めざす子どもの姿を明確にし、自己調整力を育むための９年間を見通したカリキュラムマネジメント表を作成し、実践しながら評価・改善を加え、より効果的な指導や支援を行っていく。 ②「自己調整力」「個別最適な学び」についての研修をし、本校ではどのように具現化していくか、日々の授業を通して検証していく。児童生徒の成長や課題は、育てたい非認知能力「多様な人と関わる力」「自分の感情をコントロールする力」「目標に向かって頑張る力」を教職員共通の“見取りのレンズ”とし、「いいとこみつけ」や「エピソード記録シート」に記録する。本年度は、基本的に授業研は行わない。ただし、単元計画を小中教員で検討したり、「いいとこみつけ」「エピソード記録シート」を活用したりして日常的に授業改善に取り組んでいくこととする。また、積極的に校外の研修に参加し、学んだことを職員会議等で報告していく。 ③小中全学年合同の総合的な学習「１日総合ＤＡＹ」を計画、実施し、実践的な総合学習を行う。「１日総合ＤＡＹ」では、これまでの総合的な学習の学びを発表したり、学びを活用して企画を行ったりする。さらには地域の方から協力していただき、学びを深められるような活動を行う。実践の中で得られた学び、見えた課題を子どもたちと共有し、日々の授業や将来の進路決定につなげていく。
研究の計画	①カリキュラムマネジメント表の活用、評価、改善 ①校内研修会 　中井義時氏を講師とした「カリキュラムマネジメント」に関わる研修 　総合的な学習に関わる研修（講師未定） ①②小中教員の連携強化（共同教材研究、子どもの姿の共有など） ②県内外研修報告 ③「１日総合ＤＡＹ」（１０月１１日）の計画、実施、評価

＜様式＞

学校名	山形市立東沢小学校 山形市防原町４-１５ TEL．６２９－２１１９　FAX６２９－２９０７	校　長	三木　弥生
		研究主任	宗片　典子
研究主題	主体的に考え、学び合う子どもの育成 ～他者とかかわりながら 自ら学ぶ授業をめざして～		
研究主題設定の理由	本校は、「誇りと夢をもち　未来をひらく　たくましい『雁戸の子』を育てる」ことを学校教育目標とし、重点目標として「『認め合い』・『学び合い』・『支え合い』の教育活動を通して、10年先の社会を見据えて必要な資質能力〈豊かで、たくましい心・他者とかかわりながら自ら学ぶ力〉を育てる」ことを掲げている。学習においては、課題に真面目に取り組む姿勢や態度を活かしながら、自ら進んで課題を見付けたり、自分の考えを分かりやすく表現したり、友達と協働しながら学んだり、学んだことを活用したりする力を児童に付けていきたいと考え、「主体的に考え、学び合う子どもの育成」を主題に研究を積み上げてきた。 昨年度は、副題を変えての１年次として、「進んで課題を見つけ、粘り強く取り組む子ども」「他者とかかわりながら、考えを深め合える子ども」「自らの学びを実感し楽しみながら学び、学びをくらしに活かす子ども」を目指し、「かかわる」ことを授業改善の視点にして研究を進めてきた。部会研や全体研の話し合いを通して、各々の教師が様々な教科について学び合い、授業力を高めるように努めてきた結果、交流場面のあり方や様々な人や物事にかかわり学ぶ姿について見方・考え方を広げ、子ども自身が自分の考えを伝えたいと思うような学習課題や学習活動を設定することや新たな教材開発に取り組む等の成果がみられた一方、子ども達の気付きや考えから学びを引き出せるようにするための教師のコーディネート力をさらに高める必要があることが明らかになった。また、子ども達が自分の考えや思いを相手に伝えたいという気持ちや、相手や物事に関わって自ら学び高まる力がまだ不十分であることも改めて実感している。 そこで、今年度も引き続き「主体的に考え、学び合う子どもの育成」を研究主題とし、「かかわりながら自ら学ぶ」を授業改善の視点にして、教師の授業力を高めつつ、子ども達の「相手の考えを認め、自分の思いを表現する双方向の力」を高めていくことを目指し、授業研究を進めることにした。		
研究の目標	子ども達が自分の考えや思いを伝え合いながら自己肯定感を育み学ぶ姿をイメージし、 何とどのように「かかわる」ことで学びが連続し、探究と理解が進み、子ども一人一人の深い学びの姿に迫ることができるか、有効な手立てや支援のあり方を日々の授業で追究すると共に、児童及び教師の「振り返り」をもとに、支援が適切であったか検証し、どの子にとっても身体的・精神的・社会的に良い状態にあること即ちウェルビーイングにつながる「主体的に考え、学び合う子どもの育成」を目指す。		

研究の内容	◎目指す子どもの姿 ○進んで課題を見つけ、粘り強く取り組む子ども ○他者とかかわりながら、考えを深め合える子ども ○自らの学びを実感し楽しみながら学び、学びをくらしに活かす子ども これらの姿に迫るためのキーワードを「かかわり学ぶ授業」として、気付きや思いを互いに伝え合うことで、一人一人の考えを広めたり深めたりして、学ぶ楽しさを実感する主体的な学習者を育成していくようにする。「かかわり学ぶ授業」の実現を目指して、以下の内容で研究を進める。 （1）子ども達の自己肯定感を高め、深い学びのある「かかわり学ぶ授業」に迫るため、教師の支援のあり方を追究する。 ① 研究で目指す子どもの姿や、かかわり学ぶための「認め合う力」のイメージを共有し、発達段階に応じた系統的な姿をまとめていく。 ② 教師の指導と支援の手立ての視点を整理して、実践を積み重ねる。 ＜視点１＞心が動く学習課題の工夫【例】子どもが、自ら学習を始めたくなる課題の設定 ＜視点２＞表現し合う楽しさを感じられる学習場面の工夫 【例】 ・揺さぶりをかけた発問の工夫 ・多様なツール（電子黒板・タブレット・学び方達人カード等）の活用 ＜視点３＞学ぶよさに気付くまとめと振り返りの工夫 「かかわり高まる姿」を「学ぶ楽しさ」と捉える。 ③子ども達の意見をコーディネートするための教師の支援のあり方を探る。 ・どのような手立てによって、子どもたちの学びがつながり、学びが深まったか。 ・自分の意見をもたせる手立て、子どもの意見の予想と分類や整理、つぶやきを拾い上げる目、教師のでどころ・指名計画、様々な展開への対応等はどうであったか。 ④子ども達の、自分の思いや考えを伝える力を高めるため教師の支援・手立てを明らかにして積み上げていく。 ①～④について、単元や１単位時間の授業を積み重ね、その記録を蓄積し、授業に活用したり、授業を改善したりしていく。 （2）授業実践や事後研究会、各種研修会において、言語活動を通して深く学ぶ姿とそのための手立てが見られたかどうかについて協議し、授業の中で子どもを見取る力を付けていく。 ・事前研究の充実を図り、共通の視点をもって授業研究会に臨めるようにする。 ・外部講師を招聘し、授業づくりや授業実践についての学びを深め、今日的な教育的課題の解決に向けた取り組みについての研修を通して、自己の見識を広めたり深めたりする。 （3）日常の日常化を図り、普段の授業を公開したり通覧したりしていつでも見て学べるようにする。そして日常の授業実践を積み重ね、子どもたちの成長や変容、教師の指導と支援のあり方、研究の成果や課題について共有化し、改善を図る。
研究の方法	（1）授業研究 ・全担任が１研究授業を行う。 ・学級の児童の実態・付けたい力を考慮して、授業教科･単元を決定する。 ・事前研は部会ごととし、構想段階から授業検討を行う。 ・大研には指導主事を要請し、指導を仰ぎ、日常の実践に活かす。 （2）研究全体会 ・日常の授業について、目指す子どもの姿に迫るための指導の手立てについて、提案、検証、協議等を行い、学校研究への共通理解を図る。（「研究の計画」参照） （3）先進校視察 ・県内外の先進校を視察する。事後に報告研修会を行い、授業改善に活かす。 （4）研究だよりの発行と研究の足跡の記録ファイル「かがやく瞳」の活用 ・授業研究会後２週間をめどに各自作成したものを自分の「輝く瞳」ファイルに保管する。

授業後の話し合いを受け、教師の手立てと子どもの学びの姿についてまとめ、成果と課題を明確にする。これを研究紀要とする。

・その後の日常の授業について、成果を共有し、課題に対してどのような工夫がなされ、子どもの学びの姿がどのように変化したかを追加してまとめる。

研究の計画

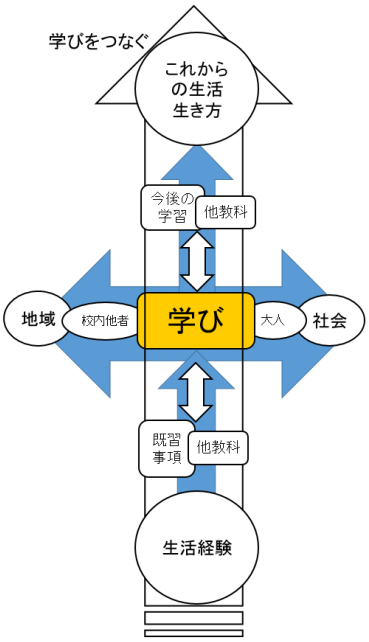
月	研究会の内容	実務
4	全体会 ・今年度の構想・重点・研究の進め方	児童の実態把握・児童理解に努め、目指す子どもの姿を探る。 教科・単元を決定する。 各教科等で、様々な授業改善を実践し、自己の指導力を向上させ、児童の思考ツールを増やす。 日常の活動・授業の中で「かかわる力」を意識した指導を積み上げていく。
5	・授業研究会の日程・指導案形式提案	
6	／14　事前研① 21　事前研②	
7	／10　**授業研究会①　大研** ・こまくさ１組Ａ・Ｂ・２組 （自立活動） ／19　授業研究会②・６年（理科） 職員会議 ・研究の反省・２学期以降の確認	授業での実践 ・指導案作成・板書計画 ・レディネス調整・教室掲示 「輝く瞳」ファイルに成果と課題を随時まとめる。
8	／ 5　事前研③ 23　研修会・内容は後日提案	
9	／ 6　事前研予備日 **／13　授業研究会③・５年（算数）大研**	
10	（がんどフェスタ月間）	
11	／ 1　事前研④ ／ 6　事前研⑤ ／15　授業研究会④・２年（国語） ／21　事前研⑥⑦ **／29　授業研究会⑤・１年（算数）大研**	NRT テスト分析結果を踏まえた日常での基礎学力の定着
12	／ 6　授業研究会⑥・３年（体育） ／13　授業研究会⑦・高学年（社会）	
1	／10　事前研⑧ ／24　授業研究会⑧・４年（算数） ・研究の成果と課題（各自まとめ）	
2	／ 5　全体会 ・研究の成果と課題（全体） ・来年度の研究の方向性について	・個人のまとめ
3	・研究実践の引き継ぎ	・ファイルにまとめと整理

＜様式＞

学校名	山形市立滝山小学校 山形市小立四丁目13－86 Tel 631-2248　FAX 631-9034	校 長	大城 勝利
		研究主任	多田 愛
研究主題	自ら 学びをつないでいく子ども(1年次)		
研究主題設定の理由	【社会的背景から】 これからの学校には、児童が多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることが求められている。また、その時代に求められる資質・能力を身に付けるために、生涯にわたって学び続ける力の基盤を確立することは学校教育における喫緊の課題である。 【これまでの過程から】 令和5年度は、研究主題『豊かに表現し合い 学びをつないでいく子ども(5年次)～カリキュラム・マネジメントを通した授業改善を目指して～』のもと、単元計画はもちろん、カリマネの視点からも「学びをつなぐ」ことを意識して授業改善を図っていくという方針のもと、研究を進めてきた。特に、研究教科についてはカリキュラムの中軸に据えた生活科・総合的な学習の時間・自立活動に絞り、児童の気付きや思いを汲み上げてカリキュラムや単元を構想していくことを大切にしてきた。実践の積み上げから、「ホンモノ」の人・もの・ことに触れる「体験からの学び」によって、意欲や探求心が持続していくこと、児童自身が課題を見つけ、試行錯誤しながら課題解決を目指していく「児童自らが創る学習」によって、主体的に学習に向かう姿が見られたことが成果として挙げられる。カリキュラム・マネジメントを通して、付けたい力を明確にし、様々な角度から資質・能力を育てていくことが、既習事項や経験と「学びをつなぐ」、教科横断的に「学びをつなぐ」、学校内にとどまらず地域や社会といった学校外へも「学びをつなぐ」、そしてこれからの将来や未来へと「学びをつなぐ」ために必要であると分かった。そこで、今年度はより「学びをつなぐ」という点に焦点を当て、児童一人一人がさらに自らの思いや願いを持って主体的に学びをつないでいけるよう、主題を設定した。		
研究の目標	今年度の学校経営テーマである『子どもが学びの主体となり、みんなが笑顔の学校をつくる』ためには、児童の実態を踏まえ、学年の児童に必要な資質・能力を明らかにして教育活動を進めていくことが不可欠である。特定の教科や単元だけでなく、教科横断的な視点のもと、生活科や総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・マネジメントを充実させていくことで、これまでよりも更に効果的に資質・能力を高めていくことができるのではないかと考える。そして、生活科・総合的な学習の時間では、子どもの関心や課題意識を起点とし、地域や故郷に目を向けることで改めてその良さを発見したり、協働的に探究することで学びを深めていったりする姿を目指していく。様々な人、もの、環境の中で学びをつないでいくことが、本校の学校教育目標である『ゆたかな心で自ら学ぶたくましい子どもの育成』につながると考える。		

研究の内容

【めざす深い学びの姿→関連付けるとは】
学びを中心にして「生活経験」「既習事項」「他教科」「今後の学習」「これからの生活・生き方」との相互関係(↔)が、学習が進むにつれて、占める割合を変化させながら、つながっている状態



自ら学びをつないでいくために、学びを子どもの生活と結び付けていくことが必要である。子ども達が自分の生活の中で学ぶ必要感を感じたり、「学びたい。」「できるようになりたい。」「うまくいくために何とかしたい。」と学びに対する意欲や思いを持ったりすることで、学びが子どもの生活に結びついていくと考える。これらを具現化していくために、今年度は、カリキュラムデザイン、単元構成、日々の授業において 以下のことを共有し、大切にしながら研究を進めていく。

1 カリキュラムデザインにおいて
・児童が学びをつないでいくために必要な資質・能力は何か を見極め、育成したい資質・能力を明確に持つ。
・生活科・総合的な学習の時間を中軸にして、その学年で育成を図る資質・能力を高めていけるようなカリキュラムデザインを行う。

2 単元構成において
・子どもの思いを大切にして単元を構成する。その際、教師側のねらいや意図は持ちつつ、学習過程の中での子どもの気付きや課題意識を吸い上げ、意欲や探求心が持続していけるよう人・もの・こと(ホンモノ)への出会いを工夫していく。
・「課題設定→情報収集→整理分析→まとめ・表現→ふりかえり・改善」の探究の過程を経由しながら、そのプロセスが何度も繰り返されるように単元を構成していく。

3 日々の授業において
・今の学習が、単元の中でどのように位置づけられているのかを押さえる。
・前後の学習とのつながりやその時間のねらいを意識して授業づくりを行う。

研究の方法

(1)カリキュラムマネジメントの中軸に生活科と総合的な学習の時間を置く。

(2)学年の共同研究とし、学年の児童に必要な資質・能力を明らかにして研究を進める。
総合的な学習の時間については、学年でテーマを決定し、児童の興味関心に沿うように学習集団を設定する。小単元の構成の仕方については、『分散型』『年間継続型』『並列型』『複合型』等の中から各学年で自由に設定する。

(3)研究授業は小研・中研・大研を設定する。大研は学年部から1名、中研は大研を出していない学年より1名、その他を小研とする。特別支援学級については、今年度大研としては公開せず、小研として自主公開の形をとっていく。

（4）事後研では、子どもの姿から学びを丁寧に見取っていく。実際の児童の行動や発言、表出したものから思考の流れを汲み取り、どこにその児童の学びがあったか、育成したい資質・能力についてはどうだったか等について協議していく。どの教員も自由に発言できるよう、グループでの協議を取り入れ、全体を通して見えてきた共通部分や考えていきたい視点については、全体協議としてさらに深く話し合えるようにする。

（5）年度初め、学期終わり、年度末に定期的に学年カリ・マネ会やカリ・マネ振り返りの時間を設定することで、継続的にカリ・マネの見直しを行い、修正や相談を行いながらカリ・マネが実際の教育活動に活用されるようにしていく。

研究の計画

4月3日（水）	研究全体会①
4月17日（水）	カリキュラム・マネジメント研修会
5月2日（木）	特別支援教育研修会 カリキュラム・マネジメント研修会
7月10日（水）	校内研（大研①） 6年
7月31日（水）	研究全体会② カリキュラム・マネジメント研修会
10月30日（水）	校内研（大研②） 1年
12月4日（水）	校内研（大研③） 3年
12月25日（水）	研究全体会③ カリキュラム・マネジメント研修会
2月19日（水）	研究全体会④
3月10日（月）	カリキュラム・マネジメント研修会

・中研は7月（2年）、11月（3年）、12月（5年）に行う。

＜様式＞

学校名	山形市立桜田小学校 山形市桜田東１丁目１－３０ Tel ６２４－５０８３　Fax ６３３－９７９４	校　長	須藤　克郎
		研究主任	小笠原　恵

研究主題

自己の学びを創り上げていく子供の育成（五年次）

～ 対話により思いや考えを表現し、学びを深める授業実践 ～

研究主題設定の理由

本校の学校教育目標は、**「未来をひらく、英知（えいち）と力のある子どもの育成」**である。「未来をひらく、英知と力」のある姿を下記のように考える。

> 少子高齢化やグローバル化等によって社会構造がめまぐるしく変化する時代の中で、多様な価値観が混在する社会を自分らしく生きるために、諸問題を他者と協働しながら、柔軟な発想で解決していくことができる姿。

学校教育目標を具現化していくために、学校生活の中で生じる課題を自分事として捉えて、他者と協働して解決していくことや、互いを認め合いながら生活する経験を重ねていくことができるようにしていくことが重要である。

これまでの研究を通して、次のようなことが見えてきた。

> ・友達の話を聞きたいという気持ちが強くなり、相手意識をもって話を聞くことができるようになったとともに、相手意識をもって話をしようとする態度が身に付いてきた。友達の意見を受け入れたり考えを比べながら話を聞いたりと、学びにつなげる様子が見られた。
> ・課題に対して意欲的に取り組むことはできる。活動から分かったことをもとに課題を設定したり、失敗したときにどのようにすれば上手くいくかを考えて学びを調整したりすることが課題である。
> ・それまでに経験したことや学んだことと、これから新しく学ぼうとしていることを関連づけて捉えようとする意識が弱い。

これらの実態を受けて、社会の今日的な課題に対応するための資質・能力である、生きて働く「知識・技能」、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」を授業を通して身に付けることができるように**「自己の学びを創り上げていく子供の育成」**を研究主題として設定した。研究主題に向かって実践を重ねることで、「主体的・対話的で深い学び」の具現化を目指す。

本校が考える「自己の学びを創り上げていく子供」は以下のような子供と考える。

> ●課題に対し、見通しをもって粘り強く取り組み、学びを振り返って次へつなげていく子供
> ●友達と対話することで、学びを広げたり、深めたりする子供
> ●知識を相互に関連付けて深く理解したり、必要に応じて知識・技能を発揮したりする子供

子供がこれまで学んだことを新しく学ぼうとしていることと結びつけて考えたり、様々な場面において必要に応じて引き出したりして、活用することができるように、学習場面や生活場面の中で教師が仕掛けていく。

研究の目標

「対話により思いや考えを表現して学びを深めることで、自己の学びを創り上げていく子供を育成する」学習指導のあり方を実践研究する。

研究の内容

○「対話により学びを深める」とは

これまでの研究で「対話的な学び」を３段階に整理している。なお、ここで扱う「対話」とは、「子供と子供」または「教師を介した子供と子供」の言葉によるコミュニケーションを指す。

① 考えの芽が生まれる対話　→　考えや思いをもてなかった子がもてるようになる。
② 学びが広がる対話　→　考えや思いを共有することで学びが広がる。
③ 学びが深まる対話　→　考えや思いが結びついたり違う場面とつながったりすることで学びが深まる。

今年度は、これまでの研究の課題を意識し、成果の見られた手立てを取り入れた学習活動を児童の実態に合わせて行っていく。そして、学びが深まる対話の実現に向けた実践を行う。「学びが深まる対話」の実現に向けた具体的な手立てとして下記のようなことが考えられる。

【授業づくり】

○考えをもつために
- 対話によって思考力・判断力・表現力を育む学習を行う前に、活用できる知識・技能を確実に獲得できるようにする単元構成の工夫（資料の読み取り方等も指導する）
- 多様な考えが生まれる課題、対話する必然性のある課題の提示
- 子供が対立したり、分化したりする発問の仕方の工夫
- 情報の可視化・操作化など思考を深めるツール等の活用
- ノートづくりやワークシート、ホワイトボード等の活用の工夫
- ICT の活用
  ⇒まずは自分の考えをもち、言語化するところから

○対話をするときは
- 対話する視点の明確化、焦点化、共有化
- 学習内容に応じたグループサイズ、グループ編成の工夫
- それまでの経験や学習がつながっていることを自覚するための教師による問い返し
- 対話することで学びが深まったことが自覚できるようにする振り返り（自己との対話）

【対話の方法】

○ペア、小グループ、学級全体、自由交流、似た考え同士、異なる考え同士による対話
① 情報の伝達、意見の交流、質問や感想の交流、発表に対する意見の交流
② 結論を導き出す・問題を解決する話し合い
③ 考えを広げる・考えを練り上げる話し合い
⇒課題解決のために友達と考えを交流し、自分の考えを修正したり深化させたりする

○インタビューによる対話
- 質問の仕方、答え方を学ぶ

【対話の例】
A：～だと思う。（結論）
B：どうして？どこからそう思うの？（理由）
A：～～だから。（根拠・叙述）

【合言葉】
- どうして？　・なぜなら…
- だって…　・だったら…
- でも…　・ここまで分かる？
- こちらの立場で考えると…
- ○○さんはこう伝えたかったのでは？

以上のような取り組みを行ったり、新たな手立てを開発したりし、「学びが深まる対話」を実現していく。

研究の方法	**(1)研究の運営に関すること** ①研究授業 〇研究教科 ・子供の実態や教師の授業に対する課題をもとに学年、または、学年部で教科を選択する。 ※今年度は、４－１の初任者研究授業と５－１の東北音楽教育研究大会の授業は小研とする。 〇研究授業の進め方 ・活動案は細案とし、昨年度までの研究で取り組んできた手立てを活用していく。 ・学年や学年部をもとに授業づくりを行い、授業を提案する。事後研究会では視点に沿った協議を行い、手立てが有効だったかを検証する。 ・授業後一ヶ月以内に「事後研究だより」を発行し、全職員に配付し、成果と課題を共有する。 〇学年部ごとに目指す子供の姿を設定する 〇活動案の形式（別紙参照） ・Ａ４両面２枚程度に収まるようにする。 〇事前研・事後研 ・授業記録や子供の様子は、視点に沿って各自でメモを取る。 ・小研：事前研は学年で、授業参観と事後研は学年部で行う。 大研：事前研は学年部で行う。参観と事後研は全体で行い、事後研はワークショップ形式とする。 事後研には指導主事を招聘し、指導・講評をいただく。 ・作成したデータは、令和６年度→校内研究のフォルダに保存する。 ②CCT(クラスカルチャータイム) ・毎週木曜日の１４時００分から１４時１５分までの１５分間を学級のＣＣＴの時間とする。 ・子供たちの実態に応じて、年間で計画的に活動を設定していく。 ・他の学年、他のクラスの活動を知るため、紹介する機会を設定する。 ③全体研修会 〇講師による研修会 ・講師を招聘して授業づくりや改善、学級経営等に関する理論や実践についての研修会を行う。 〇学び CAFÉ ・普段の授業、CCT、学級経営に関する疑問やこつなどを主題に、３０分程度で語り合う。 ④研究推進便り「TeamSakurada」の発行 ・学級経営や授業作りの取り組みを全体で共有するために、研究推進便りを発行する。また、研究授業の「事後研究便り」も全体に発行する。 ⑤研究のまとめ ・研究授業の事後研究便りをもとに作成する。具体的な子供の事実を抽出し、「学びを深める」ために手立てが有効だったかを分析したもの（証拠となるもの）にする。 **(2)学級経営に関すること** ・教師は、子供一人一人を大事にした学級経営を行い、児童理解を深める。 ・毎週木曜日のＣＣＴを軸に、子供が互いに認め合うことのできる学級づくりを進める。 ・教師は、学級や学年だけではなく多くの子供の様子を観察し、縦割り活動等の教育活動を通して、児童理解を深めていく。そして、教員間で情報交換を行い、学級経営に生かしていく。 ・他者を思いやる心や規範意識を育む道徳教育の推進を行う。 ・他者と関わる力や人間関係を結ぶ授業実践を行う。 ・児童理解に努め、子供の実態を見極め、来年度以降の校内研究のテーマを探る。

研究の計画

研究年次	主な研究内容
第１年次 （令和２年度）	【研究主題】 「自己の学びを創り上げていく子供」の育成 『必要感のある「関わり合う場の」設定』を研究の重点とし、実践を重ねた。
第２年次 （令和３年度）	【研究主題】 自己の学びを創り上げていく子供の育成 ～生き生きと対話できる子どもの姿を目指して～ 学習課題を追究するために、他者と対話させることを通して、友達の考えと自分の考えを比較したり、関連付けたりしながら話し合う力（生き生きと対話する力）を育成することに取り組んだ。
第３年次 （令和４年度）	【研究主題】 自己の学びを創り上げていく子供の育成 ～個別最適な研究で「対話」を探る～ 対話を用いた学びの性質を３つの段階に分け、「学びが深まる対話」の実現を目指した。 研究していく教科や目指す子供像をそれぞれの担任が決定し、研究仮説を立て、実践を重ねた（研究の個別最適化）。
第４年次 （令和５年度）	【研究主題】 自己の学びを創り上げていく子供の育成 ～個別最適な研究で「対話」を探る～ 対話を用いた学びの３つの段階を統合的に捉え、全学年、全学級が「学びが深まる対話」の実現を目指す。 研究の協働性を高めるために、それぞれの学年で研究教科、研究テーマを選択・決定し、実践を重ねていく。
第５年次 （令和６年度）	【研究主題】 自己の学びを創り上げていく子供の育成 ～対話により思いや考えを表現し、学びを深める授業実践～ 対話を用いた学びの３つの段階を統合的に捉え、全学年、全学級が「学びが深まる対話」の実現を目指す。 研究の協働性を高めるために、学年部ごとに「目指す児童像」を設定したり事前研や事後研に取り組んだりし、実践を重ねていく。

○年間計画

４月　研究推進委員会
５月　研究全体会
　　授業実践（各学級１実践公開）、実践報告書　～１月
７月　研究全体会（１学期の振り返り・課題の意識）または、全体研修会
　　講師を招いての研修会
１２月　研究全体会（２学期の振り返り・課題の意識）または、全体研修会
１月　学年・学年部による研究実践のまとめ、次年度に向けて協議
２月　研究全体会（次年度に向けて）
３月　次年度の研究の方向性の決定

令和６年度　研究構想図

学校教育目標
未来をひらく、英知と力のある子どもの育成

目指す学校の姿	目指す子供の姿	目指す教師の姿
1　児童にとって「通って楽しい」学校 2　保護者にとって「通わせて安心」な学校 3　教職員にとって「働きがい」のある学校 4　地域区民にとって「地域の誇り」に思える学校	1　基礎的な知識や技能を確実に身に付け、自分から学ぶ子 2　心豊かで仲間とつながる子 3　体を鍛え、粘り強く挑戦する子	1　高い志を持ち、学び続ける教師 2　「教師は授業で勝負する」ことを心がけ、指導力をもった教師 3　仕事と生活のバランスを保ち心身ともに健康な教師

友達と対話することで学びを広げたり、深めたりする子供

研究主題

自己の学びを創り上げていく子どもの育成

課題に対し、見通しをもって粘り強く取り組み、学びを振り返って次へつなげていく子供

知識を相互に関連付けて深く理解したり、必要に応じて知識技能を発揮したりする子供

子ども理解・教師や社会の願い

「学びが深まる対話」の実現に向けた授業づくり

- 知識・技能を確実に獲得できるようにする単元構成
- 対話する視点の明確化
- 経験や学習がつながっていることを自覚するための問い返し
- 多様な考えが生まれる問題設定
- 対話することで学びが深まったことが自覚できるようにする振り返り

必要な手立てを検討・修正

支持的な学級風土
安心して学べる教室を創る時間
CCT
（クラスカルチャータイム）

日々の学習の積み重ね
研究副題を意識した授業づくり
「対話により思いや考えを表現し、学びを深める授業実践」

教師の学びの時間
授業実践・全体研修会

＜様式＞

学校名	山形市立南沼原小学校 山形市飯沢59-2 Tel023-643-3010 Fax023-645-8598 e-mail school@minaminumahara-e.ymgt.ed.jp	校　長	石澤　友章
		研究主任	佐藤　貴恵
研究主題	「つかむ」・「つながる」・「ふりかえる」子どもの育成 ～仲間とつながり、学びを生かす授業づくり～（３年次）		

研究主題設定の理由

社会的な背景から

現在、子どもたちを取り巻く環境は急速に変化し、予測が困難な時代になりつつある。こうした時代にあっても、子どもたちは様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を見つけ解決していくこと、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構築するなど新たな価値につなげること、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるなど、生きる力を育むことが必要である。

テーマについて

私たちは、子ども一人ひとりが自分自身の未知なる可能性（資質・能力を含む）を伸ばしていくことを願っている。そのためには、めざす子どもの姿を明確に示し「主体的・対話的で深い学び」の実現にむけた授業改善が必要である。

「つかむ」とは、課題をつかみ主体的に考える子どもの姿であり、興味関心をもって学習に向かい、追究したい課題を立てたり、課題を自分事として受け止め、主体的に課題解決の道筋を考えたりする子どもの育成を目指していくことである。

「つながる」とは、仲間の思いを受け止めて共に高め合う子どもの姿であり、仲間と共に考えを出し合いながら、課題を追究していこうとしたり、周りの人との温かい人間関係を築き、よりよい集団として高まろうとしたりする子どもの育成を目指していくことである。

「ふり返る」とは、学んだことを生かそうとする子どもの姿であり、なりたい自分の姿をもち、それに向かって努力（行動）しようとしたり、何がわかったか何ができるようになったのかをふり返り、自分の成長に目を向けられたりする子どもの育成を目指していくことである。

また、「つかむ」（自己決定）・「つながる」（共感的理解）・「ふりかえる」（自己存在感）の伸長の中で、多様な考えを認め、自分の考えを深めたり高めたりできることが子どもたちの大事な資質・能力となる。ここで得た経験や学びを糧に、子ども一人ひとりが、社会とつながりながら新たな価値を生み出し、成長していくだろう。そのためにも、学習指導力・生徒指導力・特別支援教育力に支えられる担任力が必要であることは言うまでも無い。教師が担任力を高め、つながりを大切にした授業づくりを進めることをねらい、サブテーマを「仲間とつながり、学びを生かす授業づくり」とした。

昨年度の取組みと子どもの実態から

成果として、①つかむ、②つながる、③ふりかえる、の視点から

①児童の実態に合った課題設定の工夫や、学習の見通しをもたせることなどを通して、主体性をもって学習する児童が増えてきた。

②子ども同士の教え合いが増えてきた。また、友だちの意見を受け止めようとする関係性が高まってきている。

③ふり返りを重ねることで、自分なりの考えをもてるようになってきた。また、次時の課題や疑問点を子ども自身で見つけられるようになってきた。

一方、課題として以下の点が浮かび上がった。

① 学習意欲の継続。

① 本時だけでなく、単元全体の課題設定の工夫。

② ペアやグループ学習の必要感や、考えの深め方。

③ ふり返る視点の明確化やふり返る時間の確保

	上記のような課題が残った。以上の成果や課題を受けて、「主体的・対話的で深い学び」になっているかを、教師が確かめ、授業を改善していく必要がある。教科の本質にせまるための教材研究や、カリキュラム・マネジメントを活用した授業改善を通して、全教員共通理解のもと、めざす子どもの姿に迫っていく。 子どもたちが自分事として課題を「つかむ」こと、異なる考えを組み合わせてより良い学びになるように「つながる」こと、学んだことを生かすために「ふりかえる」ことを、本年度の研究として推進していく。子どもたち自ら学習を調整しながら学んでいくことができるよう、「個に応じた指導」を充実させるため、具体的な指導法を研究していく。
研究の内容	次の３つの視点から指導方法を工夫し、めざす子どもの学びの姿に迫っていく。 **【授業づくりの３つの視点】** **◇視点１　課題の「焦点化」** 子どもの実態を正しく見取り、どこまで学習目標に到達できるか、課題を見極めていく。 ＊確かな教材研究（教材の精選・追究、授業研究、研究協議会、学年研究日の更なる充実） ＊子どもの思考を意識した単元構成や授業の創造 ＊見通しがもてること、ゴールのイメージができること **◇視点２　思考の「可視化・共有化」** 仲間とつながりながら課題を解決していく時に、話し合いの視点を明確にし、解決の道筋がわかるような具体的な手立てを考えていく。 ＊可視化の手立てを活用し、構造的に思考を整理し、共有化 ＊協働体験の良さを積み重ねる（共感的に受け止め合う学級経営や学年経営） ＊必要感のある学び合いの場の設定 **◇視点３　学びの「自覚化」** 課題→課題解決→ふり返り→新たな疑問や課題への挑戦…とふり返りの中で、子どもは自分の考えを整理、統合し、わかるようになった自分やその変容を確認できるようにしていく。 ＊ふり返りの視点（何についてふり返るのか） ＊ふり返りの場の確保（授業時間内・家庭学習時間など） ＊ふり返りの方法（文章・円グラフ・段階評価など） ※この取り組みは、各教科に共通した学習過程及び生活全般において意識的に進めていく。

研究の方法

（１）学校経営目標をうけ、学年研究日（毎週木曜日）に学年の授業リーダーを中心に単元構想や授業づくり、指導法・評価を研究し、学年（特別支援学級は学級）カリキュラム・マネジメントを活用しながら、めざす子どもの姿に迫る。全体会・研究推進委員会・学年会・学年研究日で共通理解しながら、研究の日常化による授業改善を図っていく。

（２）研究授業の進め方

①研究教科　　全教科（目指す子どもの姿を各教科から探っていく）

②授業研究会・・小研　一人１授業　（事前研・事後研は学年で行う）

中研　１授業

大研　１授業

◇指導主事申請招聘・・・大研授業

◇研究会参加・・・・・・大研授業

大研

事前研→上学年（もしくは下学年）の先生と、推進委員で行う。

授業　→全職員で参観。

事後研→全員参加。目指す子どもの学びの姿や授業づくりの視点にそって話し合う。

中研

事前研→下学年（もしくは上学年）の先生と、推進委員で行う。

授業　→下学年（もしくは上学年）の先生で参観。

事後研→事前研をしたメンバーで行う。目指す子どもの学びの姿や授業づくりの視点にそって話し合う。

学年をまたいで色々な先生方の授業を参観できるよう・・・

・月曜日の打ち合わせ時に、今週の授業者や教科等についてお知らせする

・職員室ホワイトボード横の壁を利用し、研究授業の日程一覧（月ごと）を掲示する

・自習にするクラスがあることを、学年の教員間で把握しておく

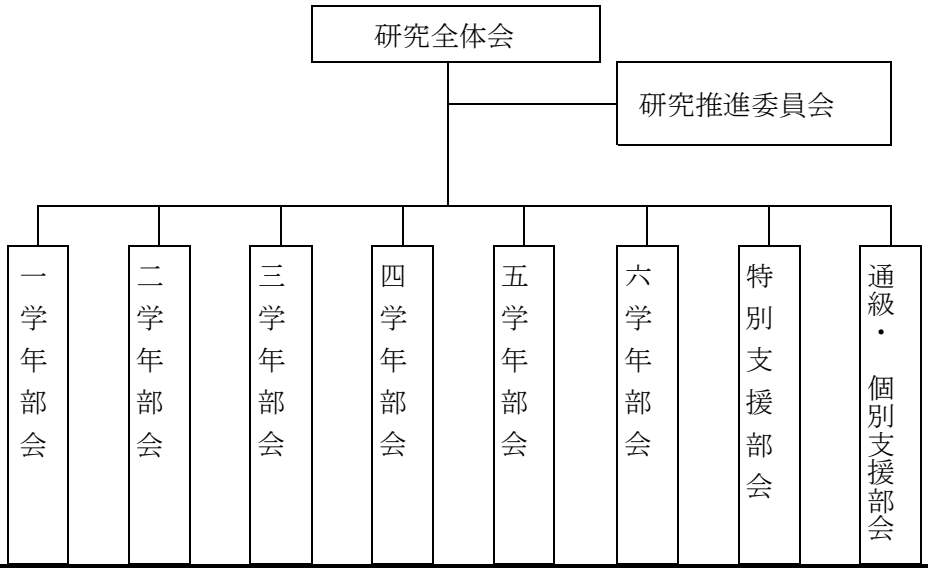
など、工夫をする。

（３）「校内研究だより」を発行し、授業研究会の視点を明確にして共有化を図る。

「研究紀要」(授業研究会の成果と課題を含む)を作成し、授業を通した子どもの姿について、個々人で振り返る。

（4）研究の組織

校務運営機構の各担当でも、めざす子どもの姿の観点から工夫してできることを検討し（委員会や学級活動など)、学びの環境を整えていく。そして、全校体制で研究を進めていくことを全職員で共通理解していく。また、担外は授業を行う学年部に所属する。



Ｒ６　年度学校研究全体構想

学習指導要領
学校教育を通じて、よりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の担い手となるために必要な資質・能力を育む。

第６次山形県教育振興計画
人間力に満ちあふれ、山形の未来をひらく人づくり
「つなぐ」～いのち、学び、地域～
◇いのちをつなぐ人◇学びを生かす人◇地域をつくる人
山形市教育大綱・山形市教育振興基本計画

郷土を誇りに思い　いのちが輝く　人づくり
～山形らしさの継承　発展　そして発信～

学校教育目標
広い心
丈夫な体
進んで学習

研究主題
「つかむ」・「つながる」・「ふりかえる」子どもの育成
～仲間とつながり、学びを生かす授業づくり～

つかむ
課題をつかみ、主体的に考える子ども
（自己決定）

つながる
仲間の思いを受け止めて、共に高め合う子ども
（共感的理解）

ふりかえる
学んだことを生かそうとする子ども
（自己存在感）

担任力の向上・授業づくり

- **課題の「焦点化」課題をつかむためのアプローチを工夫する**
- **思考の「可視化・共有化」構造的に思考を整理し、共有を図る**
- **学びの「自覚化」学びをふり返る手立てを工夫する**

子ども理解・UD を基盤とした個に応じた指導
- ○学年会（子どもを語る場）
- ○学びの環境作り
- ○ICT 機器の活用
- ○集団作りのスキル

研究（授業改善）の日常化
- ○学年研究日
- ○単元構想・指導法・評価の研究
- ○学年（学級）カリキュラム・マネジメントの活用

＜様式＞

学校名	山形市立宮浦小学校 山形市宮浦17－3 TEL 645－1479 FAX 645－8346	校　長	結城　喜広
		研究主任	森　知実
研究主題	自ら問いを持って考え、思いを伝え合う子供の育成 （６年次）		
研究主題設定の理由	本校の子供たちは、素直でエネルギーにあふれており、前向きに学習に向かおうとしている。その一方で、困難な課題にぶつかったとき、課題を自分事として捉え、前向きに取り組むことができないこともあり、粘り強さや自ら問いを持って考えようとする姿に課題があると考えられる。 少子高齢化やグローバル化等によって社会構造が多様化し、めまぐるしく変化する時代の中で、新たな課題に対して、既存の知識だけにとらわれることなく、他者と互いの思いや考えをすり合わせながら最適解を見つけていく、しなやかな生き方が必要となる。そこで重要となるのは、「自ら学ぼうとする意欲」であると考える。与えられた課題だけをこなしていくのではなく、「なぜだろう」「不思議だ」「調べたい」「解決したい」といった知的な探究心を持ちながら生活できるような子供を育てていきたい。また、探究するには、他者の存在が不可欠であると考える。子供たち同士が互いに思いを伝え合い協働的に解決したり、互いを認め合いながら生活する経験を重ねていったりすることができるようにしていきたい。そこで、本校の研究主題を、昨年度に引き続き、「自ら問いを持って考え、思いを伝え合う子供の育成」とすることとした。受け身の姿勢で学ぶのではなく、自ら課題を見い出し、その解決のために、習得した知識・技能を活かしながら思考し、協働的に学ぶ過程を大切にした授業づくりを行っていきたい。また、本研究主題は、学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び」という授業改善の視点にも直結するものであると考える。学習指導要領の趣旨を十分に踏まえながら、育てたい資質・能力をより明確にし、授業力の向上に努めていきたい。		
研究の重点	資質・能力を育む単元計画づくり 学習指導要領では、「何が分かるか」ではなく、「何ができるようになるか」をキーワードとして育成を目指す資質・能力が具体化されている。それにより、本当に子供たちにどんな力が付いたのか、その付いた力は確かなものなのかといったことが、これまで以上に問われるようになってきた。そこで、子供たちに確かな資質・能力を育んでいけるよう、単元などの内容のまとまりをきちんとデザインすることが大切だと考えた。また、自ら問いを持って考えたり、思いを伝え合ったりするためには、そのための力が必要である。 このようなことから、学習の基盤となる「言語能力」「情報活用能力」「課題発見・解決能力」の３つの資質・能力に加え、「あきらめないで考える力」を本校で育てたい資質・能力とし、単元計画に重点を置きながら計画的に育てていくこととした。		
	１．単元デザイン表の作成 学級経営案及び教科の指導案としての性格を持ち合わせた、「単元デザイン表」の作成を行う。		

研究の内容・方法

作成は、学期ごと３回行い、教育計画に位置づけていく。学級担任が、その学期に重点的に取り組みたい教科を１つ決定し、育てたい資質・能力を明確にしながら学級経営と単元計画を行う。基本的に個人で作成していくが、学年ごとに検討する時間を設けるなど、複数人で取り組んでいく。また、単元デザイン表の作成は、山形大学名誉教授である中井義時先生より専門的な指導を仰いでいく。子供たち同様、教職員も一人の学び手である。自己の課題を持ち、授業改善に意図的・計画的・継続的に取り組む「自律した学び」を行い、授業力の向上を図っていきたい。

２．単元計画タイム（T タイム）の実施

会議のない金曜日の放課後 16:00～16:30 を単元計画タイム（T タイム）として位置づけ、学年ごとに単元・授業について考える時間を設定する。日ごろ学級事務に追われがちな放課後の時間を、授業について語り合う時間としてきちんと確保することで、学年として計画的に子供たちを育てていきたい。また、ベテラン教員からすぐれた教育技術を継承する場としても活用されていくことを期待している。

３．授業研究会の実施

授業の提案は、すべての学級が行う。授業づくり等は、基本的に学年で進めていくが、学年部で進めたり、同じ教科を研究している者同士で進めたりするなど柔軟に対応する。単元デザイン表に加え、本時案、授業の視点、事後記録などを作成し、職員全員に周知する。参観した教員は、授業の視点に沿った見解や自由な視点で自分が学んだことなどを授業者に伝える場を設定する。進んで研究に参加する場を設定することで、教員も「自律した学び」を目指す。また、いつでも誰でも参加できるスタイルの研究会にすることによって、研究の日常化を図っていく。

研究の計画

4月	・研究推進委員会 ・研究全体会（１年の見通し）	10月	
5月	・単元づくり研修会① （単元デザイン表作成①） １学期の実践	11月	
6月		12月	・研究推進委員会 ・単元づくり研修会③ （単元デザイン表作成③）
7月	・研究全体会	1月	３学期の実践
8月	・単元づくり研修会② （単元デザイン表作成②）	2月	・研究推進委員会 ・研究全体会 （今年度の振り返り、来年度の方向性）
9月	２学期の実践	3月	・研究のまとめ

＜様式＞

学校名	山形市立蔵王第一小学校 山形市蔵王成沢西四丁目３番１７号 TEL688-2210　FAX688-9041	校　長	細川　直弥
		研究主任	石川　史朗

研究主題

「主体的に学ぶ子供の育成」（７年次）
―「振り返り」を自らの学びに生かして―

研究主題設定の理由

本校の教育目標は「豊かな心を育み　自ら学び　たくましく生きる子供の育成」である。

その具現化のため、自ら学ぶ課題の設定や互いに学び合おうとする学級づくりに力を入れながら、平成３０年度から「主体的に学ぶ子供の育成」という主題で研究を進め、「課題設定」「学び合い」「まとめ・振り返り」の３つに重点を置き、それを実現するための授業づくりを行ってきた。

令和４年度には、「振り返り」を一単位時間に限ったものではなく広義に捉え、子供が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を核にしながら、主体的に学ぶ子供の姿を追求した。振り返りの型を示すことなどについて一定の成果が見られた一方、どのような観点で振り返りをさせるとよいかについてや、作業的な振り返りになっていたことなどについて、課題も挙げられた。また、そもそもどのような姿を「振り返り」ができていると見取ればよいのか、職員間でどのような児童の姿を目指すべきなのか、といった根本的な課題も明らかになった。

令和４年度までの成果と課題を受けて、令和５年度当初に「子供たちの次の学びに繋がる効果的な振り返りを更に求めていきたい」「振り返りの観点としての、より具体的な目指す児童の姿が必要だ」「学校として目指す資質・能力を明確化し、その達成手段の一つとして振り返りをもっと機能させなければならない」といった考えを、職員間で再共有することとなった。

そこで、２ヶ年計画を構想し、１年目となる令和５年度は、目指す「資質・能力」の明確化とそれに迫るための単元づくりを、２年目となる令和６年度は、目指す「資質・能力」に迫るためのカリキュラム・マネジメントの推進を軸に取り組んでいくこととした。

以上を踏まえて、主な研究内容として、次の２点を定めた。

○学校教育目標を目指す「資質・能力」として明確化し、学年（部）ごとに実態に応じて更に具体的に目指す姿として捉え、位置づけていく。

○校内研究全体会での単元づくり演習を通して、目指す「資質・能力」に迫る授業づくり研修を実施し、その「資質・能力」を意識した単元構想ができるようになる。

このような教育の実現に迫るため、令和５年度に本校の教育目標である「豊かな心を育み　自ら学び　たくましく生きる子供の育成」を資質・能力として表すことを試みた。職員間で協議し、以下の表１のように３つの資質・能力と、学年部ごとの具体的な姿を明確化した。

表１　蔵王第一小学校における目指す資質・能力の一覧

目指す子ども像　「笑顔あふれる子ども」			
学校教育目標	豊かな心を育み	自ら学び	たくましく生きる
目指す資質・能力	相手の考えを受け止める力	思いや根拠をもって表現できる力 自他の考えを高め合う力	目標に向かって、試行錯誤できる力
高学年部	相手の意見をきき、考えや思いを推測して自分の考えで言いかえることができる	根拠をもって相手にわかりやすく伝わるように表現できる	友達とかかわりながら、新しいこともチャレンジできる
中学年部	相手の意見をきき、自分の考えで言いかえたり付け足して話をしたりすることができる	相違に気付き、自他の考えを高めることができる	課題を自分事としてとらえ、粘り強く取り組むことができる
低学年部	他の人の考えを受容的にきき、理解できる	自分の考えや思ったことを、理由をつけて、色々な表現を用いて相手に伝えることができる	めあてに向かって、粘り強く試行錯誤し、解決に導くことができる

今年度は、３つの資質・能力に迫る単元づくりや実践、カリキュラム・マネジメントを行いながら、子供が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を核にし、主体的に学ぶ子供の姿を追求していく。

研究の内容

（１）「振り返り」の捉え方

定義：自身の目標設定や計画、修正など自分の思考や行動を客観的に把握し認識すること

引用または参考

学習指導要領解説　総則編 P38「③学びに向かう力、人間性等を涵養すること」の説明より
『自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力』

「振り返り」については、令和４年度からの捉え方を踏襲し、子供が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動に重点を置く。単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、見通しを立てたり振り返ったりする場面を設定し、子供自身が目標設定や計画、修正など自分の思考や行動を客観的に把握し認識できるようにしていく。

（２）学びのイメージ

図１で示すように、平成３０年度から継続している「探究型学習」のプロセスを踏まえた「学びのイメージ」をもとに、「振り返り」に重点を置いた授業づくりを行う。この「学びのイメージ」は、３つの資質・能力に迫る授業づくりを推進することで、実現性が高まると思われる。

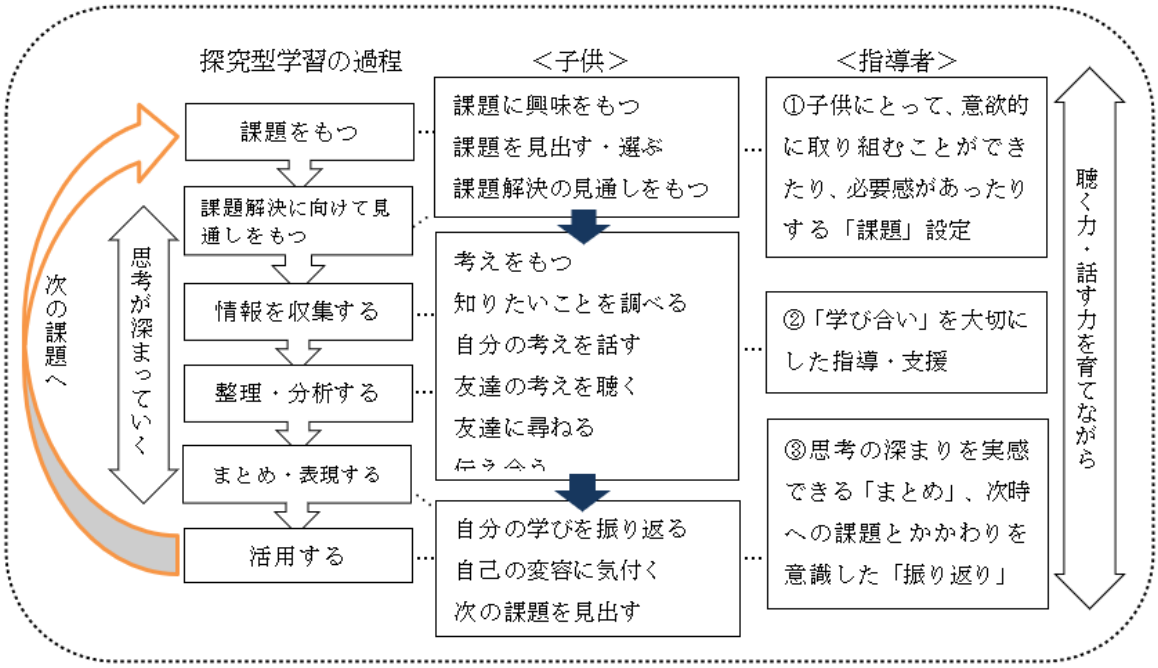


図１　探究型学習をもとにした「学びのイメージ」

研究の方法

（１）年間指導計画の作成

令和６年度は教科書が新しいものに更新されるため、４月中に大まかな指導計画を作成する。基本的には教科書会社が公開している指導計画などを参考にするが、２学期以降のカリキュラム・マネジメントを意識し、単元の配列等を確認しておく。

（２）目指す資質・能力に迫る単元づくり

表２の例に示したように、令和５年度に作成した単元プランの形式を用いて、単元づくりを行う。令和５年度に引き続き、全ての学級で作成することとするが、特別支援部における単元プランの様式は検討中である。また、この単元プランに「振り返り」に関してねらったことや工夫したことなどを記述する項目を設けることも、併せて検討しているところである。

単元プランは、（３）のカリキュラム・マネジメント表と連動し、目指す資質・能力を共有させながら、２学期に以降に作成する。その際、外部の専門家の指導を仰ぎながら、学年部で教科を揃えて作成するなどして、組織的に取り組める体制を整えたい。

なお、「大研」「小研」を実施する際は、本時案も作成し、職員間で共有することにする。

（３）目指す資質・能力に迫るカリキュラム・マネジメント

（２）の単元プランに加え、継続的な授業改善を実現するため、表３のような学期スパンのカリキュラム・マネジメントを実施する。目指す資質・能力を意図的・計画的・継続的に引き出し、児童自身が既習事項を構造化しながら「深い学び」へと至ることをねらい、基盤となる教科に国語を位置づけ、中心単元に向かってその他の単元や内外資源が連動していくイメージで作成していく。

表２　令和５年度における単元プランの一例

１．すべての教科等でめざす資質・能力　（１）言語能力（２）情報活用能力（３）課題発見・解決能力

	２目指す子どもの姿	３具体的な資質・能力	４現状と課題	５指導の手立て	評価場面方法	評価	６．評価コメント
1	**根拠をもって表現し、自他の考えを高め合う力（１）**	①整数の場合の計算の意味や計算の仕方をもとに、自分の考えを形成する力。 ②除法の意味に着目し、図表などで根拠を明らかにして説明できる力。	立式はできるが、なぜそういう式になるのか根拠をもって説明することに苦手意識をもつ児童が多い。数直線を用いて考えを言葉にして伝えることに課題がある。	数直線を活用して２量の関係を丁寧に捉えさせたい。立式の際は、数直線を基にし、求める数を□として乗法で立式してから□を除法で求めるように指導し、根拠をもって説明できるようにする。	児童同士の会話や交流	探究レポート、発表	
2	**自分の考えを伝えたり、相手の考えを受け止めたりできる力（２）**	①課題解決の観点から、必要な情報を自ら取捨選択、整理できる力。 ②多様な立場や意見を尊重・活用し、自分の考えを深めようとする力。	「○人以上の人に説明しよう」と課題を与えると意欲的に取り組む児童が多い。しかし、いつも決まった人同士でしか説明しないという現状でもある。	協働的な学び合いの時間を多く設け、友達の様々な考えや表現の仕方を聞くことで自分の考えが深まるということを初めに全体で共有しておく。より多くの人と伝え合うことができるように伝え合う時間設定を十分に確保する。	児童同士の会話や交流		
3	**チャレンジや試行錯誤ができる力（３）**	①自分の学習状況を判断し、振り返って次の目標を設定しようとする力。 ②「問い」を見出し、解決に向けて粘り強く探究しようとする力。	やったことないことにたいして「やってみたい」という意欲をもつ児童が多い。しかし、わからないことできないことがあると何をしたらいいかわからず、試行錯誤する前にすぐ人に聞くことが多い。	見通しを持たせてから課題解決していくように指導していき、粘り強く取り組めるようにする。また、単元を通して解けるようになった問題を発展させ、単元の最後に自分で「問い」をみつけ探究していく活動を取り入れる。	振り返り記述、探究レポート		

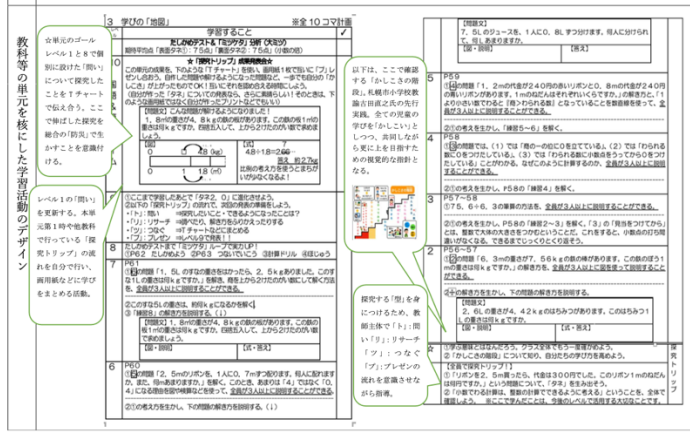
Ⅱ　１学期実施の重点単元を核にした学習活動のデザイン

１．目標	２．主な学習内容	３．評価基準（育成すべき資質・能力）		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
除数が小数の場合の除法の意味について理解し，その計算の仕方を図や式 を用いて考える力を養うとともに，除数が小数の場合の除法の計算の仕方 を除法の性質や数学的表現を用いて考えた過程を振り返り，除法の意味をとらえ直したり今後の生活や学習に活用しようとしたりする態度を養う。	・小数でわることの意味 ・小数の除法の考え方と筆算形式 ・純小数でわるときの商と被除数の関係 ・小数の除法におけるあまりの位取り ・商を概数で表すときの処理の仕方	除数が小数の場合の除法の意味について理解するとともに，除数が小数の場合の除法の計算ができる。	除法の意味に着目し，除法の性質を活用して，除数が小数の場合の除法の計算の仕方を図や式などを用いて考え表現している。	除数が小数の場合の除法の意味をとらえ直したり，その計算方法について図や式などを用いて考えた過程や結果を振り返り，多面的にとらえ検討してよりよいものを求めて粘り強く考えたり，数学のよさに気づき学習したことを今後の生活や学習に活用しようとしたりしている。

５．単元の学習内容

教時	教科用指導書等での指導計画 ※箇条書きで簡潔に書く。
1	小数でわることの意味を図や式を用いて考え，説明することができる。
2	整数÷小数の計算の仕方を，数直線を用いて考え，説明することができる。
3 4	小数÷小数の計算の仕方を，除法の性質を基に考えることを通して，小数÷小数の筆算の仕方を理解する。
5	小数÷小数の筆算(商が純小数の場合，被除数に 0 を補う場合)の仕方を理解し，答えを求めることができる。
6	純小数でわると，商は被除数より大きくなることを理解し，説明することができる。
7	小数の除法での余りの意味を理解し，余りを求めることができる。
8	小数の除法で商を概数で求めるときの処理の仕方を理解し，商を概数で表すことができる。
9	学習内容の定着を確認するとともに，数学的な見方・考え方を振り返り価値づける。

６．単元計画



７．本時の指導内容

本時の指導内容

1.2m の代金が 240 円の赤いリボンと、0.8m の代金が 240 円の青いリボンがあります。

1m のねだんは、それぞれいくらですか。

【式】

240 ÷ 1.2 ＝ 200

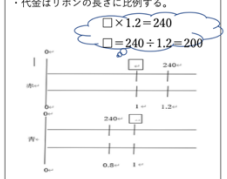
答え　200 円

240 ÷ 0.8 ＝ 300

答え　300 円

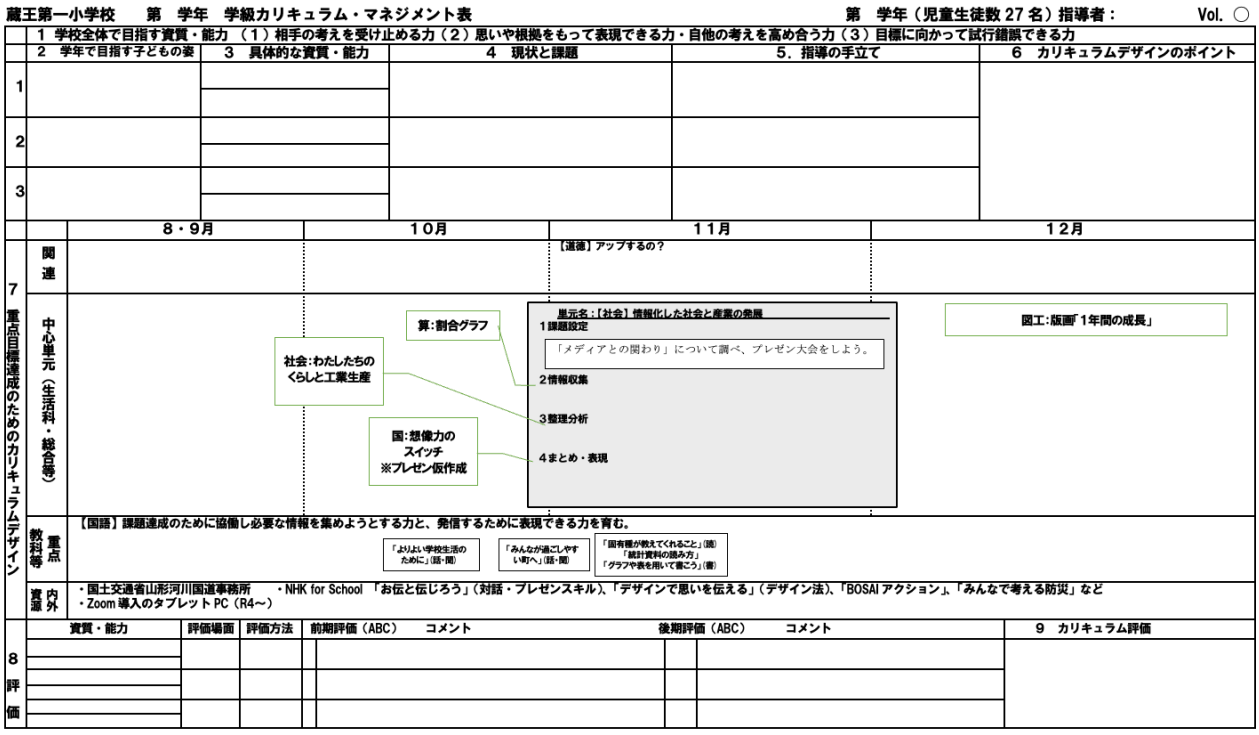
【図・説明】　※教科書 P59 の内容

・代金はリボンの長さに比例する。



１より小さい数でわると、商＞われる数となる

表３　学期スパンのカリキュラム・マネジメント表の構想



藏王第一小学校　　第　学年　学級カリキュラム・マネジメント表　　第　学年（児童生徒数 27 名）指導者：　　Vol. ○

	1 学校全体で目指す資質・能力 （1）相手の考えを受け止める力（2）思いや根拠をもって表現できる力・自他の考えを高め合う力（3）目標に向かって試行錯誤できる力				
	2 学年で目指す子どもの姿	3 具体的な資質・能力	4 現状と課題	5. 指導の手立て	6 カリキュラムデザインのポイント
1					
2					
3					

7 重点目標達成のためのカリキュラムデザイン	8・9月	10月	11月	12月
関連			【道徳】アップするの？	
中心単元（生活科・総合等）	社会：わたしたちのくらしと工業生産	算：割合グラフ	国：想像力のスイッチ ※プレゼン仮作成	図工：版画「1年間の成長」
重点教科等	【国語】課題達成のために協働し必要な情報を集めようとする力と、発信するために表現できる力を育む。			
内外資源	・国土交通省山形河川国道事務所　・NHK for School 「お伝と伝じろう」（対話・プレゼンスキル）、「デザインで思いを伝える」（デザイン法）、「BOSAI アクション」、「みんなで考える防災」など ・Zoom 導入のタブレット PC（R4～）			

単元名：【社会】情報化した社会と産業の発展
1 課題設定
「メディアとの関わり」について調べ、プレゼン大会をしよう。
2 情報収集
3 整理分析
4 まとめ・表現

「よりよい学校生活のために」（話・聞）
「みんなが過ごしやすい町へ」（話・聞）
「固有種が教えてくれること」（読）「統計資料の読み方」「グラフや表を用いて書こう」（書）

8 評価	資質・能力	評価場面	評価方法	前期評価（ABC）	コメント	後期評価（ABC）	コメント	9 カリキュラム評価

表３については、主となってカリキュラム・マネジメント表を作成する教員を学年内で設けることが考えられる。その際、その教員が授業研究会で授業を実施する教員の指導やサポートを行うことを１つのモデルケース例とするが、学年の実態や授業者の意思を尊重して調整できることとする。また、実施する授業は、中心単元に限る必要はない。１学期以内に専門家の指導を受け、全学年がカリキュラム・マネジメント表を作成できるように体制を整えたい。

研究の計画

（１）研究計画

図２は、令和５年度の当初に作成した、目指す資質・能力の具現化を図るための２か年計画を表す図である。図２に示したように、１年目にあたる令和５年度は、目指す資質・能力に迫るための単元づくりに取り組んできた。

２年目にあたる令和６年度も、図２の計画に従い目指す資質・能力に迫るためのカリキュラム・マネジメントを推進し、到達目標である「一人一人の教員が、自立して目指す資質・能力に迫る授業づくりとカリ・マネを実践できるようになる」ことを目指していく。

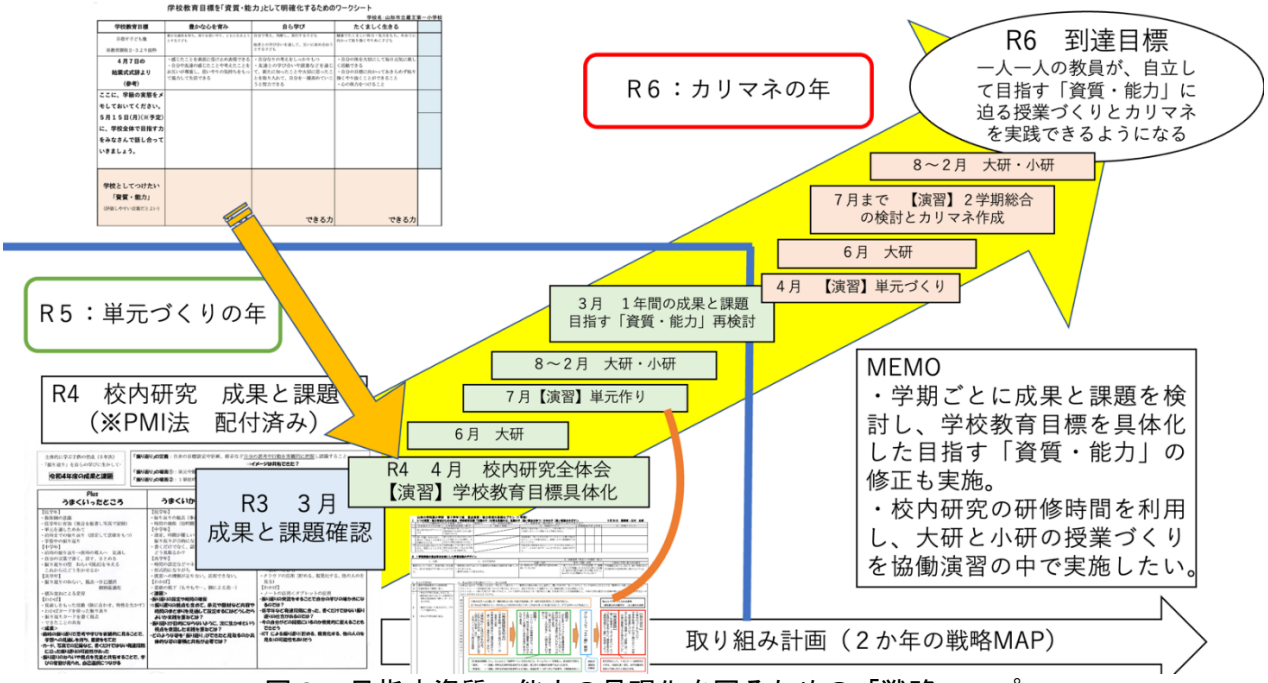
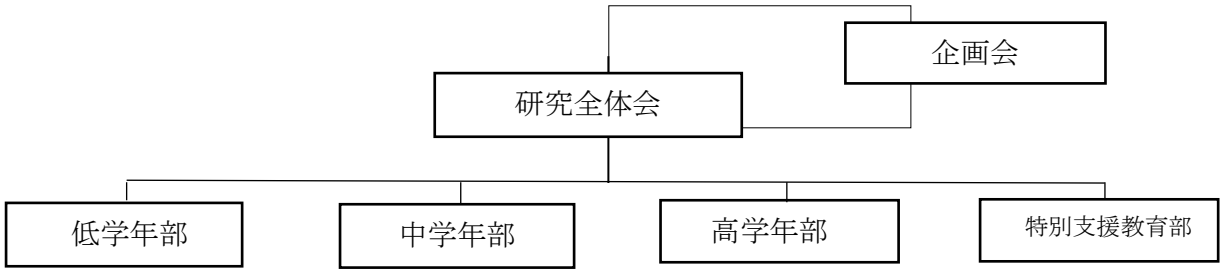


図２　目指す資質・能力の具現化を図るための「戦略マップ」

(２)研究の組織



★研究推進委員会：研究についての指針を決定するとともに、内容を討議し、推進を図る。
・校長　　・教頭　　・教務（橋本）・副教務（江口）　・特別支援（栂瀬）
・１年（吉田）・２年（成澤）・３年（佐藤智）・４年（笹原）・５年（塚本）・６年（石川）

★企画会：情報収集、研究方法、「学びカフェ」の検討などを行う。
研究主任と副研究主任が、クラブ活動と同じ時間帯に行う。
＊クラブ活動との兼ね合いで、可能であれば開催する。

★校内研学年部部会：授業づくり（事前研究会、事後研究会）、理論の構築、授業実践を行う。

低学年部	・吉田　・萩原　・松井　・成澤　・橋本
中学年部	・佐藤智　・柊屋　・眞壁　・笹原
高学年部	・塚本　・工藤　・石川　・和田　・江口
特別支援教育部	・栂瀬　・伊藤　・醍醐　・横尾　・横山　・今野　・秋葉　・上谷

※◎は大研(検討中)

令和６年度 年間研究計画について

月　日	曜	研究会など	内容等
４月　３日	水	研究推進委員会	【共有】R5 の成果と課題及び、学校全体で目指す資質・能力と学年部で目指す資質・能力について 【協議】R6 の研究内容と方法・計画について
１０日	水	（研究助成申請　締切日）	
１５日	月	職員会議	【連絡】各学級の実態把握期間、教科書内容把握期間について 年間指導計画の見方・作り方について（園部）
２３日	火	校内研全体会	【共有】R5 の成果と課題及び、学校全体で目指す資質・能力と学年部で目指す資質・能力について 【協議】R6 の研究内容と方法・計画について
３０日	火	年間指導計画　締切日	
５月 １８日	土	**秋季大運動会**	
２７日	月	職員会議	【演習】教科書内容の確認と、年間指導計画作成開始
６月　４日	火	**市陸上記録会**	
８日	土	**授業参観・PTA 球技大会**	
７月　１日	月	職員会議	【研修】第１回「学びカフェ」（テーマ：学級経営スキルアップ）
８日	月	校内研大研①	学期スパンカリ・マネと資質・能力ベース指導案を用いた提案授業（研究部より） 授業者：　　助言者：
１６日	火	研究推進委員会	【協議】大研①をもとにした学期スパンカリマネの形式の検討 紀要の形式について（PDF 化の承認）
２２日	月	校内研全体会	中井先生　カリマネ作成講習会（日程未定）、カリマネ・指導案作成開始（中井先生の来校予定日設定など）
８月 ３０日	金	職員会議	【演習】学期スパンカリ・マネ、指導案作成（学年部で）

	９月　４日	水	小研	
	５日	木	小研	
	９日	月	小研	
	１０日	火	小研	
	１２日	木	小研	
	１３日	金	小研	
	１７日	火	小研	
	２５日	水	小研	
	２７日	金	校内研大研②	学期スパンカリ・マネと資質・能力ベース指導案を用いた提案授業 授業者：　　助言者：
	１０月　７日	月	職員会議	※評価簿提出直前のため、研修等はなし。
	11 月　１１日	月	職員会議	【研修】第２回「学びカフェ」（テーマ：募集）
	１８日	月	校内研大研③	学期スパンカリ・マネと資質・能力ベース指導案を用いた提案授業 授業者：　　助言者：
	２０日～	水	学習発表会	
	２５日	月	研究推進委員会	【協議】R6 の研究の成果と課題について 紀要について
	１２月　４日	水	小研	
	５日	木	小研	
	１２日	木	小研	
	１６日	月	校内研全体会	【協議】R6 の研究の成果と課題について
	１７日	火		
	１８日	水		
	１月　２０日	月	職員会議	【演習】第３回「学びカフェ」（テーマ：募集）
	２月　１７日	月	職員会議	【演習】目指す資質・能力の再検討　Ｒ７に向けて決定
	２月　１８日	火		研究紀要原稿【PDF】〆切
	２月　１９日	水	研究推進委員会	【協議】来年度の研究について
	２月　２６日	水	校内研全体会	【協議】来年度の研究について
	３月　２１日	金	研究紀要完成	CD 焼き付け・各所に送付（送付先は共有内にあり）
	※小研については、３月１９日時点の年間計画における空欄日から抽出。上記以外の日程も可。			

＜様式＞

<table>
<tr><td rowspan="2">学校名</td><td rowspan="2">山形市立蔵王第二小学校</td><td>校　長</td><td>鈴木　章人</td></tr>
<tr><td>研究主任</td><td>阿部　由美</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">思いを互いに伝え合い、学びを高める子どもの育成（４年次）
～子どもが自ら学ぼうとする授業づくり～</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">変化の激しい現代社会の中で、自分の良さを認識し、高い志をもって意欲的に物事に取り組んだり、多様な人々と協働しながら豊かな人生を切り拓いたりする力を身に付けることが求められている。その時代に求められる資質・能力を身に付けるために、生涯にわたって学び続けるためには、知識や技能の習得のみではなく、「何のために学ぶのか」「どのように学ぶか」という課題に向き合い学びの質を高める指導方法を吟味していく必要がある。
本校では「あかるく　かしこく　ねばり強い蔵王の子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、「自分も相手も大切にする子ども」「主体的に考え行動する子ども」「仲間とともに磨き合う子ども」の育成を目指している。その具現化のために、「分かった」「できた」が実感できる授業や、自己の成長を実感できるような授業づくりに取り組んでいるところである。

【これまでの研究について】
令和３年度より、「思いを互いに伝え合い、学びを高める子どもの育成」を研究主題とし、【思いを互いに伝え合う子ども】【学びを高める子ども】を目指す子ども像として実践を積み重ねてきた。令和５年度は、子ども理解を大切にすることと、振り返りを通して子どもの育ちを蓄積し、子ども自身が学びの高まりを実感できることに力を入れてきた。その結果、振り返りをすることで、自分が学んできたことを再認識して次の授業に生かそうとする子どもの姿が見られるようになった。また、蓄積した自分の振り返りを読み返すことで、友達と考えを交流させながら学ぶ良さを実感したり、自身の学びの高まりを実感したりするきっかけとなった。
「学習の見通し」「考えをもつ」「交流」の３点を授業づくりの柱とすることで、子ども自身が、思いを互いに伝え合うことの良さや自身の学びの高まりを意識するようになってきている。

＜授業づくりの柱について＞
目指す子どもの姿に迫るために、授業づくりのときに大切にしたいことを柱として授業づくりを行ってきた。事後研究会では、目指す子どもの姿に迫っていたかを授業づくりの柱をもとにしながら話し合う。指導法等に注目した話し合いではなく、目指す子どもの姿に迫っているかをもとに話し合うようにする。

＜指導案（授業デザインシート）について＞
実践を積み重ねていく中で、令和３年度の途中から指導案の形式を変更した。子どもの思考の流れを意識して授業を組み立てるために、板書計画を中心にした形式にしたことにより、本時で押さえるべきポイントを明確にすることができた。また、授業を参観する側からも、本時の流れが見やすい形式にしている。</td></tr>
</table>

	【今年度の研究について】 今年度は副題を設定し、子どもが自ら学ぼうとする授業づくりに焦点化する。主体的な学びの姿とは、単にすすんで自分の考えを出すことではない。学習の見通しをもち、学ぼうとする意欲が出てくることが主体的だと捉える。さらに、自己決定の場がある授業、自分事として考えられる授業、子どもが思いを出す場面のある授業など、主体的になれるような、引き込まれる授業づくりを目指す。 振り返りから授業をつくることで既習とつなぐことができる。振り返りにおける、①「わかった」「できた」という事実や知識の確認　②「前と同じように」「つぎも使えそう」という関係性や一般化の生成　③「考えが変わった」などの自己変容の認識や「～さんの考えを聞いて」といった他者との比較は、深い学びの実現に大きく関わるものである。このように振り返りを蓄積していくことにより、子ども自身が中・長期的に学びの高まりを実感することができ、学びがより豊かになっていくものと考える。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進しながら、子どもたちに必要な資質・能力の育成に向けて研究を進めていく。
めざす子ども像	「思いを互いに伝え合い」、学びを振り返ることで、「学びを高める子ども」を目指す。 子どもが自ら学ぼうとする姿の例　　～第１回目の研究全体会での話し合いより～ ・相手意識をもって言語活動を行う。 ・学習したことを生活場面に生かせる。（学習と生活・体験をつなぐ） ・新しい課題でも既習を生かすことで解決しようとする。 ・目指したいモデル（指導者・友達・尊敬する人など）がいる。 ・自分の目標（ゴール）がある。 ・自己決定、自己選択がある。（めあて、やり方も含めて） ・安心して「わからない」「どうして」が言える。 ・間違いを大切にできる。 ・試行錯誤しながら、努力する。（過程を大切にできる。） ・「知りたい」「学びたい」という意欲がある。 ・友達と相談したり一緒に考えたりする。 ・友達の考えと比べながら聞く。 ※自ら学ぼうとする子どもの姿を、研究を通して増やしていきたい。

研究の内容

めざす子ども像の具現化に向けて、授業づくりの柱をもとにしながら実践を積み重ねるとともに、子どもの振り返りを通して学びを価値づけたり、授業改善につげたりする。

学習の見通し

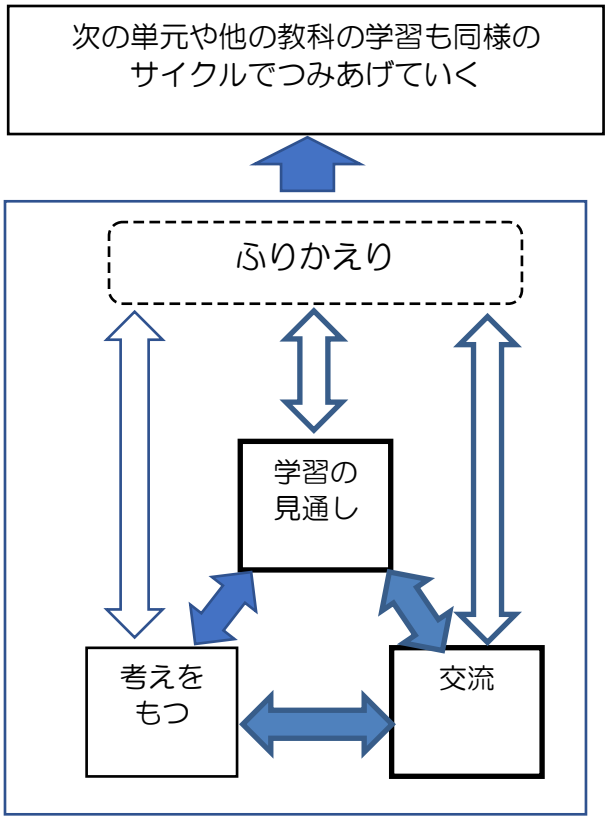
・年間の見通しをもった単元構成
・具体的なゴールの姿を共有
・課題の理解
・既習との結びつき
・子どもと一緒の課題づくり

考えをもつ

・文章や問題の理解
・発問の吟味
・ワークシートの工夫
・考えをもつためのステップ（レベル）の共有
・既習をもとに考える経験の繰り返し

交流

・教師の出と待ち
・発言をつなげるコーディネート
・適切な交流場面の設定
・話し合う内容や目的の明確化
・交流のカリキュラムマネジメント



研究の方法

（１）授業研究会

①研究の教科

・授業者は、子どもの実態や挑戦したい意思により教科を選択する。

②授業研究の進め方

・研究主題に基づいた授業実践を行う。

・研究授業日の１か月前までには、構想の会を開く。構想の会の後に、授業者は指導案を作成し、事前研究会（指導案をもとにして）を行う。

※授業日の１０日前を目安に事前研究会を行い、助言者への指導案は１週間前をめどに提出する。

・事後研究会では、２グループに分かれて具体的な子どもの姿や事実をもとに、授業の視点にそった話し合いをする。その後、グループで話し合われた成果や課題を全員で共有する。

・事後研究会だより（A4 サイズ１枚に、グループごとの話し合いのまとめ、授業者からの一言、指導助言で出された成果や課題を簡単にまとめたもの）を授業者が作成・配付し、次回の授業に生かす。（授業後１週間を目安に）

（２）校内研修

・可能な限り、全ての研究授業に外部講師を招聘し、課題の共有と教員個々のスキルアップのための研修を行う。

（３）先進校視察

・県内外の先進校を視察し、学んだことを研究に生かす。（オンラインでの参観も含めて）

（４）研究紀要の作成

・授業研究会で実践したことを研究集録にまとめ、次年度の研究に生かす。

・実践を振り返って、研究授業だけでなく、その後の単元や他教科の学習でも見られた子どもの成果や課題をまとめる。

研究の計画			
	日程	予定	内容
	４／　４（木）	研究推進委員会①	研究概要、
	４／１６（火）	研究全体会①	研究概要、形式提案、グループ討議
	４／２３（火）	研究推進委員会②	研究の方法、日程、授業研の進め方
	６／２４（月）	授業研究会　　８回 ・構想の会 ・事前研究会 ・事後研究会（全員）	６年　社会
	７／　１（月）		３年　算数
	７／　８（月）		２年　国語
	９～１０月		こまくさ１組　生単
			３年　国語
	１１～１月		５年　外国語
			１年　国語
			こまくさ２組　国語
	１月中旬	研究推進委員会③	
	１月中旬	研究全体会②	研究のまとめについて
	１月下旬	研究紀要原稿締め切り	
	２月	研究全体会③	今年度の振り返り、紀要丁合
	２月	研究推進委員会④	次年度の方向性、役割等
	３月	研究全体会④	次年度に向けて

＜様式＞

学校名	山形市立蔵王第三小・第二中学校 山形市蔵王温泉字丈二田７２７番地 TEL６９４－９０４２　FAX６９４－９３７３	校　長	三浦　浩子
		研究主任	齋藤　健広

研究主題	蔵王で学びを深め、未来を切り拓く子どもの育成 ～資質・能力を育成し、学習や生活の場で活用・発揮できる授業づくり～ ＜５年次＞

研究主題設定の理由

本校では、学校教育目標「賢く　強く　たくましい　児童生徒の育成」を掲げ、「確かな学力の育成」と「蔵王の未来を考える教育活動の充実」をめざし、感性を磨く体験・交流活動等を推進している。

本校の子どもたちは、素直で何事にも一生懸命に取り組むことができ、極少人数であるため教員の目が届き易く、個に応じた指導が可能である。しかしながら、解決策に困った際に自らの視点を広げきれず、思考を深める機会が少なかったり、耐性の弱さを見せたりすることがある。児童生徒の主体性を引き出し、自ら課題を見つけて粘り強く学ぶ姿、少人数であっても、見方・考え方を働かせながら協働的に学ぶ姿を目指したい。

そのためには、個々の児童生徒の育成すべき資質・能力を明確にし、教員が丁寧に見取ったり吟味したりすることで、一人一人の興味・関心や理解の仕方に寄り添った指導を工夫することが大切である。また、児童生徒自身も自己を振り返り、自己理解を深めながら主体的に学ぶ力を付けていくことが重要であると考える。

本校は、蔵王温泉という世界屈指の観光地にあり、豊かな自然に恵まれ、地域の方々の協力体制にも恵まれている。また、他校では想定しにくいような、個がやりたい課題を追究したり教員がその思いに寄り添ったりすることが可能な学校である。ふるさと蔵王（もの、こと）の素晴らしさや地域（人）の願いを体感し、児童生徒の「見方・考え方」を働かせて、将来にわたって活用する力をつけていきたい。そして、蔵王ならではの学びを深め、主体的に学習する児童生徒を育成したいと考え本主題を設定した。

研究の目標

学校教育目標　賢く　強く　たくましい　児童生徒の育成
「含英」の建学の理念の下、「いのち輝く人間」として、故郷蔵王温泉を愛するとともに、国際的な視野で未来を創造する

「確かな学力の育成」「蔵王の未来を考える教育活動の充実」

めざす児童生徒の姿

- 身近なくらしの中から課題に気付き、主体的に学んでいく児童生徒
- 課題の解決に向かって試行錯誤しながら、粘り強く挑戦する児童生徒
- 見方・考え方を働かせながら、協働的に学ぶことができる児童生徒

【学校研究】　蔵王で学びを深め、未来を切り拓く子どもの育成
～資質・能力を育成し、学習や生活の場で活用・発揮できる授業づくり～

感性を磨く体験・交流活動の推進

- 育てたい資質・能力を明確にし、授業展開に生かす
- 個の主体性を生かし、個別最適な学びになるように工夫する
- 生活科や総合的な学習の時間、各教科において、地域の素材を活かした学習材を発掘する

研究の内容

＜個別最適な学びの推進＞

- 指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定

＜協働的な学びの充実＞

- 多様な他者と協働しながら、よりよい学びを生み出す

＜少人数で学ぶメリットを生かす＞

- 個々の思いや願いから課題をもつことができる
- 一人一人が考えを表現することができる
- 子ども主体の対話による学びの広がりや深まりが期待できる

＜実現可能なことに目を向ける＞

- フットワークの軽さを生かした地域学習材の発掘
- 訪問型（対面的）交流学習・人との関わり
- 遠隔地とオンライン交流学習・ICT の活用

研究の方法

（１）小中の校種を交えた複数教員参観型の授業参観期間を実施する。

① 学校グランドデザインをもとにして、各授業者が「私の研究シート」を作成する。授業研一週間前に研究主任に提出する。（一週間前に提示するのは、１研究テーマ、２児童生徒の実態、３育てたい資質・能力、４単元計画まで）

② 小中併設校の特徴を生かし、小中教員がお互いの授業を参観する。

③ 授業参観期間を２学期（８月～１２月）に設定する。

④ 授業者は、年間１回以上の授業提供をする。（複数回も可）

⑤ 参観者は、各授業者の授業研を１回以上参観する。（複数回も可）

⑥ 事後研は短時間（１０～１５分程度）を基本とし、育てたい資質・能力、個別最適な学びの場面、協働的な学びの場面についての意見を交流する。

⑦ 事後研後、意見交流後の教員間の気付きやイメージを記入しても可。枠入りの大判用紙に貼り、分類・整理・掲示する。蔵王三小・蔵王二中の資質・能力系統表に追記する。

⑧ 「私の研究シート」は、別紙参照。

（２）校内研修会を開き、児童生徒のよさや課題を焦点化する。外部講師を招いた研修を行う。

（３）蔵王に関して取り扱った学習材があれば、授業者が簡単な記録を残し、次年度につなげる。

研究の計画

期日・時期	内　　容
４月　３日	第１回研究推進委員会（今年度の研究について）
４月　３０日	第１回校内研究会（今年度の研究について）
５月　～　７月	外部講師を招き、普段の児童生徒の授業の様子をご覧いただく。
７月　２９日	第１回校内研修会（外部講師による講義・演習）
８月　～　１２月	授業参観期間 ＊授業参観期間の他にも見てほしい授業があれば、授業参観の場としても可。
１１月　２５日	第２回研究推進委員会（研究のまとめ、資質・能力系統表について）
１２月　１３日	第２回校内研究会（研究のまとめ、資質・能力系統表について） ＊個人研究の一年間の成果等の交流・話し合いを兼ねる。
２月　１７日	第３回研究推進委員会（来年度の研究計画について）
３月　１０日	第３回校内研究会（来年度の研究計画について）

＜様式＞

学校名	山形市立南山形小学校 山形市大字松原字東河原１８８番地 ＴＥＬ ６８８－２４３０ ＦＡＸ ６８８－９０４３	校　長	沼澤　聡
		研究主任	朝倉　諒
研究主題	主体的に学びを求め、互いに認め合って生活する子どもの育成（２年次）		
研究主題設定の理由	社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0 時代」の到来、新型コロナウイルス感染症によって医療・教育・経済等の問題が引き起こされたことを代表する「予測困難な時代」において、一人一人が自ら考え、判断して問題を解決していく主体的な態度が求められている。また、一人ひとりの個を尊重し、様々な価値観を共有しながら課題を乗り越えていく協働的な態度も求められている。 このような社会的背景を踏まえ、本校では、これからの時代を生き抜くことができる子どもたちを育てるために、重点目標として「主体的に学びを求め、互いに認め合って生活する子ども」を設定している。この達成のためには、具現化への方策が明確であることに加え、教職員のベクトルが同じ方向を向いていることも重要であると考える。従って、今年度は学校教育の重点目標＝研究主題とし、よりシンプルに、教職員が目指す方向性を一致させて校内研究に取り組むこととした。 本校の子どもたちは、とても素直で、前向きに学校生活を過ごしている。また、コロナ禍が終わり、関わり合いが増えたことにより、話し合うことの重要性や楽しさを感じ取る姿が少しずつ見られるようになってきている。一方で、自分から進んで学ぼうとしたり自信を持って表現したりすることが苦手な子どもが多く、仲間との違いを受け入れることができない場面も見られる。そこで、育成したい資質・能力を『主体性』と『協働性』とし、これらを柱に重点目標（研究主題）に迫ろうと考えた。昨年度、職員間での主体性と協働性の捉え方が曖昧だったという反省を踏まえ、今年度は育成したい資質・能力を下記のように設定し、より具体的に捉え、研究に取り組んでいくことにした。 主体性…○自ら問題を発見し、課題を設定し、進んで解決しようとする力 ○粘り強く取り組み、学びを生活に生かそうとする力 協働性…○相手のよさや苦手なことも、互いに認め合う力 ○思いや考えを伝え合いながら、よりよい方法を生み出していく力		
研究の目標	育成したい資質・能力の主体性と協働性を柱として、日々の授業づくりを行いながら、授業改善・授業力の向上を目指す。		
研究の内容	**（１）日常的な授業実践** 子どもの思いに沿った単元構成や主体性と協働性を育成する単元のあり方などについては、日々追究し、日常的に子どもの成長を目指して実践する。また、授業だけではなく、学校行事、委員会活動やクラブ活動、たてわり班活動、清掃など教育課程全体で子どもを育てていく。 **（２）学級カリキュラムマップの作成** 学級経営案と学級カリキュラム、両方の性格を持つカリキュラムマップを作成する。「Ａ３」１枚にまとめ、つけたい資質・能力が育まれたのか可視化できるようにしたい。また、定期的に更新し、ＰＤＣＡサイクルをしっかり回していくものとする。		

（３）校内授業研究会

校内授業研究会を通して、教師の授業力を高め、日常の授業の充実・改善に生かしていく。研究授業は学級経営の中核となり、重点に迫りやすい教科「国語」「算数」「生活・総合」から決定して実践を積み上げる。

①大研…今年度は、上学年４回、下学年２回の計６回とする。全員が参観する。

②事前研究会…学年で構想し、各学年部で指導案を検討する（下学年部会は１～３年、すぎのこ学級、副教務とし、上学年部会は４～６年、すぎのこ学級、教務主任とする）。事前研の日程は、研究推進委員と教務主任で調整する。

③事後研究会…主体性と協働性の育成を実現する授業のあり方について多角的な見方から迫っていけるようにする。外部講師を招聘し、指導を仰ぐ。

④研究のまとめ…授業者以外の教員がまとめ、次の研究授業や日々の授業づくりに生かせるようにしていく。

研究の方法

授業構想（学年で）
・授業者の思いや授業構想の共通理解
・大まかな単元の指導計画や本時の展開の検討

↓ **指導案作成**

指導案検討（事前研）（上下学年部で）
・単元計画、本時の目標・学習活動・評価の一貫性、資質能力を育てるための手立てや工夫が適切か検討

↓ **指導案修正➡指導案完成（１週間前まで）**

授業研究会（全員参観）
・育成する資質能力を中心に、子供たちの主体的な学びの姿を見取る。
※授業記録や写真は学年部で分担

↓

事後研究会（全員参加）
・子供の学びの姿を中心に、手立てや工夫について
・重点や資質能力、カリキュラムマップと授業との関連について

↓

研究だより「東雲」発行
授業者の振り返り、授業研での学びをこれからの日々の授業にどう生かすか、お互いの授業力の向上につながるように、成果と課題をまとめる。（学年部で発行担当を決める）

研究の計画	月	校内研究全体会	大研(下学年・上学年)
	4	15 日（月）研究推進委員会① 30 日（火）研究全体会①	
	5		
	6		24 日（月）大研①４－１
	7	3 日（水）研究全体会② （授業研・事後研） 11 日（木）研究推進委員会② 22 日（月）研究全体会③	3 日（水）大研②２－２ 17 日（水）大研③４－２
	8		
	9		6 日（金）大研④５－１
	10		
	11		6 日（水）大研⑤１－１
	12	5 日（木）研究全体会④（授業研・事後研） 10 日（水）研究推進委員会③ 23 日（月）研究全体会⑤	5 日（木）大研⑥６－２
	1		
	2	3 日（月）研究推進委員会④ 17 日（月）研究全体会⑥	
	3		

＜様式＞

学校名	山形市立みはらしの丘小学校 山形市みはらしの丘三丁目４番地 TEL　023-689-0181 FAX　023-688-2333	校　長	髙橋　和久
		研究主任	木村　彩
研究主題	自ら考え、深く学び合う子ども（3 年次） ～ICT の効果的活用と資質・能力の育成～		
主題設定の理由	本校では、教育目標を次のように掲げている。 夢と感動　勇気と感謝　みはらしの丘の未来を創る 生きる力にあふれる子どもの育成 現在みはらしの丘小に通う子どもたちが、成人し社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎える。生産年齢の人口減少、グローバル化の進展、絶え間ない技術革新等と、変化の予測が困難な時代になる。このような社会の変化に受動的に対応するのではなく、主体的に関わり自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となってほしいと考える。そのためには、資質・能力を確実に育成することのできる校内研究にしていきたい。多様な子どもたち一人ひとりに、より確実に資質・能力を身につけるには、ICT を活用した個別最適・協働的な学びが有効である。また、ICT を効果的に使うことで、学びの質が高まり、深い学びにつながっていくことが期待される。そして、様々な問題において他者と協働し、その力を発揮して未来を切り拓いてほしいと考える。		
授業づくり視点	◆視点①【質の高い学びにつながる課題の設定】 ・子どもたちが見通しをもって取り組むことができる学習課題を設定する。 ・生活や学習の中で自ら気づいたことや多様な問いを受け止める。 ◆視点②【深い学びにつながる協働的な学び】 ・ICT を活用した協働的な学び合いのコーディネートをする。 ・子どもたちが、自分で考えを交流する相手を見つけ、自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりすることで、考えを広げたり深めたりする。 ◆視点③【主体的な学びにつながるふりかえり】 ・１つの単元を通して学びを連続させたり、深めたりできるよう振り返りの時間を確保する。 ・１時間の中で何がわかったか、次の時間はどんなことを知りたいかなどを振り返りの時間に残すことで、１時間での自分の変容や学びの習得を残していく。 ※必ずしも１単位時間の授業の中で全てが実現されるものではないので、単元などの学習のまとまりの中で ICT をどのように活用できるか検討していく。		

校内研究の方法	（１）研究授業について ① 企画授業研究会（全体研）年３回 ・学年部１名が授業を行う。（教員全員が参観する。） ・事前研は学年部で行う。 ・事後研は全教員で行う。 ・市内の学校に案内を送り、情報発信をする。 ・学年部研授業者は、授業前に「授業の視点」を作成・配付し、研究の視点に沿って授業を見合えるようにする。 ・外部から講師の先生を招き、指導していただく。 ② 学年授業研究会（学年研）　各学年・支援学級 ・計画を立てる ・一覧表にする ・月暦に載せる ・学年部研を行わない教員が授業を行う。（学年の教員全員が参観する。） ・事前研、事後研は学年と希望者で行う。 ・支援学級は、事前に参観することを担任に伝え、必要に応じて参観する。 ③ 参観について ・担当の学年部研、学年研のほかに、他学年部の授業を一つ以上参観するようにする。 （２）資質・能力と教科について それぞれの教科の資質・能力の育成を目指しながら、学習の基盤となる資質・能力として、言語能力と論理的思考力、情報活用能力の育成に重点を置く。 研究は教科や単元をしぼらず行う。 （３）まとめ方について 「研究通信」を作成し、研究集録に載せる。３つの視点について話し合う。 （４）校内研究全体会・研修会 ５月　２日（木）第１回全体会　校内研究の計画と進め方（概要をもとに） ５月　23 日（木）校内研修（昨年度までの研究の交流） ６月　20 日（木）第１回全体研 ７月　29 日（月）校内研修 QU １１月　７日（予定）第２回全体研 １１月　28 日（予定）第３回全体研 12 月　24 日（火）第２回全体会　今年度の研究の成果と課題を確かめる。 ２月　18 日（火）第３回全体会（仮）今年度の成果と課題、来年度研究について 〇教師のニーズや教育課程等に併せて、ミニ研修会を随時行う。 〇月一回程度、研究推進委員（必要なら情報主任も）が集まり、 実践の共有・発信と情報教育の推進の話し合いを行う。

研究計画と目指す子どもの姿	【１年次】 〇校内の体制づくり ・情報主任も加わり、研究推進委員会で校内の ICT を使って何ができるか検討する。 〇カリキュラムの検討（教科部会・各学年） ・前年度のカリキュラムとタブレット使用状況をもとに、ICT を効果的に活用できそうな教科や単元、学習内容を探る。 各教科の授業 総合的な学習の時間…ICT を活用した地域学習 〇校内研修会の設定 ・先進校の実践事例について（カリキュラム・マネジメント中心に） 〇学年で育成をめざす資質・能力の重点化 ・資質・能力（言語能力・論理的思考力・情報活用能力）を重点として取り組み、ICT を取り組む。 〇指導案検討（ICT の活用を明記する） ☆学びの中で ICT を日常的に取り組む。 【２年次】 〇実践を職員間で共有し、活用場面を広げる。 ・ICT を活用した単元を学年カリキュラムに明記する。 〇資質・能力を発揮・自覚させ、繰り返し育成する。 ・ICT の効果的な活用により、論理的思考・表現力を育成し授業を行う。 ☆ICT の活用と学びの幅が広がる。 【３年次】 〇学校で ICT の効果的活用場面についてまとめる。 ・３年間の取り組みを振り返り、効果的な活用場面と今後の可能性について話し合う。 〇学年で育成をめざす資質・能力の話し合いと振り返り ・ICT を系統化し、日常化していく。 ☆ICT をツールの選択肢の一つとして使い、学びに生かす。

＜様式＞

学校名	山形市立本沢小学校 山形市大字長谷堂 1111 の 1 TEL（023）688-2420　FAX（023）688-9044	校　長	黒　原　裕　一
		研究主任	志　田　修　一
研究主題	学びのつながりを意識して、 豊かな言語で表現する子ども ～　1　年　次　～		

研究主題設定の理由

≪社会的背景≫

産業社会から知識基盤社会への構造転換

・「正解」よりも「最適解」を場面に応じて自力で、または多様な他者と協働して生み出すことが求められる。
・国連が示した「SDGs」を達成するために、持続可能な社会の担い手を育成する教育への取り組みが必要となる。
・コンテンツ（内容）・ベイスの学習観からコンピテンシー・ベイスの教育への転換
・学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学びの実現」が求められている。
・令和３年中教審答申において、新しい時代の学校教育の姿として「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」が提言された。
　→「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることが求められる。

≪これまでの研究≫

・「地域の学びを生かし、自ら考え、成長し合う子どもの育成」というテーマの下で生活科・総合的な学習の時間の実践を行ってきた→探究的な授業の積み重ね

→子どもたちが課題を自分事としてとらえ、その解決に向けて粘り強く取り組んだり、友達や地域の方々と協働して成果を生み出したりするような姿が見られるようになってきた。
→教師の側としては、育てたい資質・能力について丁寧に吟味を重ね、カリキュラムマネジメントと連動させることによって、資質・能力の育成を図ってきた。

★「深い学び」の追究、「ふり返り」の一層の充実
★教科の学習指導における探究的な学びづくり
★教科の学習指導における主体性の追究や対話的な学びの研究へ

≪子どもの実態≫

・自分のもった考えや思いを他者に適切に伝え切れているのだろうか。
・教科の中または単元の中だけで学びが完結してしまうような姿がある。
・言葉のやり取りが稚拙。
・安易に結論付け、他者との関わりで考えを深めるような場を有効に使いきれているのか。
・「学びがつながる」ように教師が導いてきた側面。
・学びの主体である子ども自身が学びのつながりを自覚できているのか。
・弱い部分をもっている子どもの姿。

★打たれ強い子どもの姿を求めたい。　★考えを練り合い、高め合うことが難しい。
★自分で学びをつくっていくような主体性がほしい。
★様々な学びを教科として閉じるのではなく、生活にも生かそうとする姿が見たい。
★あきらめてしまい、粘り強く取り組むことが難しい。
★一部の子に任せきりで、自分で考えようとしない子がいる。
★自分の思いを、他者にわかるように伝えることが苦手な子がいる。

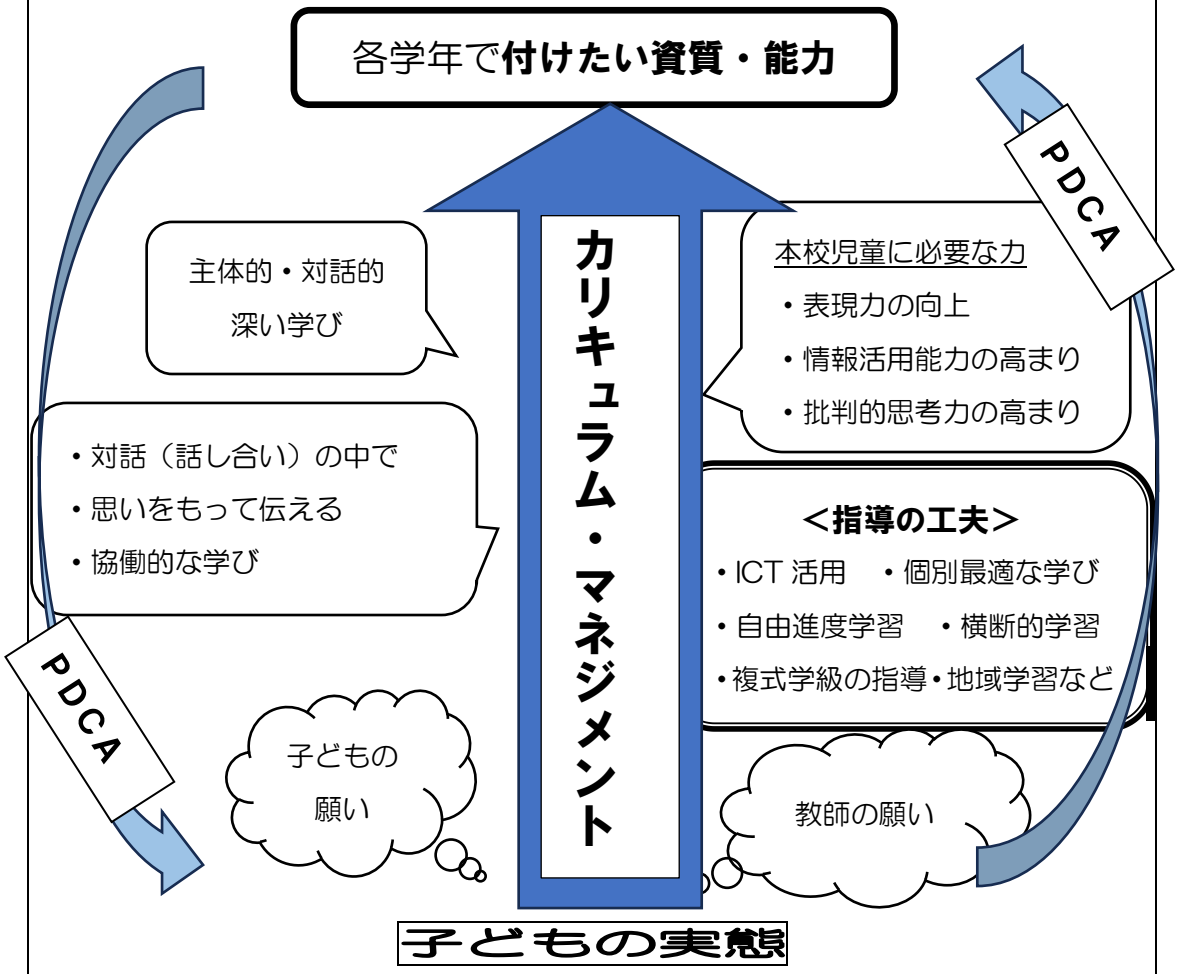
子どもは、どうなりたいと思っているのか、そこも確かめていく。

以上のような観点から今年度の研究主題を「学びのつながりを意識して、豊かな言語で表現する子ども」と設定した。

	「学びのつながりを意識する」（人と人とのつながり　友達の考え、地域の人の思い、環境や情報） ①生活科・総合的な学習の時間に発揮されたり、課題解決のために必要とされたりする力が、教科の学びによって培われていることに気づく。　【教科→生活科・総合的な学習の時間】 ②生活科・総合的な学習の時間で身につけたことが、教科の学びをさらに充実させることにも目を向ける。　【生活・総合的な学習の時間→教科】 ③既習事項を用いることで未習の内容にも対応できる。　【既習→未習】 ④学んでいることが他の単元や教科、さらには実生活の中へと広がっていくことを自覚できる。 【教科→教科】【教科→生活】 「豊かな言語で表現する子ども」（初年度は、「話す・聞く」の姿に焦点をあてる） ①失敗や間違いを恐れずに、自分の思いや考えを相手に伝えよう・表現しようとする姿 ②友達の思いや考え、地域の方の願いを、必要感をもって聞こうとする姿 ③根拠をもって主張しようとする姿 ④資料を効果的に活用し、自分の考えが伝わるように表現を工夫する姿
研究の目的	①　教科の学習指導における探究的な学びづくりを進める ・生活科や総合的な学習の時間を中心として取り組んできた探究的な授業づくりを、国語科での学びを意識しながら、各教科の授業で模索していく。 ・子どもが学びのつながりを意識できるように、身につけたことを自覚させていく。 ②教師の授業力の向上と授業改善を図る ・本校の子どもの課題を解決するために授業実践を行っていくが、授業の腕を磨くことが必要である。現行指導要領で求められている授業が具現化されているかを確かめながら進めていく。
研究の方法	①日々の授業実践 ・研究テーマの理解にもとづいて、日々の授業を重ねていく。 ②授業研究会→国語科を窓口として ・提案授業を全員で見て気づいたことを話し合ったり、講師を招いてアドバイスをいただいたりすることで、一人一人の日々の授業実践に活かしていく。 ③カリキュラムマネジメントの活用 ・生活科・総合的な学習の時間を中心としたカリキュラムマネジメントを作成し、年間を通して意図的・計画的に資質・能力の育成を図っていく。 ④視察・外部講師の招聘・研究会への参加 ・校外の実践を視察したり、各種研究会に参加したりして、学んだことを紹介し、校内で共有する。 ・外部講師を招聘し、校内研究を充実させる。
研究の計画	＜研究全体会＞ ５月　２日（木）･･･今年度の研究の提案 鈴木貴子先生をお招きしての講話とカリマネ作成 ７月２９日（月） １２月　９日（月） 鈴木貴子先生をお招きしての研修会 内容については、相談の上、決定する。 ２月２８日（金）･･･今年度の反省と次年度について ＜授業研究会＞ ６月２４日（月）…総合的な学習の時間の学びと国語科の学びをつなぐ提案授業 １０月２４日（木）…ICT を用いる提案授業 １１月２６日（火）…鈴木貴子先生による授業→６年生を対象とした中学校とのつなぎの授業 １２月　５日（木）…「単元内自由進度学習」の提案

<table>
<tr><td rowspan="2">学校名</td><td rowspan="2">山形市立西山形小学校</td><td>校　長</td><td>山　口　雅　和</td></tr>
<tr><td>研究主任</td><td>加　藤　孝　子</td></tr>
<tr><td>研究主題</td><td colspan="3">自ら学びに向かう子どもの育成（1年次）

～カリキュラム・マネジメントを軸とした指導の工夫を通して～</td></tr>
<tr><td>研究主題設定の理由</td><td colspan="3">本校は「たくましい心と体をもち，進んで学び，郷土を愛する子ども」を教育目標に掲げ，短・中期的にめざす具体的な子どもの姿である「これからの社会の担い手として必要な学力や資質・能力をもち，西山形地区に生まれ育ったことを『誇り』に感じている子ども」の実現に向けて教育活動に取り組んでいる。
昨年度まで，「主体的に学ぶ子どもの育成」を研究主題に掲げ，児童の主体的に学ぶ姿をめざして，様々なアプローチの仕方や学習の工夫を図りながら取り組んできた。また，本校児童の課題の一つである表現力にも焦点をあてながら，各学年の「付けたい資質・能力」の育成に向け，日々の取り組みを大切にしてきた。
こうした取り組みを通して，少人数の良さを生かして互いに意見を出し合いながら協働的に学び合う姿が見られたり，学校内外における様々な人的・物的な協力を得ながら学習を進めることで，子供たちは意欲的に取り組み，思いを膨らませながら学習に取り組んだりすることにつながった。これは，半期及び年間の見通しをもちながらカリキュラムをマネジメントし，学習の計画・準備・実践にあたることができたことが大きいと考える。
一方，少人数でのかかわりの良さがある反面，個々の様子においては，周りとは異なる考えでも臆せず表現したりすることや，様々な考えを受け取りながら批判的思考をしたりすることに課題が見られた。こうした課題をしっかり把握し，発達段階に応じた付けたい資質・能力を系統的に捉えて実践していくことができるよう，学校全体としての資質・能力をさらに具体的なものにしていきながら，カリキュラム・マネジメントに活用できるようにしていくことが有効であると考える。
そこで今年度は，昨年度までの取り組みを継承しつつ，研究主題「自ら学びに向かう子どもの育成」を掲げ，友達・教師・地域の人達とのかかわりを大切にしながら，進んで課題を見つけたり新たに挑戦したいことに取り組んだりする意欲をもつなど，自ら学ぶ生き生きとした児童の姿を育てていきたいと考える。そのために，学習活動の軸となるカリキュラム・マネジメントを計画的且つ日常的に行い，日々の授業の中で様々なア</td></tr>
</table>

研究主題設定の理由	プローチ（横断的学習，ＩＣＴ活用，地域学習，自由進度学習など）をした授業づくりや指導の工夫を図っていく。そして，学校全体としての児童の実態や付けたい資質・能力を系統的に捉えて取り組んでいけるようにしていく。また，本校の教育力の一つとなっているコミュニティスクールをさらに生かし，地域とのつながりを大切にしながら，児童自身が地域及び学校の一員としての自覚や，地域・学校への思いを高め，西山形地区に対する思いを深めていくことができるようにしていく。
	【研究の柱のイメージ図】 
研究の重点	・様々な学習のアプローチの仕方（自由進度学習・ＩＴＣ活用学習・複式学習の指導など）について教えていただいたり，研修会を開いたりしながら，学びを“吸収する”時間をとっていく。そして，学んだことを実践に生かしていく。（児童の思いを大事にする一方，教師のやりたいことが実践できるような研修を行っていく。） ・日常的な取り組みにおいて，随時話し合いの場をもち，共有していく。

研究の内容	１．昨年度の取り組みの継続・深化 ①カリキュラム・マネジメントのさらなる充実 ②「見合う授業」を中心とした学び合う場の設定 ２．「自由進度学習」と「複式学級の指導」にかかわる研修 ３．「西山形小学校６年間で育成を目指す『全ての学習』で必要な資質・能力系統表」の整理・作成
研究の方法	Ａ　今，求められている教育のあり方や実践についての研修を設定し，日常の実践に生かしていくことができるようにする。（時間の確保において留意していく。）併せて，全体の授業研究会では，最新の教育情報を得る研修の場とする。 Ｂ　カリキュラム・マネジメントの充実を図るため，作成の時間を確保するとともに，地域及びその他の教育資源の活用が図れるよう，地域連携担当者との連携を図っていく。学期ごと修正しながら，より良い学習活動を設定していく。また，個別最適な学びや複式学級の指導法などを学びながら自ら学ぶ意欲を高めていくなど，工夫した学習活動の展開を図っていく。 Ｃ　日常の授業を互いに見合う機会をより多く設定し，日々子供の実態や成長を捉えながら，めざす子供の姿に向けた授業づくりを行う。（カリキュラム・マネジメントの計画をもとに，重点的に取り組む学習活動等を設定し，「見合う授業」及び「授業研究会」の見通しをもつ。） Ｄ　「見合う授業」後には，参観者による話し合いの場をもち，各学年の「資質・能力」の向上に向けた手立ての具現化から，その有効性について，主に子どもの姿から語り合う。

学校名	山形市立村木沢小学校 山形市大字村木沢６０４６番地 TEL　023-643-2240　　FAX　023-645-8606	校　長	村山　理香
		研究主任	江口　和輝

研究主題

学びを深めるために
～自律して学び進める子供を目指して～

研究主題設定の理由

昨年度は、『学びを深めるために～自立的に学び進める子供を目指して～』を研究主題として、「自立」を１つのキーワードに掲げ、子供たちが主体的に課題を見出し、自分たちの言葉で考えをつなぎながら学習を進めていく姿を目指してきた。「子供が主体的・協働的に取り組む中で、学びを深めていく授業の工夫」を重点とし、各教科の特質に応じた見方・考え方を働かせた学びが大切であるということを教師間で共有して、授業研究会や日々の授業から効果的な手立てを探ってきた。さらに、昨年度からの複式学級開設に伴い、ガイド学習を取り入れるなど研修を行ってきた。

昨年度の研究の振り返りでは、「既習を意識して他教科や日常生活等とつなげることで、子供たちが自分で学習をつないでいこうとする意識が高まった。」「子供たちに考える視点を具体的に提示することで、感じたことを自分の言葉で言ったり、友達への声がけがより的確になったりした。」「ノートや教科書に考えを書き込むだけでなく、タブレットを使って打ち込むなど、情報整理の方法が多様化したことで、子供たちが自分の考えを見直したり再確認したりしやすくなった。」など、自立的に学び進める子供たちの姿が成果として挙げられた。

一方で、「子供たち自ら学習課題を設定したり、進んで課題に向かったりするような工夫がさらに必要である。複式学級では、子供たちが受け身にならず自分からやってみたいと思える課題提示が必要である。」「子供同士で声をつなぐ、学びを深めたり広げたりする場で揺さぶりをかけるための教師の出ができるようにしたい。」などの課題も挙げられた。課題から見えたことは、子供たちが自分の意志・考えをしっかりともち、自己決定・自己調整しながら学び進めることが必要でないかということだった。

そこで今年度は、子供たちが自分の意志・考えをしっかりともち、自律して学び進めることを目指して研究を行っていく。そして、その学びを支えたりコーディネートしたりできる教師の姿を目指していく。「自律して学び進める」とは、どのような姿なのかを子供たちの姿から語り、共有し、集積していく。教師が子供たちの言葉をよく聞き、子供同士の言葉をつなぎ、子供と教師が一緒につくる授業を目指していく。

研究の重点とめざす姿

１　研究の重点

◇子供が主体的・協働的に取り組む中で、学びを深めていく授業の工夫

２　研究でめざす姿

①めざす子供の姿

◇自ら学び、友達と学び、学びを他教科や日常生活等とつなげたり、次の学習課題を見出したりすることができる子供

◇友達の意見や考えを聴き、根拠をもって自分の考えを表現したり、言葉でつないだりすることができる子供

◇多様な考えや様々な情報をもとに、自分の考えを見直したり再確認したりすることができる子供

（下線･･･村木沢小　育成すべき資質・能力）

②めざす教師の姿

◇子供たちの自律した学びを支えることができる教師

◇子供たちの学びをつなぐためのコーディネートができる教師

<table>
<tr><td>研究の視点と内容</td><td>

3　研究の視点

◇学びを深めるための手段や手立て

・既習とのつながり　・学習ツール（図・式・タブレット等）の活用

・教師の発問　・ワークシートの工夫など

◇自律した学びを行うための手段や手立て

・教師の「待ち」と「出」を意識した授業計画　・ICT の活用

・個の学習と協働的な学習の充実　・単元構成の工夫など

4　研究の内容

・研究主題に、独自の発想、構想で向かっていけるように、学びを深めたい教科、道徳及び外国語活動、合同学習等も積極的に研究し、実践する。

・【村小スタンダード】を共通のものとし、研究の日常化を図っていく。そのうえで、いろいろな視点・方法から研究、授業等を行い、各自で研究主題へ迫っていく。

【村小スタンダード】

① 「課題」「まとめ」を明確にし、1 時間の授業が見える板書

② 学びを自覚できる、次時の学習につながるような「振り返り」の視点の工夫

・各教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせた学びを大事にする。指導案に具体的な「見方・考え方」を働かせている子供の姿を記述し、「深い学び」にさらに迫る。

・子供たちの「学びが深まっている姿」「自律して学ぶ姿」とはどんな姿なのか教師間で共有し、研究でめざす子供の姿に迫る。子供たちの自律した学び、さらには深い学びを目指していく。

</td></tr>
<tr><td>研究の方法</td><td>

・研究の日常化を図る。

→研修や日々の授業の中で「学びが深まった姿」「学びを深めるために効果的だった手立て」「自律して学ぶ姿」などを話題にし、集積していく。

→教師間で共有する場を設ける。

・授業研究を一人一回行う。授業者は「研究のまとめ」を発行する。

・年度末には研究成果、反省を受けて、次年度の研究につなげていく。

</td></tr>
<tr><td>研究の計画</td><td>

4 月	研究全体会（校内研究内容の検討） 校内研修会：「学年カリキュラム検討」「村木沢を知る」
6 月～12 月	授業研究会
8 月	校内研修会：「学年カリキュラム検討」「全国学調・学力テスト分析」
12 月	校内研修会：「学年カリキュラム検討」 「本校の児童のよさを生かし、課題を克服するために」
1 月～3 月	研究のまとめ作成・発行
2 月	研究推進委員会 研究全体会（研究の振り返りと次年度の研究に向けての協議）

</td></tr>
</table>

＜様式＞

学校名	山形市立大曽根小学校 山形市上反田２７８番地 TEL 643－2134　　FAX 645－8614	校　長	土　田　　正　路
		研究主任	高　木　　千　鶴
研究主題	自立した学び手の育成（２年次） ～子どもの自己調整力を育む授業づくりをめざして～		

研究主題設定の理由

本校では、「大曽根に誇りをもち、未来を拓く子どもの育成」を学校教育目標に掲げ、学びを生かして、地域をつくる人に成長してほしいという願いを込め、次のような子どもの姿を目指して教育活動を行っている。

目指す子ども像
主体的に考え　学び合う子ども　　（知）
心が通い合う子ども　　（徳）
仲間と鍛え合う子ども　　（体）

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間のない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、社会の在り方が劇的に変わる「Society5.0」の到来や新型コロナウイルス感染症などの先行き不透明な「予測困難な時代」となっている。このような時代にあって、学校教育には、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育成することが求められている。

そうした社会的背景の中、本校では令和２年度より、３年間にわたり、研究主題「確かな学力を育む授業づくりをめざして～新しい時代に必要な資質・能力の育成と学習評価の充実～」のもと、「指導と評価の一体化」を重視し研究を進めてきた。特に、学級カリキュラムを基盤とし、日々の授業において評価・改善を繰り返しながら、子ども一人一人に確かな学力を育成することを目指してきた。

評価規準を子どもの姿で具体化することにより、学習の成果を適切に捉え、改善が必要な指導過程や具体的な手立ての検討を行い、深い学びの実現に向けた授業改善を進めることができた。習得した知識や技能を多様な場面で活用・発揮する姿や、根拠を明確にしながら自分の考えを表現する姿が見られるなど、子どもたちは学校として育成を目指す資質・能力を着実に身に付けてきている。

一方で、学習意欲が向上し、見通しをもって学習に取り組む姿が見られるようになったものの、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組むまでに至っていないことが課題として見えてきた。国としても２０２０年代を通じて実現を目指す学校教育を「令和の日本型学校教育」とし、その姿を「すべての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学び」として、多様な子供たちを誰一人取り残すことのない学校教育の実現が求められている。

以上を踏まえ、昨年度は、研究主題を「自立した学び手の育成～子どもの自己調整力と粘り強さを育む授業づくりをめざして～」と設定し、前年度までの研究の成果を生かしつつ、下記の２点を重点にして研究を進めてきた。

① 自己決定できる単元の構想
・子どもたち一人一人の興味・関心や学習スタイルが最大限許容され、発揮できる単元を構想する。
（課題選択学習、順序選択学習、課題設定学習、単元内自由進度学習、フリースタイルプロジェクト等）

② ICT を効果的に利活用する。

その結果、「授業の主体者は自分たちである」という意識で学習に取り組んだり、ＩＣＴを活用して授業を進めたりすることができる児童が増えた。また、教科書を手がかりにして考えたり友だち同士で教え合ったりする姿、解決方法を友だちに説明しているうちに他の方法があることに気付き、新たな方法で解決しようと課題に取り組む姿なども見られた。しかし、自己の学びの変容をメタ認知し、次への学びにつなげられるふり返りができる児童はまだほとんどいない、ＩＣＴの利活用については個人差があるといった課題が残った。

	そこで、今年度は、より一層児童一人一人の学びに寄り添い、自己調整スキルをどのようにして高めていけばよいのか考え、サブタイトルを、「自己調整スキルを高める授業づくりをめざして」として、授業改善に取り組んでいきたい。
研究のねらい	自己調整の要素（『メタ認知』『動機づけ』『学習方略』）を基に授業改善に取り組むことで、自立した学び手を育成する。
研究の重点	① 自己調整学習チェックリスト（木村明憲監修『自己調整学習チェックリスト』発行所：さくら社）をもとに授業づくりに取り組む。 ② ICT を効果的に利活用する。（導入、展開、週末、まとめ等で）
研究の進め方	（１） 研究の方法 ・１学期　研究の方向性を全員で共有する。 研究授業を通して、互いの実践に学ぶ。 ・２学期　自己調整学習についての研修。 研究授業を通して、互いの実践に学ぶ。 ・３学期　研究授業を通して、互いの実践に学ぶ。 子どもの変容等をもとに実践の成果と課題を明らかにする。 （２）研究計画予定

	日　　程	内　　容
1	７月　　日（　）	授業研究：第６学年　佐藤　亨樹　　（社会）
2	８月３０日（金）	研　修　　講師：木村明憲先生　（自己調整スキルについて）
2	９月　　日（　）	授業研究：第５学年　佐藤　卓生　　（国語）
3	１１月　　日（　）	授業研究：第２学年　鏡　理恵　　（生活）
4	１２月　　日（　）	授業研究：第１学年　鈴木　恵里子　（音楽）
5	１月　　日（　）	授業研究：第３・４学年　高木　千鶴（国語）

学校名	山形大学附属小学校 山形市松波二丁目７－２ Tel ６４１－４４４４　Fax ６４１－８５９４	校　長	武田　重泰
		研究主任	佐藤　大将
研究主題	自ら問題解決を進める子ども＜３年次＞		

研究について

１　わたしたちの子ども観と目指していること

わたしたちは、これまでの研究を通して、「子どもは、事象（人・もの・こと）との関係の中でよりよい自分になりたいという思いや願いをもっている」と捉え、子どもの学びを洞察し、働きかけてきた。子どもの学びを洞察するとは、子どもの具体的な姿をもとに、少しでも子どもの内面に近付き、子ども理解を深めることである。また、これまでのその子どもの学びをもとに、これからの学びの可能性について見通しをもつことである。

子どもは、事象との関係の中で、思いや願いをもち、それを実現させる過程で出合う問題を様々な方法で解決しようとする。そして、事象に対する自分のとらえを更新していく。わたしたちは、このような子どもの歩みを「子どもの問題解決」と呼び、よりよい自分に向かうために必要なことであると捉え、大切にしてきた。

わたしたちが望んでいるのは、子どもが自ら問題解決を進めていくことができるようになることである。事象と出合った時に、自身の思いや願いに応じて様々に見方・考え方を働かせて事象に関わり、自ら問題解決を進める子どもを育てたい。そのような子どもが、持続可能な社会の創り手として、これからの時代を豊かに生きていくことになると考えている。そこで、わたしたちは、2022 年度から次の研究主題を掲げている。

「自ら問題解決を進める子ども」

わたしたちが考える「自ら問題解決を進める子ども」が身に付けている資質・能力については、「令和６年度山形大学附属小学校資質・能力系統表」（以下、資質・能力系統表）に整理している。

研究の具体的な内容

２　わたしたちの取り組み 2023 から見えてきたこと

（１）育みたい資質・能力と目の前の子どもの姿を往還しながら見つめていくことの価値

わたしたちは、資質・能力系統表をもとに、昨年度一年間の取り組みによって子どもがどのように育ったのか、どのようなところに課題があるのかについて子どもの洞察に基づく話し合いを行った。

全職員で育みたい資質・能力が共有されているため、子どもの育ちを話し合う際に同じ土台に立って話し合うことができた。そこから、教師の働きかけとして重視しなければいけない点なども話し合うことができた。次年度につなげたいこととして、次のことがあげられた。

＜「知識・技能」について＞

・子どもが、日々のくらしや遊びの経験からなんとなく知っていることを学びにつなげられるような働きかけをしたい。
・自分の考えや思いを伝える方法を子ども自身が選択できるようにするには、一つ一つの技能を高める必要がある。同時に、まとめたり綴ったりするよさを感じられるようにしていく必要がある。
・子どもに必要なのは、根拠と理由を使い分ける力ではなく、根拠や理由を明らかにして自分の考えを主張する力なのではないか。

＜「思考力・判断力・表現力等」について＞

・単元や授業で子どもが繰り返し試行錯誤できるような場と時間の設定は欠かすことができず、その時間があるからこそ、子どもが見付けたこと・分かったことから「なんでだろう」という新たな問いが生まれてくる。
・学習活動の目的（解決したい理由）が子どもの中で明確になっていると、問題解決を進めていくことができる。

・活動の中で学ぶたのしみを見いだし、自分を客観的に見る目を育てることで自己の変容をさらに自覚できるようにしたい。
・思っていることがあっても、表現できない姿があるのは、正解ではなかったら嫌だという気持ちの表れなのか。それとも、これまで何も言わなくとも周りがなんとかしてくれたという経験から他人事に感じてしまっているのかを考えていきたい。
・自分の考えはよく話すが、論理的に書いて伝える力をもっと育てる必要がある。また、授業の振り返りを書くよさを子どもと共有することができているだろうか。

＜「学びに向かう力・人間性」について＞
・子どもは思いや願いをもって取り組んでいるからこそ話したくなる。はじめから話している相手の話に興味をもつとは限らず、聞いてよかった、聞いてもらってよかったという経験を重ねることを大切にしたい。
・成功しないとゴールではないという、子どもの意識を変えていかなければいけない。失敗することで学べることがあるという前向きな気持ちを育てたい。
・問題解決の中で、目的・場面・相手などにもう一歩踏み込むエネルギーがほしい。そのためには、自己肯定感、自己有用感が必要になるのだろう。

このように、資質・能力系統表に照らし合わせて子どもの日々の姿を洞察することで、子どもにさらに育みたい資質・能力は何かが少しずつ明らかになり、教師の働きかけを問い直すこともできた。これが育みたい資質・能力と目の前の子どもの姿を往還しながら見つめていくことの価値だと考えている。これらを基に検討を進め、わたしたちは、令和６年度の資質・能力系統表を策定した。
令和６年度は、各教科・領域の実践や様々な行事、日々のくらしなど、教育活動全体で、系統表に示すどの資質・能力を育んでいくのかを明確にしていきたい。また、これらの教育活動を終えた後、実際には子どもにどのような資質・能力がどの程度育まれたのかについても丁寧に振り返りたい。これがわたしたちの働きかけの質を高め、子どもたちの資質・能力を高めることにつながると考えている。

（２）子どもの問題解決における見方・考え方ととらえの更新（概念形成）について
わたしたちは、子どもが見方・考え方を働かせて学ぶことは、各教科等を学ぶ本質的な意義に向かっていくことだと考えて実践に取り組んできた。継続した取り組みにより、各教科・領域における見方・考え方とは何か、それを働かせることでどのようにとらえの更新（概念形成）をすることができるのかについては、教科・領域部ごとに成果が現われてきている。本誌の「各教科・領域実践編」には、子どもが見方・考え方を働かせて学び、その歩みに合わせて単元を構成していったわたしたちの実践がある。このような日々の授業における地道な積み重ねが、子どもが各教科等を学ぶ本質的な意義に向かう問題解決を進めることとそれを支える教師集団を育てることになると考えている。
今年度も多くの実践に取り組んだ中で課題として出されたことは、子どもが本当に「自ら」問題解決を進めているのかという点である。子どもは確かに見方・考え方を働かせて問題解決を進め、とらえの更新（概念形成）を行うことができているとわたしたちは捉えている。しかし、教師の想定している問題解決の過程を受け身になって取り組んでいる子どももいるのではないか。わたしたちは、これまで以上に子どもが「自ら」力強く問題解決を進めるための働きかけを吟味する必要があると考えた。詳しくは次の（３）で述べる。

（３）子どもが「自ら」問題解決を進めたくなる環境を整え、「自ら」を引き出す働きかけができているか
昨年度、異学年でつくる学びの時間「みのりの時間」を初めて実施した。その中で６年生の班長、５年生の副班長を中心に自分たちで内容を決め、計画を立てて学習に取り組む姿が見られた。調理をする班、理科実験に臨む班、手作りのカードを用いて学校探検をする班など、子どもたちは様々な活動を創り上げていった。そのときの子どもたちの表情は生き生きとしていて、「自ら」問題解決を進める姿そのものだと捉えた。
わたしたちは、なぜこの子はそれに夢中になっているのか、なぜこれにこだわっているのかということをていねいに洞察することで、子どもが「自ら」問題解決を進めるときに必要な鍵となるもの、また、それを支える教師の働きかけの鍵となるものが見えてくると考えた。そこで、わたしたちは、子どもがより力強く「自ら」問題解決を進めることができるようになるために、以下のようなことを考えた。

・子どもが、自由度と遊び心をもって事象に十分に関わる時間を保障することができているか。子どもが身近に感じ、思いや願いを膨らませていくことができるような環境をつくる必要があるのではないか。
・友達と関わって学習を進める中で、それをやりたいと思えることも「自ら」問題解決に踏み出した姿である。そうした自分の思いや願いに気付けるよう働きかけをすることもわたしたちの役割である。
・子どもの遊びの中から学びにつながるものが出てくることが多い。その瞬間を見逃さない教師の洞察力を鍛える必要がある。
・自由度というのは何でもありの自由ではなく、事象との関わりを生みだす環境の中での自由度である。この環境をどうつくるかは単元の目標と単元計画などの教師の意図と大きく関わってくる。
・子ども発のものだけでなく、教師が出合わせたものであっても、それが子どものものになっていけばよいのではないか。
・どの学習でも、子どもが自分で選択したりつくったりする場が、「自ら」を生み出すきっかけになる。
・子どもが時間をかけて、自分が仲間と解決したいと思える課題を立ち上げられているか問い直したい。
・子どもが夢中になって学ぶきっかけやタイミングは人それぞれである。その子を洞察し、その子の心をくすぐる働きかけを考えられているだろうか。
・授業の振り返りから子どもの思考を洞察することに加え、授業中の子どもの事実（行動・言葉・表情・友達との関わり）を洞察するこちらの能力を高める必要がある。
・子どもに問題解決を急がせない単元計画を立てていきたい。子どもが自ら問題解決を進めて、とらえを更新するには多くの時間を有することを心がけたい。

わたしたちが日々の実践を振り返り感じたことを基に、2024 年度は、子どもが「自ら」問題解決を進めるために大切にしていきたいことを考えていきたい。

３　わたしたちの取り組み２０２４で大切にしたいこと

（１）育みたい資質・能力と目の前の子どもの姿を往還しながら見つめていくこと

わたしたちは昨年度の取り組みで見られた子どもの姿をもとに、「令和６年度資質・能力系統表」を策定した。これを土台に、今年度の学級カリキュラムの作成と運用、教科・領域の単元構想、各種学校行事等を進めていく。そして、子どもの問題解決を進める姿を、年間を通して洞察し、全職員で子どもの育ちや課題について語り合うことを大切にしていく。

今年度も昨年度に引き続き、子どもの洞察に基づく話し合いを定期的に行っていく。全職員で子どもに育みたい資質・能力を共有し、子どもの育ちを話し合う際に同じ土台に立って話し合っていく。そこから、教師の働きかけとして重視しなければいけない点なども話し合い、この取り組みの質を上げていきたいと考えている。

（２）子どもが自ら問題解決を進めるための働きかけを吟味すること

わたしたちは昨年度の取り組みから、子どもは「自ら」問題解決を進めることができているか問い直し始めた。ここでいう「自ら」とは、子どもが事象と関わる中でもった思いや願いを出発点に、自らの見方・考え方を働かせて事象に関わることに夢中になっていることだ。子どもが自ら問題解決を進めるからこそ、子ども自身の力で事象のとらえ（概念）をより高次なものへと更新させることができ、そこに学ぶ価値を見いだしていくことになると考えている。

昨年の議論の中で、自ら問題解決を進める子どもの学びを支えるために必要なことを整理してみると、次の３つが挙げられた。

	①　子どもに教科・領域の特質に応じた自由度のある学びの環境をつくること ・事象（人・もの・こと）に十分に関わる単元を構想できているか。 ・自分で選択したり決めたりする場があるか。 ・子どもに問題解決を急がせていないか。等 **②　目の前の子どもの姿を真摯に洞察すること** ・子どもがこれまでにどのような経験を積み重ねてきているのか。 ・子どもが、事象（人・もの・こと）に出合い、どのような見方・考え方を働かせているのか。 ・なぜこの子は夢中になっているのか、なぜこだわっているのかを、行動・言動・表情・友達との関わり等から、どのように考えることができるか。 ・子どもが、事象のとらえを今後どのように更新していく可能性があるか。等 **③　教科・領域の本質を言い抜くこと** ・その単元で、子どもが働かせる見方・考え方や、目指したいとらえの更新（概念形成）について言い抜けているか。 ・その教科・領域の本質に向かうために、子どもの心をくすぐる問いをわたしたちが設定できているか。等
	これら３つのことを常に自分に問い返しながら実践を積み重ね、子どもが自ら問題解決を進めるための働きかけを吟味していきたい。
研究の計画	**≪定期的な研修＞** ①全体研 ②校内授業研究会（年４回） ③年間２回の公開型研究会 ・学習指導研究協議会　６月７日（金）参集型で実施、１１本の授業公開、授業毎の話し合い、 山形大学　江間先生・野口先生　上智大学 奈須先生によるシンポジウム ・秋の研究協議会　　１１月２９日（金）参集型で実施、１１本の授業公開、授業毎の話し合い 山形大学　江間先生・野口先生　によるシンポジウム ④企画研修 ⑤教科等主任会 **≪日常的な研修≫** ①学年部会 ②教科等部会、ブロック部会 ③各分掌部会

令和６年度　山形大学附属小学校　資質・能力系統表

令和6年4月3日 現在

附属学校園 将来構想テーマ	広い視野と高い志を持ち、「共生社会」を創造的に生き抜く子どもの育成		
学校教育目標	「太陽の子」本質を見極める　「北国の子」強い意志をもつ　「日本の子」高い価値を目指す		
研究主題	自ら問題解決を進める子ども		
資質・能力の ３つの柱	**生きて働く 「知識・技能」**	**未知の状況にも対応できる 「思考力・判断力・表現力等」**	**学びを人生や社会に生かそうとする 「学びに向かう力・人間性」**
育成を目指す 資質・能力の観点	**・自分の学びを自分なりの方法でまとめる力 ・これまでの学びと新しい学びをつなげ、とらえを更新する力**	**・問題場面から、課題を設定する力 ・見通しをもって問題解決の歩みをデザインする力 ・さまざまな情報から、目的や状況に応じた情報を選択する力**	**・粘り強く問題解決に取り組む力 ・お互いの持ち味を認め、ともに問題解決を図ろうとする力 ・学びを振り返り、自分に適した学びを調整する力**
高学年	□自分の考えをまとめ、伝える際、客観的な事実や資料、言葉・絵・図・グラフ・表などのツールのよさが分かり、使い分けることができる。 □学習の中で得た知識・技能と既習の知識・技能を関連付けて、各教科で扱う概念を、他の学習・生活でも活用することができる。 （例）各教科で扱う概念 社会…分業、 理科…条件制御などを必要に応じて使いこなすということ。	□問題場面に合った考え方をして、課題をはっきりさせることができる。 □情報を客観的に捉え、信憑性の高い情報を集めることができる。 □問題を解決する方法を複数考え、見通しをもって自分がするべきことを決めることができる。 □目的や状況、相手に応じて表現方法や内容を選ぶことができる。 □主張や根拠、理由を明らかにして、自分の考えを述べることができる。 ＜主に高学年で使っていきたい考え方＞ 具体化する（個別化する、分解する）、 抽象化する（一般化する、統合する）、構造化する等 多面的・多角的に見る	□身の回りの人・もの・ことと関わることをたのしみ、それらのためになることをしようとする。 □困難な課題にも、粘り強く取り組もうとする。 □成功からも失敗からも学び、次に生かそうとする。 □自分と友達の個性を理解し、自分にできること、友達に任せることを分けて考え、協力して活動を進めることができる。 □自分の学びの状況を把握し、自分にあった学習内容・方法を考えようとする。
中学年	□自分の考えをまとめ伝える際、客観的な事実や資料、言葉・絵・図・グラフ・表などのツールがあることを知り、使うことができる。 □文献、ICT 機器等を活用して情報を集めることができる。 □学習の中で得た知識・技能を、他の学習・生活でも活用することができる。	□「なぜだろう？」という気付きから、課題をはっきりさせることができる。 □問題を解決するために自分がするべきことを決めることができる。 □目的や状況、相手に応じて表現方法や内容を選ぶことができる。 □主張や根拠、理由を明らかにして、自分の考えを述べることができる。 ＜主に中学年で使っていきたい考え方＞ 比較する、分類する、順序付ける、関連付ける、理由づける（原因や根拠を考える）、見通す（結果を予想する）等	□身の回りの人・もの・ことと関わることをたのしみ、それらを大切にしようとする。 □課題に粘り強く取り組もうとする。 □成功からも失敗からも学び、次に生かそうとする。 □自分の役割を果たし、友達と協力して活動を進めることができる。 □自分の学びを振り返り、自分の変容を自覚することができる。
低学年	□自分の考えをまとめ、伝える際、自分にとってわかりやすい表現や方法を知る。 □自分の生活や遊びの中で得た知識・技能を学習につなげて、新しい知識・技能を身に付けることができる。	□自分がおもしろいと思うことを見付けて「やってみたい！」という思いや願いをもつことができる。 □試す、予想する、工夫するなどして、自分の思いや願いを表現することでさらに思いや願いを膨らませることができる。 □比べる、予想するなどして、「なぜだろう？」と考えることができる。 ＜主に低学年で使っていきたい考え方＞ 試す、予想する、工夫する、比べる、仲間分けする、つなげる	□自分から身の回りの人・もの・ことに関わることをたのしもうとする。 □友達の気付きや考えに耳を傾けて活動するよさを感じることができる。 □自分が頑張れたこと、次に頑張りたいことを振り返り次に生かそうとすることができる。

参考：　小学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編